
銀魂 - Lonely rainy day -

菜ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂・Lonely rainy day

【Nコード】

N2009U

【作者名】

菜ノ花

【あらすじ】

6月の雨の日の夜、かぶき町にはひとりの少女の姿があった。彼女の名は雨宮志保。あまみやしほ青みのかかった美しい目をした彼女は、雨に怯えているようだった――。

かぶき町で新たに出会った人々、再会した人々が、そんな彼女の凍りついた心を溶かしていく。

真選組に入隊した志保の明るくて、優しくて、哀しいドタバタストーリー！ になればいいと思っています…。

笑いあり、涙あり、…恋もありです！

こんな作品ですが、気に入っていただけたら幸いです。

プロローグ（前書き）

初めまして、菜の花です！

初投稿なので至らないところも多々ありますが、どうぞ
よろしく願います。

ブローグ

私は雨が嫌いだ。

空から降り注ぐ透明な雫。地面をはじく音。

その全てが私の心に冷たく鮮やかに突き刺さる。

雨は自分の何かを洗い流してくれるものだと思っていた。

だけど、それは私には不可能なのだ。

その理由は、今は閉ざされてしまった過去にあるのだろうか…。

その過去を覗いて、何かを見つけることが出来たならば、この苦し
みから解放されるのだろうか…。

けれど、私にはいまだそのすべが分からないままで――

独り、暗闇に取り残されている。

誰か、私を救い上げて下さい――。

プロローグ（後書き）

「Lonely rainy day」とは「孤独な雨の日」という意味です。

最初は「悲しみの」にしようかとも思いましたが、「lonely」って響きがすごく気に入ったので、

みなさんにも気に入っていただけたらいいな。

第1話 雨の日の出会い（前書き）

暑いです……ヤバいくらい暑いですっ！

ついこの間まで雨がたっぷり降っていたのに、もう日差しが…（<

―>）

外で行う部活なので紫外線対策が大変です。

この季節でこのくらいだったら夏本場はどうなるんでしょう。
今から気が遠いです…。

第1話 雨の日の出会い

6月の、ある雨の日…。

時刻は午前3時を回ろうとしていた。

眠らない街、かぶき町もさすがにこの時間になると人通りが全くない。

そんな中、笠を深くかぶりフラフラと傘もささずに歩く着物姿の少女がひとり。

少女は灰色にくすんだ雨空を見上げその憂いの表情で何かを思っていた――。

だが、ついに力尽きたのかフツと前のめりに倒れた。

その場所は、奇しくも真選組屯所の前だった…。

「あー、雨相変わらず降ってんなア。」

暗闇に軽快な声が響く。

真選組1番隊隊長、沖田総悟は鼻歌を唄いながら屯所の周囲を徘徊していた。

月明かりだけがその足元を照らす。

普通はこんな時間に、しかも雨の日に外を歩き回ることなどめったにない。

だが今日はふと目が覚めたのだ。そして自然と足が外に向いた。

気がつくと屯所の方向に戻ってきていた。

明日に差し支えるし（仕事ではなく仕事から逃げるための体力のためだが）そろそろ寝るか屯所に戻る。

しかし、門が見えてきた時、その前に何かが倒れているのが沖田の視界に入ってきた。

沖田は不審に思いながらも近づいて行っ

いつでも応戦できるように刀に手を掛けながら。

いや、何かじゃない——人だ！

沖田はその冷え切った体を抱き起こすと、それは美しい顔をした少女だった。

だがずっと何も食べていないかのようにやせ細り、顔は青ざめていた。

沖田は少女を抱きかかえると、屯所の門をくぐった。

「——雨、止んだ。」そして傘をたたむ。

志保はあたたかい光によって目が覚めた。

目を開けると世界はぼんやりとしていたが、次第にはっきりと見え
てくる。

そこは部屋だった。

ぼんやりとした意識のまま身を起こそうとしたが、起き上がれない。

——何か重い。

横を見ると、栗色の髪の毛にハツとするほど整った顔立ちの少年が
静かに寝息を立てていた。

志保に抱きついて。

その瞬間、志保は覚醒した。

「ぎゃ ああああああー！」

志保は100mm先までも聞こえるぐらい大きな悲鳴を上げた。
悲鳴というよりは断末魔の叫びに近い。

そして襖の向こうからドタドタという足音が聞こえてきた。だんだ
ん近づいてくる。

「なんだア！？ 朝っぱらからうるせー……」

足音の主は襖を開け、志保と目があつた瞬間、身動きもせず固まった。

その男は無造作な黒髪に鋭い相貌を持っていた。そしてもともと瞳孔が開かれているであろう目をこれでもかというくらい見開いている。

志保はそんな瞳孔ガン開きにしなくてもいいから早くこの少年から私を解放してくれないかなー、と心の中で呟いた。

「総悟、トシ。何の騒ぎだア？」

その後ろからゴリラっぽい、というかゴリラそのものじゃね？ という感じの男も顔を出す。

そして瞳孔男と同じく固まった。

「ん、なんでイ。うるせーなー……」

志保に抱きついていていた男が目を覚ましたようだ。眠たそうに目をこすっている。

その少年は、見ていると吸い込まれそうな深紅の眼をしていた。

寝起きで着物の前がはだけ色っぱかった。志保は不覚にも少しドキツとしてしまった。

「あ？　なんでイ、この女は。俺の部屋に無断で入りやがって。」

——　は？　それはこっちのセリフなんですけど！

「てめーが連れ込んだんだろーがアア！！　ちゃんと分かるように説明しろ！」

瞳孔男に先に言われてしまった。

「あー、あー……。あ、思い出した。」

志保に抱きついて寝ていた男——　沖田総悟は、志保を夜中に拾ったという。

そしてとりあえず部屋で布団に寝かせたらつい自分も寝てしまった——　ということなのだそうだ——。

志保は拾ったという表現にカチンとしつつ、助けてもらったのだからと頭を下げた。

沖田の説明を聞きながら瞳孔男こと、土方十四郎とゴリラこと近藤勲はホッとしたような、呆れたような表情をしていた。土方はことさらに怒っていたが。

寝起きだったこともあり、沖田と土方がギャーギャー騒いでいるのをボーッと眺めていた。

そのうち、だんだんまぶたが重くなってきた、3人が気づかないうちにコテンと布団に倒れこんだ。

しばらくして、土方がふと志保の存在に気づいたように振り返った。

「オイ、お前名前は――」

「くーかー……。」

その時には、志保はすっかり眠りの中だった。

「くー……。くー」

「呼びましたかい、土方さん。」

沖田は名前も知らない拾った少女が夢の中にいる間に、隊服に着替えた。

土方が部屋に呼んでいるとひとりの隊士から言伝をもらったので、稽古の後、しぶしぶ来たのだった。

「お前、あんな得体のしれない女連れ込んでどうするつもりだ。」

自分の目の前に沖田を座らせた後、土方が唐突に切り出した。

呼ばれた時から、沖田はこのことの話なんじゃないかと察しはついていた。

「別に、どうもしゃせんよ。」

「お前は無責任すぎる。攘夷志士のスパイかもしれないんだぞ。」

「……直感でさア。」

「あ？」

沖田は雨の中、見つけた時のあの少女の顔が頭に浮かんだ。

気を失っているのに、何かに怯えているかのような、哀しい透き通った顔――。

「あの時、目が覚めた時……。外に出れば、何かいいものが見つかると思ったんでさア。」

そして、目覚めた少女を見た時、それは確信に変わった。

「お前が他人に興味を持つんざ、珍しいな。」

土方は煙草に火をつけ煙を吐き出した。

「ま、もしあの女のせいで真選組に火の粉が降りかかったらてめーに落とし前つけてもらうからな。」

沖田は土方の部屋を出た。

名前さえ知らない雨の中出会った少女のことを思い浮かべながら――

第1話 雨の日の出会い（後書き）

今日はいとこの赤ちゃんの2歳の誕生日です。

遠いところに住んでいるのでなかなか会えませんが、この場を通してお祝いしたいと思います！

Happy birthday

この1年がきみにとっていい年になりますように！

菜の花

第2話 雨模様の空の下 刀が交りあう

再び目覚めた時、外からはまた雨の音が聞こえてきていた。

上半身を起こし少し開いた障子の向こう側をぼんやりと眺めていた。

雨の雫によって弾かれた池の水面が波紋を広げている。

「目が覚めたか。」

襖がパタンと開き、瞳孔を意味もなく開いた男が入ってきた。
煙草のにおいがかすかに部屋に広がる。

「……瞳孔さん。」

「誰が瞳孔だ！ 土方十四郎だ！！」

キレル土方の後からけだるそうな沖田も入ってくる。

土方と沖田は志保の目の前に座る。

その雰囲気から、志保も布団を出て2人の前に正座する。

「オメーは何者だ。」

前置きも何もなく土方が切り出す。

その鋭い相貌で志保を睨みつけている。

沖田はその隣りで面白そうにその様子を観察していた。

志保も土方をじっと見つめ返す。

「……行くあてもなく放浪しているただの人間です。」

ちよつととぼけてみせた。

「ふざけてんじゃねエ、ちゃんと答える!!」

土方が刀を抜き、光のような速さで志保の首元へあてがう。

志保は身じろきもしない。

「そうですね。——私の名前は、あまみやしほ雨宮志保。それ以外はまったく分かりません。」

約2年前――。

真つ暗で雨に濡れた、深い深い森の中で志保は目覚めた。

何もかも忘れ、たったひとりで――。

その時持っていたのは、鋭く研ぎ抜かれ、雨上がりの月明かりで妖しく蒼い光を放つ刀一本だけだった。

それに、「雨宮志保」と18年前の「6月4日」と彫られた蒼く輝く石のペンダント…。

自分の勘だけを頼りに森をなんとか出た。

ひたすら歩いて、人里に着くと耳寄りな噂が志保の耳に入ってきた。

——眠らないネオンの街、江戸。

その人里をずっと南に行くと江戸に出るということだ。

志保はその街をただひたすらに目指した。

「……記憶喪失、ですかイ。」

「まあ、そういうことですね。」

志保の話を聞いた土方は、聞く前より少しばかり表情が険しくなくなっていた。

「まあ、お前の事情は分かった。だがな……」

「話は聞いたぞ！」

襖がスパンと開き威勢良く近藤が入ってきた。

「近藤さん。」

「人の話を盗み聞きですか。随分利口なゴリラですね。」
志保はいきなり入ってきた近藤を見ておもわず言う。

「ちよつとオオオオ、俺ゴリラじゃないから！！ ゴリラっぽくてもゴリラじゃないからアア。」

「ゴリラっぽいこと認めてんじゃねーか！」

「雨宮志保さん、行くあてがないなら、真選組に入らないか？」

その場にいる全員が近藤を見つめた。

「ちよつ、本気か近藤さん！？」

土方が立ち上がり叫ぶ。

「まったく、お人よしの近藤さんらしいですぜ。」

沖田は呆れたような、面白そうな、どこか嬉しそうな表情で肩をすくめた。

「いいだろう、トシ！　こないたいけな少女をほっておく訳にはいかんだろう。」

土方はため息をついた。
そして頭をボリボリ掻く。

こんな敵がいなそうな土方でも近藤には頭が上がらないのだろうと志保は思った。

「わーった。」

土方が志保の顔を真正面から見る。

「ただし——俺と剣ケンで勝負して勝ったらだな。」

「「「！」「」」」

10分後、志保は今にも泣き出しそうな空の下で土方で向かい合っていた。

その傍らで近藤、沖田がその様子をじっと見つめている。

隊士たちには知らせなかった。

面白がった沖田がみんなを連れてこようとするのを土方が止めた。

たぶん、土方の配慮なのだろう。

「準備はいいか？」

土方が刀に手を掛ける。

「いいですよ、いつでもどうぞ。」

志保も2年前から片時も離さなかった刀をスラリと抜いた。

真剣勝負。一歩間違えれば命を落としかねない。

志保は深呼吸する。

深く息を吸うと、落ち着いた。

近藤がふたりを交互に見てから手を上げた。

「では――初め！」

土方と志保は同時に踏み出した。

双方の刀が鋭い音でぶつかり合う。

土方の剣は見えないほどに早い。
だが志保もそのスピードに劣らずついて行く。

いったん離れ、呼吸を落ち着ける。

「なかなかやるじゃねーか、お前。」

「アンタこそ、ニコチンのくせに体力ありますね。」

「お前マジで叩き斬ってやるからな！」

再び刀が交わる。

「そーだ、もう一つあった。」

土方の刀を受け止めながら呟いた。

「ああ？ 何だ、聞こえねーぞ！」

「私がかつていること——あともう一つは……」

ガキイイイン

志保の背中の方こうで、土方の刀が空まで響き渡る音を立て、真つ二つに折れた。

志保は刀を鞘に収めた。

それは、私にはこの剣一本で自分の身を護ってきた、強さがあると
いうこと——。

「……………」

土方は信じられないという表情で折れた刀の先を見ていたが、やがてフツと笑って煙草に火をつけた。

近藤と沖田がふたりのほうへやってくる。

沖田も近藤も笑顔だった。

「アンタ、結構やりますねイ。」

近藤が手を差し出す。

「ようこそ、真選組へ！」

志保も微笑んでその手を握り締めた。

第2話 雨模様の空の下 刀が交りあう（後書き）

ご覧くださってありがとうございました！

志保と土方の戦闘シーン、なんかあっさり志保勝っちゃったなーとか思ったんですけど、なにせ戦闘シーンが苦手なものでして…。

これから真選組のみんなと奮闘していく志保を描きたいと思っているので、どうぞよろしくお願いします♪

そして連載開始から1週間も経っていないのにこんな作品にお気に入り登録してくださった3人の読者様、本当にありがとうございます！

第3話 雨宿りの場所（前書き）

いいですね、日曜日。

もうなんかずっと土曜と日曜であってほしいです。

第3話 雨宿りの場所

志保はシンとした夜の廊下にひとりで立っていた。

見渡す限り人っ子ひとりいない。

さかのぼること2時間前。

土方との対決の後、いろいろ準備があるからと沖田の部屋に押し込まれ一歩も外に出させてもらえず、あぐくについさつき地味の申し子のような男にここまで引っ張ってこられてのだ。

「呼んだら入ってきてください」って言ってたけどどんだけ待たすんだよ？

おいおいおい、これ何の仕打ちだよ？

入隊手続きをするから、と土方に言われていたのだが、何なの？

柄にもなく緊張してきた。

「じゃあ今から新入隊員紹介します。志保ちゃん、どうぞ！」

機嫌が良さそうな近藤の大声にビクツと反応する。

もう、こうなったら行くしかない。

襖を開けるとそこには人、人、人ばかり。

なんだよコレ、人多すぎ！

しかもみんなこっち見てるしイイイ！！

見せモンじゃねーんだよコルア！

そう思いつつもペコツときこちなく頭を下げる。

「あ、雨宮志保です…どうぞよろしくお願いし、ます…？」

頭を上げると、みんな口をポカンと開けたままとか、鼻糞ほじったまま一時停止している。

アレ、私なんか変なこと言っただけ？

「な「いよっしゃあアアア!!」」

「ついに女隊士来たアアア!!」

「いつかは来ると思ってたアアア!!」

「しかもめっちゃ美人だしイイイ!!」

「メス豚だしイイイ!!」

「オイ、誰だ今メス豚って言ったヤツ。」

「俺でさア。」沖田がぬけぬけと言った。

「やっぱりテメーかアアア!!」

何故かみんな一斉に叫び出した。

約1名変なのいたけど。

「局長どこで捕まえたんですか」もう局長もスミに置けませんね
「ノコノコ。」

「ガハハハ、いやいろいろあつてな〜。」

志保を連れてきた（というか持ち込んだ）のは沖田だったが、近藤が気分が良さそうだったので言うのはやめた。

「土方さんもうしたんですかその瞳孔ガン開きの顔〜開きすぎてスミに逝つてろコノコノ〜。」

「総悟オオオオ！！ テメーそこに直れ、叩き斬ってやらアアア！！」

よく分からないがとりあえず受け入れられたみたいだ。

ホッとしているとコップと酒を渡された。

え、酒？

「近藤さん、私未成年…」

「じゃあみんな雨宮志保ちゃんの入隊を祝して、乾杯イイイ！！」

「乾杯イイイイ！！」

「オイ、聞けや。」

近藤の音頭を合図にみんな次々と酒を飲み始めた。

啞然としている志保の隣りに沖田がやってきた。

沖田もすでに酒を飲んでいるのか顔がほんのり赤い。

「雨宮も飲みなせイ。」

「いや、私未成年なんで。」

「大丈夫、俺も未成年でさア。」

「大丈夫な要素皆無ですよ。」

拒否し続けていたら痺れを切らしたのか無理やり飲まされた。

次の瞬間志保の意識は途絶えた。

「アリ？　　おーい、雨宮？」

沖田が無理やりお酒を飲ませると急にぱたりと倒れこんでしまった。

呼びかけても答えない。

「そんなに酒が弱いんなら飲まなきゃよかったのにねィ。」

沖田は自分が無理やり飲ませたことをすっかり忘れて志保の身を起こそうとした。

次の瞬間――

志保がいきなり抱きついてきた。

沖田はその勢いを受け止めきれずに後ろに倒れこむ。

「!？ オイツ、何してんでィ！」

慌てて志保を引きはがそうとするがまったくビクともしない。

幸いみんな酒に夢中で誰も見てなかったが、少し気恥ずかしい。

「にやはは〜沖田さ〜ん」

志保が急に甘えた声を出した。

「…頭壊れたかい？」

「ビドいですよ〜にやははは。」

……コイツは猫か。

「とりあえず俺から離れろィ。」

離れようとするがそうするとますますひつついてくる。

この体制じゃせつかくの酒が飲めない。

沖田は諦めることにした。

周りの騒がしい雰囲気の中で志保の小さな声が聞こえてきた。

「ここの人は、みんな楽しそうでいいですね…。」

「うるさい奴らばっかだけどねイ。」

「すごく、みんな…あつたかいです。」

「暑苦しいだけだけどねイ。」

「ここなら、私も雨宿りできるのかな…。」

「…は？」

志保の表情は、儚げで、寂しげで、今にも壊れてしまいそうだった。

「スー…スー…。」

聞き返した時にはもう沖田に寄りかかったまま眠りこんでいた。

「……。」

コイツも、見えない記憶の中で、ずっと苦しんでいるのかもしれない。

い…。

次の日の朝、志保は激しい頭痛と共に目が覚めた。

——何か重い。アレ？ 前にもこーいうことなかったっけ？

横を見るとまたもや沖田の顔があった。

「ぎゃあああああー！」

ああ…ようこそ、新しい生活。

第3話 雨宿りの場所（後書き）

これで晴れて志保も真選組の仲間です♪

にぎやかな生活、楽しそうだなあ。

真選組のあの雰囲気大好きなんですよね。

でも万事屋も好きです。はやく銀さん達も登場させたいですね。

第4話 思い出せないのに 懐かしくて

再び朝目覚めたら志保に乗っかっていた沖田を押しつけ、志保は局長室を訪れていた。

「改めて真選組というのはな、江戸の平和を護る武装警察なんだ。」

近藤が重々しく説明する。

「そして幕府の將軍様を護ったりもする。つまり攘夷志士が俺達の最大の敵なんだ。日頃から襲われたりもするから、用心しなければならぬ。」

真選組と言うのは思った以上に大変な仕事なんだ。

「真選組は局長、副長、そして各隊を引っ張る10人の隊長がいる。俺が局長で、トシが副長、そして総悟は1番隊隊長だ。」

志保はうなずく。

それである2人はあんなに偉そうなのか。

特に沖田はまだ志保と同年代というのに。

「そこで志保ちゃん、君の役職は「1番隊副隊長でイ。」

沖田が部屋に入ってきて近藤のセリフを遮った。

「総悟オオオオ！！　そこは俺がカッコよく決めるとこだよねエ！？」

「ま、雨宮はまあまあ強いからヒラの隊員じゃ分が悪いだろうって土方さんが言っただけだ。」

見事にスルーされた近藤は部屋の隅にうずくまってしまった。

「私に負けたのに随分上から目線ですね。」

「負けてねエ。ただ刀が折れたただけだ。」

土方も声もかけずズカズカ入ってくる。

みんな無礼だな、オイ。

「往生際が悪いですね副長さんは。だから瞳孔が開いてんですよ。」

「瞳孔関係ねーだろーが！！」

「おうおう、雨宮もって言ってやれイ。」

「テメーは黙ってる、総悟！！」

「志保ちゃん、今日は初の勤務だからトシと総悟にいろいろ教えてもらってやれ。」

いつの間にか復活した近藤さんが言った。

「えー、結構です。」

「露骨に嫌な顔すんな！」

結局2人に江戸の街を案内してもらいながら仕事を教えてもらうことになってしまった。

「オイ、雨宮。」

局長室を出ると沖田が志保の名前を呼ぶ。

「何ですか？」

沖田は志保の顔をじっと見つめる。

「何ガンつけてんですか？」

「…お前、昨日のこと覚えてねーのかイ。」

「は？」

昨日は志保の歓迎会を開いてもらった。

だが沖田に酒を飲まされたところまでしか記憶がない。

「なんかありましたっけ？ はっ、沖田さんまさかあなた私になにかしたんですか！？」

「大丈夫でイ。俺アお前みたいな女には興味ありやせんから。」

「うっ、そう真っ向から言われると傷つく…。」

「……………」

沖田の表情は、心なしか思い悩んでるように見えた。

「沖田さん？」

「てめーらなにやってんだアア！！ 早く行くぞ！」
空気の読めない土方が遠くから叫んだ。

志保は慌てて走った。

沖田はその後をゆっくりと歩いてきた。

「雨宮、お前の隊服はまだ届いてないからその格好でいいだろう。」

志保は沖田に拾われた時の、青地に白い蝶が舞った着物を着ている。

おとといも昨日もいつの間にか寝ていたのですつと着っぱなしだった。

お給料をもらったら着物を買に行こうと決めた。

「まずパトロールだ。俺達は江戸の街の治安を預かってるんだ。悪い輩がいたら即刻捕まえる。」

3人はパトカーに乗っていた。

土方が運転し、助手席に志保、後ろの座席に沖田が座っている。

……コレ、傍から見たら連行されているように見えないか？

まあ、いつか。

「普通は歩きだが今日は特別だ。いつもパトカーでいけると思うなよ。」

「あいあいさー。」

「真面目に聞いてんのか？」

車の中から見える景色は、今まで見たことのないものがたくさんあった。

色とりどりの看板。

見上げるほど大きい建物。

何もかもが新鮮だった。

「あ、甘味処だ。あとで行こうつと。」

「お前もサボりに走るなよ。」
ため息をつきながら土方が言った。

「？」

後ろのシートで、沖田は奇妙なアイマスクをつけ居眠りしていた。

「ここからは歩きでいくぞ。」

パトカーを強制的に降ろされた。

人混みの中を3人で歩いて行く。

2人の真選組隊服を見て、人々が怯えるような表情をするのは気のせいだろうか？

「真選組って一般人にはよく知られてるんですか？」

「ああ、まあな。」

「俗にはチンピラ警察24時って呼ばれてやす。」沖田が口をはさむ。

「チンピラ警察24時!？」

「あとは税金泥棒とか。」

……真選組のイメージどんだけ悪いんだ。

志保が苦笑いしていると、向かい側にさっき見つけた甘味処があった。

「あ、ちょうど甘いもの食べたい気分。」

土方にはサボるなど言われたが、これはサボりじゃない、市民の間で人気の甘味処の調査だ。うん。

先を歩く2人の眼を盗んでのれんをくぐった。

「おじさん、団子2本ください。」

「はいよっ！ 嬢ちゃん、見ない顔だねエ。」

真選組の新人隊員だとはなんだか言わないほうがいい気がする。

「最近この街にきたばっかなんです。」

「そうか、江戸の街はいいよ！ お前さんもきつと気に入るさ。」

「はい、そうですね。」

そんなふうに雑談してたら、またひとり客がのれんをくぐった。

「おい、親父、団子5本ね。」

「あいよ。」

——5本！？

どんだけ甘いものすきなの？

気になってその客の方を見ると――。

ふわふわの銀髪――。

鮮やかな深紅の眼――。

始めて見たのに、その男はどこか懐かしくて……。

眼があつた瞬間、気が付いたら、志保の瞳から涙がこぼれていた。

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で（前書き）

もうすぐ「ハリー・ポッター 死の秘宝 part 2」公開ですね！

私もう熱狂的なハリーポッターのファンなんです♪

映画もいいですが、私個人としては本もより素晴らしいです！！

まだハリーポッターシリーズ全7巻読んでない方は是非読んでみて下さい。

携帯版も出てますので！

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で

その銀髪は、心をざわめかせた。

銀髪男は志保を見て、ハッと驚く。

一瞬固まった後、オロオロと慌て始めた。

「え、お嬢ちゃんどうしたの！？ 何コレ、俺が悪い感じ？」

志保は銀髪男には何も非がないことは分かっている。だが涙が止まらなかった。

後から後から零れ落ちてくる。

「何かよく分かんないけど、ほらっ！ これやるから泣きやんでくれ、頼むから。」

そう言っつて銀髪男は手にしていた団子を2本差しだした。

志保は気持ちさがこみ上げて来て、グスンと鼻を鳴らした。

先ほどまで訳も分からず泣いていたのに、目の前であたふたしている男の様子を見たら自然と笑みがこぼれた。

「ありがとうございます。」

銀髪男もやっと志保が泣きやんだのでホッとしようだった。

「あのさ、確認しとくけど。俺何してないよね。俺ら初対面だよね。」

「そうです。こんなクルックルの天然パーマ見たのは初めてです。」

「アレ？ さっきまで泣いてたよね。」

それには答えずに銀髪男からもらった団子を頬張る。

甘い味が口いっぱいに広がった。

「あなた甘いもの好きなんですね。」

「は？」

「いくら甘い物好きの私でも一気に5本は買ったことないですから。」

銀髪男は一瞬呆けた後、目を輝かせて口を開いた。

「え、銀さんもあんこはこしあん派ですか!」

「志保ちゃんも? やっぱこしあんだよね。」

甘味処で出会ったきれいな銀髪の男は、江戸のかぶき町で「万事屋」というものを営む男だった。

その後、志保と銀髪男は甘い物好きということで意気投合した。

「そうだ。俺アここかぶき町で万事屋つてのをやってる坂田銀時^{さかたぎんとき}だ。お嬢ちゃんの名前は?」

渡された名刺には「万事屋銀ちゃん 坂田銀時」と書かれてあった。

「私は、真……いや、雨宮志保です。」

真選組の新人隊員だと名乗るのはなんだか気が引けた。

「雨宮、志保……？」

銀時は最初志保が泣いているのを目にした時のように驚いた表情になった。

「私の名前、変ですか？」

志保が聞くと、ハツとしたように「いや、なんでもねエ。」と笑った。

「そうだ志保ちゃん、アンタ刀とか持つてるか？」

「え？ まあ持ってますけど」

一瞬真選組の隊士ということを取り戻したのかと思ったが、そういうことではなさそう。

「ちょいと悪いが、見せてもらえねーか？」

不思議に思ったが、銀時の真剣な顔を見て素直に渡した。

銀時は鞘から刀を抜いて――ほんの少し、表情が揺れ動いた。

「その刀がどうかしたんですか？」

「んにゃ……いい刀だな」

銀時はちよこつと笑って刀を返した。

その後、銀時が住む万事屋を訪ね、今に至る。

万事屋には、2人と1匹の住人がいた。

玄関をくぐると、メガネをかけたあまり印象に残らない男の子と、頭にぼんぼりをつけたチャイナ服の可愛い女の子、それに真っ白な毛で覆われた愛くるしい目の巨大犬だ。バタバタと玄関まで出迎えに来てくれる。

「銀ちゃん、誰アルかこの子。銀ちゃんのコレアルか。」と小指を立てながらしきりに言われたがそこはスルーした。

「コイツは新八と神楽。まあ、万事屋の従業員だ。」

「志村新八です。よろしくお願いします。」

「フン、万事屋のヒロイン神楽アル。」

スルーされたのが気に食わないのかそっぽを向いて言う。

「ワン！」

「あ、この子は定春です。」

志保はにぎやか過ぎる3人+1匹に迎え入れられた。

「やっぱあんこはこしあんだよね。」

「はい、つぶあんのつぶつぶした感じよりこしあんのなめらかな食感のほうが好きです。」

あんこ談議に華が咲く。

「何言ってるアルか！ そんな甘ったるいものなんか頭がクルクルパーの奴しか食わないネ！」

「神楽ちゃん、クルクルパーって俺のこと？」

「あなたには聞いてませんよ、チャイナさん。あんこは甘い物の王様です。ま、つぶあんは邪道ですが。」

「そうですか？ 僕はつぶあんも好きですよ。」

「だーってるメガネ。ちなみに俺はうぐいすあんも好きです。」

「何さり氣に自分の好み発表してんですか！ 持ってきてほしいことバレバレですよ！」

「そーですよ。あなたがどんなにうぐいすあんが好きでも私はこしあんしかお土産にはもってきませんから。」

「持ってくるんだ！ こしあんは持ってきてちょうんだー！」

ガブッ

「あだだだだー！！ 定春、噛んでる噛んでる！」

「お前らがうるさいから噛んだアル。定春はお利口ネ。」

「そうですね。どっかの同じ白髪よりよっぽど賢そうですね。」

「お前も含まれてるんだヨ。」

「だそうです、天然クルクルパーマ。」

「志保ちゃんンンンンン！？」

10年来の友達のように、スツと馴染むことが出来た。

万事屋の3人は、雨の日の仕事帰りに明かりのついている家に帰ったようなあったかさがあった。

心から、笑顔が綻んだ。

銀時は神楽や新八と一緒に騒いでいる志保を見て、フツと微笑みを浮かべた。

その直後に志保に「何ニヤけてるんですか。気色悪いですよ。」と言われ引っこんでしまったけれど。

気が付けば、窓から茜色の光が差し込んでいた。

「もうこんな時間かよ。」

「そーですね。次はこしあんのまんじゅう1人分持ってきます。」
志保は立ち上がりながら言った。

「1人分って、僕の方ですよ、志保さん!!」

「何言ってるんだ、俺の分に決まってるだろ!!」

ギャーギャーわめき出す2人を一瞥した後、志保はにこりとして言った。

「何言ってるんですか。私が食べる分です。」

ソファーに座って黒いオーラを出す2人とつかつかってくる神楽を完全にスルーして定春を撫でていると、外のほうからバタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

その音はどんどん近づいてくる。

「「「雨宮ノ志保ちゃん!!」」」」

そして、ガラスと玄関の戸が開く音がし、真選組トリオの近藤、土方、沖田、それにキング・オブ・ジミ的な誰かがなだれ込んできた。

「みなさん、一体どーしたんですか。」

「雨宮…テメー今までどこほつき歩いてやがったアアア!!」

一瞬立ちつくした土方だったが、いきなり志保の首元を掴みあげグイグイ締め上げた。

「あ。」志保は一緒に巡回していた土方と沖田をすっかり忘れていた。

ものすごく恐ろしい表情をしている。

志保はそれにも動じず答える。

「すいません。でも甘味処で銀さんに会ってから、ずっとここにいましたけど。」

土方の背中越しに、安堵したような近藤、ベスト・オブ・ジミと、やれやれと首を振る沖田が見えた。

「志保ちゃん、もしかして俺のこと覚えてない？　しかもさっきと今で何か呼び方変わってるし…。」

「すみません。あなたの存在自体知りませんでした。」

「何それエエエ！！　俺山崎、山崎退だからアアア！」

「あ、何？　志保ちゃん、コイツらと知り合いなの？」

顔を上げ銀時が尋ねる。

「志保ちゃんは真選組^{ウチ}の新入隊員だ！」
近藤が大声で答えた。

「お前、税金泥棒の仲間だったアルか！　どうりでやな奴アル！」
神楽がさも気分が悪そうに叫んだ。

「チャイナ、てめーは黙ってるイ。」

「なんだとコラ。ガキは黙ってるアル。」

「てめーのほうがガキだろ。」

沖田と神楽はメンチを切り合う。

「ところで副長。なんでそんなに慌ててるんですか。」

志保がそう言うのと土方はますます慌てて志保を離れた。

「なっ、慌ててねーよ。」

その様子を見て銀時はハハン、という顔になった。

「志保、今度俺の分のこしあんも持って来てくれよ。」

志保は訳が分からなかったが、口を開く前に土方にまた首根っこを掴まれた。

「礼なんざ言いたかねエが、うちのモンが世話になったな。」

「別に、俺アなんにもしてねエよ。」

「フン。帰るぞ。オイ、総悟！」

神楽と相変わらず喧嘩していた沖田も「へーい。」とついてきた。

「二度と来ないヨロシー！」

玄関から顔を出して叫ぶ神楽に、志保もベーツと下を出した。

「雨宮。土方さん、お前がいないことに気付いた時、ものすごい焦ってましたぜ。」

帰りの車の中、後ろの座席に並んで腰かけていると、沖田がこっそり耳打ちしてきた。

「え、ホントですか？ 副長。」

「コラ総悟、聞こえてんぞー！」

土方が運転しながらブチギレる。つーかちゃんと運転しろよ。

「俺が目を離したからこうなったとか言ってやしたし。」

「攘夷志士にさらわれたかもしれねえ、とも言っていました。」

「山崎、後で裏に来い。」

「なんで俺だけエエエエー！」

「土方さんは心配症ですねイ。」

「でも沖田隊長もものすごく心配してたよ。」

「え？」

「隊士全員に連絡して探させたりして、江戸中走り回ってたよ。」

「へえ…。」

「山崎、後で裏に集合な。」

「また裏アアア！？　つーか裏ってどこの裏よ！」

「ガハハハ！　お前ら喧嘩はほどほどにな。」

「ていうか局長。これは喧嘩ではなく死刑^{リンチ}になりそうです。」

志保は4人の声を耳に聞きながら、窓の外を眺めた。

今朝も見た、かぶき町の景色がオレンジ色に、染まっている。

「銀さん。志保さん、次来る時まんじゅう持ってきてくれますかね？」

志保が帰った後、新八が期待するように言った。

「さーな。」

「税金泥棒の仲間になんか二度と来ないでほしいネ！」

「神楽ちゃん、そんな言い方はないだろ！」

ギヤーギヤー騒ぎ出す新八と神楽を尻目に、銀時はジャンプを読みながら椅子をキーキー鳴らす。

雨宮志保――。

それは、懐かしすぎる名前だった。

あんなに風貌もそっくりなのに、名前一緒なんて…。

ましてや持っている刀でさえアイツがいつも肌身離さなかったものと同じだった。

――いや、そんな訳ねエよな。

夕暮れの中、思い出されるのは何年も前に死に別れた少女のことだった。

「俺、どんだけ未練がましーんだよ…。」

銀時の弦きは、誰にも届かず夕暮れの中に溶けていった――。

（つーか狭すぎですよコレ！）

（しかたねーだろ、後ろ座席3人なんだから。）

（よーし、山崎降りろイ。）

（なんでいっつも俺なのオオオ！？）

第5話 溶けてしまいそうな茜色の中で（後書き）

第5話、ご覧いただきありがとうございます！

まず、2週間近く掲載できなくてごめんなさい！！

実は私つい先日まで期末テストがありまして…。

あるうことか七夕と沖田の誕生日をテストで過ごしてしまったので…。

ううう…。

でも、これからは夏休みなので、バンバン掲載していきたいと思います！

どうぞよろしくお願いいたします♪

第6話 仲間であることの証

朝。

昨日まで雨がしとしと降っていたのに、今日は雲ひとつ空になかった。

新しくもらった部屋で、外から差し込む日の光に目を細める。

沖田から借りた寝巻のまま縁側に出ると、庭の葉っぱに朝露が静かに零れ落ちている。

志保の体をしつとりと蒸し暑さが包んだ。

ああ、…夏が来たな。

「志保ちゃん！！ 君の隊服が届いたぞー。」

初夏の朝、屯所に近藤の明るい声が響く。

「へー、そうですか。じゃっ。」

志保は笑顔で言い、背を向ける。

「ちょっとオオオ！！ 志保ちゃんンンンン！？」

「だって、あんまりそーいうの興味ないですもん。」

「いいから着ろ。そいつアてめーが真選組の一員っていう証なんだよ。」

土方も話に加わる。

「それにお前の隊服は他の奴らのと違って特注だ。」

「でも…。」

なおも洩る志保に、沖田もひょうひょうと近づいてくる。

「ほお。お前、そんなに似合う自信がねーのかイ。」

挑発するような沖田の言葉に志保の眉がピクリと動く。

「そんなことないです。いいですよ。じゃあ着てやります。」

志保の言葉に近藤が嬉しそうな叫び声をあげた。

そんなに私の隊服姿見たいか。

志保はハメられたと思ったが、いまさら後には引けないので渋々別室に移動した。

「コレ…何か短くないか？」

別室に行き段ボールを開けた志保は即座に後悔した。

中には、隊長クラスの人たちが着ているようなスカーフ付きの上着だ。

ただ、問題なのは下だ。

スカート。

しかも短い。

「志保ちゃん、まだ？」

「はいはい、分かりましたよ。着りゃあいいでしょ。着りゃあ…。」

近藤の催促する声に半ば開き直って志保は着替えを終えた。

「局長ー。着替え終わりましたよ。」

部屋から顔だけ覗かせ外の様子をうかがうと、そこには近藤だけではなく土方と退屈そうな沖田もいた。

なんで局長^{コリッ}だけじゃなくまだ副長^{メグ}と隊長^{サト}もいんだアアア！！

私の隊服見て笑われるのがオチだろうが！！
悲しい結末になるのが見え見えだろうが！！

志保は心の中で叫んだ。

「遅エよ。どんだけ待たせんだ。」

「俺ア忙しいんでさっさとしてほしいんですがね。」

「お前はサボって寝るだけだろ。」

「ちよっ…局長。なんでこの2人もいるんですか。」

「志保ちゃんの隊服初お披露目だ！」

「何嬉しそうに言ってたアアア！！！」

志保は引つ張り出そうとするクソゴリラに抵抗して障子に貼りつく。

「何やってんだ。さっさと出てこい。」

「や、ちよつ…。」

無理矢理みんなの前に出された。

めっちゃ恥ずかしい。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………ちよつと、何か言ってくださいよオオオ!!」

固まっていた3人は志保の叫び声で我に返る。

コレ地味に傷つくんですけど。

静かになるのホントに地味に傷つくんですけど。

「…や、可愛いよ。ウン、すごく可愛い!」

「局長、無理しなくてもいいですから。」

「まア…馬子にも衣装みたいな？」

「副長私に聞かないでください。」

「…アレだねイ。豚に真珠。」

「アンタはやっぱり豚関連かアアア!!」

……似合わないなら似合わないってハッキリ言えやボケ。

「副長、書類持ってきました。」

そこに実は監察だった山崎がやってきた。

「おう、山崎ご苦労だったな。」

「あ、山崎さん。この格好変ですか？」

「ん？ 全然、すごく似合ってるよ。」

「ホントですか!？ さすがジミー山崎さん!!」

志保は山崎に抱きついた。

「ジミー!？ 何それ、地味からきてるの？」

さすが山崎さん。

後ろの3人と違って女性の扱い方が分かってる。

「ちよつ、志保ちゃん！ めっちゃ見てるから！！ 副長達こつちガン見してるから！！」

「そんなのいいじゃないですか。あんな野郎ほつとけほつとけ。」

「いやいや全然よくないから！！ 志保ちゃんには見えてないけど副長と隊長今凄い顔してるからね、バックに鬼出てるからねエエエ！！」

「山崎、夕方裏に來い。」

「またそのネタアアア！？ しかもなんで夕方！？」

「山崎、土方さんが終わったら1時間後また裏に集合でイ。」

「同じことの二の舞！？」

「ガハハハ！！ お前ら仲が良いなー。」

「どこですか！？ つーか局長のセリフ前話ともろカブってますよー！」

「いいことですよ、仲がいいのは。」

「志保ちゃん見捨てないでエエエ！！」

志保は4人を後にしてその場を去った。

その日はそれからすれ違う人みんなに隊服のことを褒められ、志保は内心舞い上がっていた。

そして夕方、1時間おきに2回ほど山崎に叫び声がどこからか聞こえてきた。

第6話 仲間であることの証（後書き）

もうすぐ夏祭りや花火大会の季節ですね。

毎年楽しみにしているんですが、今年は原発事故の影響で花火大会は10月に変更になり、自分の町内の夏祭りは中止になってしまいました…。

でも、夏の風物詩を今年もしっかり楽しみたいと思います！

第7話 買い物へレッツゴー

ある日の朝、志保は新しく届いた隊服に身を包み廊下をブラブラと歩いていた。

忘れ去られてるかもしれないが、志保は一応「真選組1番隊副隊長」というポストを貰ってしまったので、近藤、土方、沖田以外は全員部下という状態なのだ。

そして18歳だと思われる志保は沖田と並んで隊内で最年少。

なのに自分より年上の人間達から「雨宮さん」や「副隊長」などと呼ばれるのは歯がゆい。

まあ、でもそこは仕方がないわけで。

「志保ちゃん！」

巡廻へ向かおうとしたら、近藤に呼び止められた。

「何ですか？」

「いや、前に着物を買に行きたいって言ったただろう？ だから今日は休めでいいから行っておいで。着物だけじゃなくいろいろ生活に必要なものも買ってくるといい。」

そう言っで巾着を渡された。

ずっしりと重く、中にはそれ相当の金額が入ってそうだ。

「え、でもこのお金……。」

「いいんだよ。俺だっでそこそこ稼いでるんだから。」

そう言っでガハハハと笑った。

ああ、局長が神様に見えます（ゴリラの）。
後ろに何か輝いて見えるよ（バナナが）。

確かに仮にも真選組局長なんだから稼いでないことはないだろう。

それに自分は無一文だった。

ここはありがたく申し出を受けることにしよう。

「ありがとうございます。」

「うん、じゃあ行っでおいで。」

近藤に見送られて門をくぐった。巾着の重みに、近藤の優しさを感じる。

「雨宮ー？ 何やってるんでイ。」

屯所の塀の角を曲がったところで、聞き慣れた声に呼び止められた。

「隊長。」

1番隊隊長である沖田とは、同じ隊の隊長と副隊長であることもあり、最近はよく一緒だった。

「局長が、いろいろ買ってきていいって言ってたので、買い物に行ってきます。」

「じゃあ、雨宮は江戸のこと知らねエーだし俺が案内してやりやしようか？」

「結構です。だいたいあなたバリバリ仕事じゃないですか。じゃっ。」

沖田の目の前を通り過ぎようとすると、腕を掴まれた。

アレ、なんかこのシーン少女漫画っぽくない？

っーか早く買い物行きたいんですけど。

「俺が案内してやってるって言うてんでイ。それを断んのかおーコ

ラ。」

「隊長、キャラ変わってますよ。小悪魔が大魔王に変身してます。」

「俺アいつだって自分に正直に生きてらア。」

「そりゃーそうでしょう。隊長は正直すぎます。」

「よし、ここで永遠に眠らせてやるか。」

「いえ、喜んで一緒に来てください。」

志保が即答すると沖田は「分かりやいいんでイ。」とコロッと笑顔になった。

何だか今日も大変そうです。

「で、まずはどこに行きたいんでイ。」

かぶき町の繁華街へ志保を引っ張ってきた沖田は言った。

「そうですねー。まずは着物を買いたいです。」

「じゃああそこがいいでさア。」

そう言つて沖田が指さしたのは、いかにも高そうな呉服屋だった。

「え、あんな高そうなところ無理ですよ！」

「着物だけでも綺麗なほうがいいだろイ。」

「オイそれどういう意味ですかコラ。顔はブサイクってことですか。」

「じゃあ入りやしよう。」

「無視ですかコノヤロー。」

志保は強制的に呉服屋の中に連れていかれた。

クソー。分かってますよ。

自分の顔が整ってないことぐらい分かってますよコノヤロー。

でもあんなハッキリ言わなくなつたっていいだろーがアアア！！

「ホントバカだな。」

そんなこと思ってるわけねーだろイ。

そんな沖田の呟きは志保の耳には入らなかった。

「いらっしやいませ！」

店に入るとオーナーらしき人が沖田の方に寄って来た。

「旦那、来たぜイ。」

「沖田さん、いらっしやいませ。今日は何をお買い上げで？」

どうやら沖田はこの店の常連らしい。

なんかカッコいいな。

「いや、今日は俺のじゃなくてコイツのを頼んまさら。」

沖田が志保を指さす。

オーナーの視線が志保を捉えて、にんまりとなった。

「おや、沖田さんが女の子連れとは珍しいですね。まさか沖田さんのコレですかい？」

オーナーは小指をあげて言う。

何この人。つかコレ前々回くらいに万事屋のムカつくチャイナさんにもやられたし流行ってんの？

「違いますア。主人とペットで「違いますウウウウ！　あの、お友達です！　お友達！！」

「チツ。」

「いやチツじゃないからね。何周りに変なこと吹聴してんですか。」

もう少しで危ないところだった…。

ほとんどペットって言ってたけど。

そうこうしている間にオーナーが3着着物を持ってきた。

「お嬢さんに似合いそうなものをいくつか見繕ってきました。」

黒地に桜が舞っている柄や、白地に青い花の柄の綺麗な着物が並んでいる。

「わあ、綺麗…。」

志保が決めかねていると隣りにいた沖田が口を開く。

「じゃあ、旦那。コレ全部くだせエ。」

「え？」

「はい、かしこまりました！」

「え？ え！？」

志保が焦っていると珍しく爽やかな顔で笑いかけてきた。

「俺からの入隊祝いですア。」

「…どっかで頭打ちました？」

「ここでお前の頭打ち付けてやろうか。」

「いやとんでもないです。めっちゃ嬉しいです、ハイ。」

沖田は「分かってんじゃねーかい。」と志保の頭をグシャツと撫でた。

こういう時は身長差を感じてしまう。

いや、だってあの隊長が。

私のmyプリンを目の前で堂々と食っちゃった隊長が！

どんな悪い人にも心はあるんですね、うん。

志保が心の中で頷いていると、沖田がオーナーに声をかけた。

「じゃ、領収書は土方十四郎でお願いしまさア。」

さっきの感動を返してほしい。

その後、ふたりは（沖田の邪魔に遭いながら）もろもろの生活必需品を買って屯所に帰った。

「近藤さん、ありがとうございました。」

志保は巾着袋を近藤に返した。

「あれ？　ほとんど使ってないじゃないか。」

「まあ、ちょっと…あはは…でも必要なものは全部買ったので！
では！」

志保は首をかしげる近藤を置いてそそくさと部屋を出た。

言えない……全部副長行きだつて絶対言えない…。

（オイ、俺のところに高額の領収書がいくつも届いてんだけど。）
（誰でしょうね。私じゃないですけど。）

（ぜってーお前だろ。）

（違います！ 隊長です！！）

（じゃあなんで着物3着つて書いてあんだよ。）

（いやそれは…ぎゃあああー！！）

（バーカ。）

第7話 買い物ヘレッツゴー（後書き）

今回副題が見つからなかった…！！

いつもなんなかイイ感じなのが当てはまってたんですけど、今回はちょっとおふざけですね。

でも、いいよね。コメディーだもの（柳生篇のお妙と九ちゃん風）。

第8話 広がる仲間の輪（前書き）

なーんかいつも終わりがワンパターンですね。
もうちつと工夫したいです。

第8話 広がる仲間の輪

「わっ、どうしたんですか局長その傷!？」

沖田とつるんで土方のマヨネーズにわさびを入れたことがバレてしまい、屯所の中を鬼ごっこしていると、近藤がボロボロになって帰ってきた。

「大丈夫さ志保ちゃん、これは愛の試練なんだからなガハハ。」

「どうしたんですか局長、ついに顔面だけでなく頭までゴリラになりましたか。」

「トシー、志保ちゃんが反抗期ー!!」

「大丈夫だ近藤さん、いつものことだ。」

「それどーいう意味ですかコノヤロー。」

話を良く聞くと、近藤には惚れている女の人がいるらしい。そして傷はその人を護衛(という名のストーカー)しようとして照れ隠し(近藤の幻想だが)にボコボコにされた時に出来たものだそうだ。

「あの局長、今の話聞く限りどう考えても嫌がられてると思うんですけど。」

「ガハハ何言ってるんだ志保ちゃんー。お妙さんはシャイなアンチキショーなんだよ。」

「妄想も大概にしたらどうですか。」

「雨宮、もう何言ったって無駄だ。」

なんだか自分の局長がストーカーなんて悲しくなってきた。

次の日、志保が市街を巡廻していると、デレデレとした顔の近藤が歩いていくのを見かけた。

……あの顔は明らかにストーカーだな。

志保と一緒に巡廻していた土方の目を盗み、近藤の後をつけた。

「コラ雨宮どこ行きやがった——！！」という土方の叫び声が聞こえてきたが気にしなかった。

近藤の後をつけ始めてしばらく経つと、結構大きな道場らしき建物が見えてきた。

その門を近藤はくぐる。

「お妙さん！ あなたの勲で…グハア！」

志保は門から片目を出して覗くと、そこには美しい女の人が恐ろしい形相で近藤をボコボコにしている地獄絵図のような光景があった。

——激しく逃げたい！！

志保は回れ右をして全速力で走った。

グサッ

奇妙な音が足元でして、下を見るとそこには鋭く尖ったなぎなたが足から数センチずれた地面に刺さっていた。

「……………」

恐る恐る振り向くと、さっき逃げてきた門のところに、にっこり笑った女性が立っていた。

「そんな慌てて逃げなくてもいいのよ（逃げたら殺すぞ）。」

「……………ハイ。」

「局長が惚れている女性がこんな綺麗な方とは。」

「うふふ、あなたそんな本当のこと言わなくていいのよ。」

「姉上、ちよつとは謙遜を覚えて下さい。」

「そして新八君の姉上様とは。一瞬似てな過ぎて彼女さんかと思いました。」

「ちよつ、そんなわけじゃないですか志保さん！」

「うふふ、そうよ。」

「ですよ、新八君にこんな素敵な彼女さんが出来るわけじゃないですよね。」

出されたお茶をすすりながら志保がサラリと言った。

「どっちにしろ僕けなされてるよねエエエ？」

近藤のストーカー被害に遭っている美しい女性は、どうやら銀時の元で働いている志村新八の姉だった。

「お妙さん！ 新八くんー！ 志保ちゃんー！！ 助けてー！」

庭の洗濯物干しに吊るし上げられた近藤の叫び声は無視した。

「真選組1番隊副隊長、雨宮志保です。」

「志村妙よ。よろしくね、志保ちゃん。」

「はい。」

「でも真選組の1番隊副隊長ってすごいよね。」

「いえ、そーでもないです。上に局長コウジと副長タロウと隊長サトルがいるので。」

「……今すごいルビが聞こえたんですけど。」

「気のせい気のせい、新八君。ダメガネ」

「オイイイイ!! また聞こえたぞオオオ!! しかもなんだダメガネって!!」

「原作では「ダメなメガネ」の略ですが、私的には「ダメ」と「メガネ」の合わせ技です。」

「そんな工夫せんでもいいわアアア!!」

「今日は妙さん、ありがとうございました。今度うちのゴリラが無礼をしたらすぐにご連絡ください。この世から抹消するので。」

「まあ、ありがとう。助かるわ。」

志保はお辞儀して庭に出ると、気絶している近藤を地面に降ろして、引きずりながら志村家を出た。

こんな日も悪くないな、と思いながら東の方が黒く染まりかけた赤い空を見上げた。

「雨宮…どこ行ってやがった？ うおっ、近藤さんじゃねーか！」

屯所に着くと、真っ先に土方が声をかけてきた。

「ゴリラのハントをしながらお茶を飲んでました。」

「はあ？」と言う土方と気絶した近藤を残し機嫌良く志保は中に入っていたのだった。

第8話 広がる仲間の輪（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

実はこの前ご感想を頂いた時、

「『土方&沖田↓志保↓銀時』なんですか？」というご質問がありました。

うーん、確かに「恋あり」とは書いたんですが、いまのところはそういう感じなのはありませんね。

これ以上書くといういろアレなんで止めておきますが…。

少なくとも志保はいまのところ銀さんは恋愛対象ではありません。

「あれ、この人なんか懐かしい。」くらいな感じです。

でも、一応「恋あり」なのでいつかは誰かとくっつきます、たぶん。

それはこれからの展開にご期待下さい！

第9話 過去の破片

「いいか、コイツらは要注意人物だ。」

外で蝉が鳴いている。

それは、毎年1番暑い夏の次期の到来のしるしだった。

「狂乱の貴公子——桂小太郎だ。」

うちわでパタパタ仰ぐ志保に土方が重々しく言う。

「目印はうざったい長髪…見つけたら何よりも優先して斬れ。分かったな？」

「この顔にピンときたら」という指名手配の紙には長い黒髪の男が載っていた。

「要は自分たちじゃ捕まえられる——ってことでしょ？」

「んなわけねーだろ。てめーがコイツが危険人物だってことを知らないでこのこ近づいてって斬られたらいろいろ面倒なんだよ。」

「隊長言っていましたよー、副長が何回も桂を取り逃がしてるって。」

「あんの野郎オオオ！！　あとで叩き斬ってやる！」

あー、暑い。

なんで真選組の隊服ってこうカチツとしてんだろ。

夏バージョンとか作ってくんないかな。

「オイ、雨宮。聞いてんのか。」

「ハイハイ。そいつがいたら髪の毛切ってやりますよ。」

「そっちの切るじゃねエよ！！」

「ハイハイ。」

かぶき町を歩いていると、新しい甘味処を発見し巡回ルートから大きく外れてしまった。

結果、

「思い切り迷いましたアアア！！」

ちなみに志保が巡回中に迷子になるのは3回目だ。

「ヤバイ…副長にドヤされる。」

以前仕方なく迎えに来てもらったときにコテンパンにされた。

その上雨が降ってきて、志保はもう泣きたい気分だった。

ひとりでブツブツ呟いていると、上の方からギャーギャーうるさい声が聞こえてきた。

見上げると、そこには案の定「万事屋銀ちゃん」の看板が。

そしてふと手をつつこんだポケットには何故かまんじゅうが1つ（このネタが分からない人は第5話をチエケラ！）。

「ラッキー。」

足は、自然と階段へ向かっていた。

ピンポーン

「銀さん、志保ですけど。」

チャイムを鳴らし、返事を待たずに玄関を開け中に入ると、そこには驚きの光景が広がっていた。

「！」

志保が万事屋のチャイムを鳴らす数十分前、やっぱり万事屋のチャイムは押されていた。

「どちらさん？ 新聞ならいりませんけどー。」

銀時が玄關を開けると、そこには視界に一瞬さえ入れたくない2人（？）組が立っていた。

「銀時… 今日こそはウンと言ってもらうぞ。」

『おじゃまします。』

うざったい長髪、幕府直々の指名手配犯、桂小太郎。

そしてその桂の片腕でもあるペットのエリザベス。

今1番来てほしくない人物堂々の1位だ。

「なんだよツラ。おめーホントに他に行くところねーのかよ。攘夷志士って暇なのな。」

「ツラじゃない桂だ。銀時、上がらせてもらうぞ。」

桂は勝手にリビングへ入った。

「あれ、桂さん。また来たんですか。」

と新八は言いつつも桂がソファーに腰掛けるとお茶を持ってきた。

「うむ、すまない。」

エリザベスもポニユっという効果音をつけて桂の隣りに座った。

「銀時、これまでも言ってきたが俺と一緒に再び刀を取ろうではないか。」

「……………」

「仲間を失いたくないというお前の気持ちも分かる。だが心配はいらん。俺達は無血革命を重んじているんだ。なっ、エリザベスそうだろう?」

『そうですね、桂さん。』

「……………」

「新八君とリーダーもそう思うだろう。こんな死んだ魚のような目よりきらめいた目の方がいいだろう。」

「……………」

「……………」

「……………」

「無視か貴様らアアアア！！　あくまでだんまりか！！　いいだろう、こっちにも秘策があるんだ。ちよつと悪いがエリザベス、例のアレをとつてくれんか。」

その言葉に反応し神楽が桂の腰のあたりをまさぐる。

「あ、そうそうそれ。」

それはチョコやらキャンディやら銀時の好きそうな甘いものばかりだった。

全て神楽の胃袋に収まった。

「ふふふ、銀時。これを見てもまだ無視を決め込むか？」

「桂さん、秘策消化されちゃいました。」

「何イイイ！？」

満足そうな神楽と怒った桂と、仲裁に入ったエリーとなんやかんやで加わった新八が例にもれず騒ぎ始めた。

漫画でいう白いもやもやの中で殴ったり蹴ったり殴られたり蹴られたりされている状態である。

そんな様子をジャンプに目を落としながら相変わらず無視していた

ら、本日2度目のチャイムが鳴った。

4人は喧嘩に夢中でまったく気付かない。

「銀さん、志保ですけど。」

何だよ、まためんどくさい奴じゃねーか、と顔をしかめて数秒後、大変なことに思い当った。

——ヤバい、今志保は真選組だ。

——しかも記憶喪失ぶっこいてんじゃねーか!!

「ツラア、お前早く逃げろ!」

銀時の叫び声にひとまず喧嘩は収まったが、桂はその場にいたままだった。

ガラッ

「!」

振り返ると、そこには真選組の隊服を着た、志保が驚きの表情で突っ立っていた。

万事屋に入ると、そこには先ほど土方に見せてもらったばかりの、桂小太郎が当たり前のようにそこにいた――。

「か、つら……。」

指名手配犯が、そこにいるのが信じられなかった。

志保自身も驚いた表情をしているだろうが、それを見つめている桂の表情も、見ているものが信じられないという顔だった。

それはあの時の、銀時の表情にそっくりだった。

「志保……!？」

「!？」

なぜこの男が、自分の名前を知っているのだろう。
だが、ひるんでる場合ではない。

『見つけたら何よりも優先して斬れ。』

「桂アアアア！！」

志保は刀を抜き桂に斬りかかった。

その刀を自分の刀で受け止めながらも、桂の表情は変わらなかった。

だが、ふと哀しそうな、憤りを感じているような、やるせない顔になった。

一瞬、手の力が抜けた。

その隙を見て、桂は雨の中オバQのような謎の生命物体を連れて逃げていった。

「待て、桂アアア！！」

その叫び声は虚しく空に響いた。

桂が逃げていった後、志保はすぐに帰った。

「なぜ桂があなたの家にいたのかはまだ聞きませんから。」

冷たい口調を装いながらも、どこか困惑した色を見せながらそう言うて。

そして志保が帰り際そつと渡したまんじゅうは、少し変な味がした。

「今日はあの女とヅラが来て嫌な日だったアル！」

「あれ、銀さんどこ行くんですか？」

「おお、ちよつとヤボ用。すぐ戻るわ。」

プリプリ起こる神楽とお茶を片付けている新八を置いて銀時は外に出た。

雨は、上がっていた。

ゆつくりと歩いて街外れの川に行くと、やはりそこに目当ての奴はいた。

「ッラ。」

「ッラじゃない、桂だ。」

隣りに並びいつものセリフを言うと、やはりいつものセリフが返ってきた。

「志保は…死んだのではなかったのか。」

「…俺だってそう思ってたさ。だけどある日、またふっと現れやがった。」

見下ろす川の流れはゆるやかで、その水は底の小石が見えるくらい澄んでいた。

「初めて見た時はあんまり似てるもんだから、腰ぬかすかと思った。けどな、それ以上に驚いたのは…」

桂は黙った続きの言葉を待つ。

「——泣いてやがったんだ。」

「泣いていた？」

あの白い頬を伝っていた透明な雫は、今でも頭にこびりついている。

「ああ。それでもただのそっくりさんかもしれないね。エッという考えは捨てられなかったな。名前が一緒でも、あの刀でさえ同じだって知っても。」

銀時はしゃがんで川の水を手ですくった。
水は、すべて手から零れ落ちてしまう。

「その考えは捨てたほうがいいな。」

「あ？」

桂を見上げる。その目は真剣だった。

「あの目——アイツと目があつたんだが、蒼く、染まっていた。」

「！」

そうだ。

数年前、死んだはずだったアイツの瞳は、黒い瞳だが瞳の奥が蒼く澄んでいた。

そして——

「アイツは、俺に殺意を持っているということだな……。」

その瞳は、雨空の下で殺気を持つと鮮やかな蒼に染まる――
|。

「……桂。」

「桂じゃない、ヅラだ。あつ間違えた。」

「アイツは今2年前から前の記憶を一切失ってる。つまり俺達のことをなんにも覚えてねーんだ。」

「それは本当か…?」

「ああ、だから志保がお前に殺意を持っているというのは半分当たっていて半分外れてる。」

「……。」

「アイツは、俺達と過ごした日々を忘れてるんだからな。」

銀時は、いつだって忘れたことがなかった。

もう2度と戻ることができない、志保やみんなや、先生と過ごしたあの頃を……。

松陽先生——。

志保、俺達のこと思い出してくれんのかな。

思い出してくれるよな、先生……。

数日後、銀時はお腹を壊して1日中トイレから出られなかった。

原因は、10日も賞味期限を過ぎたまんじゅうを食べてしまったことだそうだ。

第9話 過去の破片（後書き）

今回、めちゃめちゃ長いですね！

2話分に分けようかとも思ったんですが、面倒くさくなりそうだったので。

桂も登場して、いよいよ過去が少しずつ見えてきました…よね？

あと、第8話でお妙さんのことを「新八の姉」じゃなく「新八の弟」にしていたことがある心優しいユーザさんのおかげで発覚致しました…。

「何だよコレ」と思った皆さま、本当に申し訳ありませんでした。

これからは気をつけていきたいと思います！

第10話 夏の夜の風物詩 前篇

7月下旬のあくる昼、庭の隅っこで近藤と沖田が何かこそこそやっているのを、偶然縁側を歩いていた志保は目撃した。

そつえばこの組み合わせは意外と見たことがない。

近藤と沖田が2人きりで一緒にいるのは珍しいし、沖田が昼間あの変なアイマスクをつけて寝ていないのや、近藤がお妙のところに行っていないのはもっと珍しい。

「？」

ニヤニヤしているのが気味が悪かったが、突っ込むとバズーカをぶっ放されそうだったのでそのまま通り過ぎた。

その1週間後、今度はその2人組に山崎も加わっていた。

朝の早い時間に、道場の真ん中で何かやっていた。

小さい机を囲んで、またもやニヤニヤしている。

「？」

誰もいない時間に練習にきた志保だったが、そのまま何もせず立ち去った。

その理由が分かったのさらに3日後の夜中だった。

「…何なんですかこの騒ぎは。」

部屋ですやすや寝ていた志保は、いきなり沖田に叩き起され庭に連れてこられたのだ。

『チキチキ真選組夏の肝試し大会〜ドンドンパフパフ〜』

「何って、肝試しだよ志保ちゃん！」

「そんなのは見りゃあ分かりますよ。そうじゃなくてなんで人をわざわざ叩き起して肝試し？ もう私寝ていいですか。」

隊長と局長がこそこそやってた正体はこれか。

見渡すと庭にはほぼ隊士全員眠そうな顔でいる。

中には明らかに無理矢理連れてこられましたという感じの人もいた。

「何が肝試しだ。くだらねエ。俺は部屋に戻るぞ。」

土方もどうやら沖田の被害に遭ったらしい。

「土方さん、やっぱり今でも幽霊が怖いんですねイ。」

「んなわけねーだろ！ ただめんどくせーだけだ。」

「今でも？」

今でもということとは前にも同じようなことがあったということだろう。

「ああ、前に屯所で幽霊騒ぎが起きたんでイ、そんな時土方さんビビってつぼの中に入ろうとしてたんだぜイ。」

「そうだったのかトシ！」

「うるせえ！！ あん時はただびっくりしてただけだ！！ なんだ
雨宮その目は！」

ジト目で土方を見る志保に沖田のドSの矛先が向かった。

「ほお、雨宮…お前はお化けは平気なんですねィ。」

ビクツと志保の肩が跳ねる。

「え？ 私ですか？ わ、私は平気に決まってますよコノヤロー！
何言ってるんですか。死ねば？ 土方死ねば？」

「なんで俺が死ぬんだよ。」

「え？ まさか志保ちゃんお化けがこわ…」

「おあつと局長顔に蚊がアアア！！」

「ぐほア！」

志保は近藤の顔面を思い切り平手打ちした。

それを見た沖田がニヤリと黒い笑みを浮かべる。

あ、マズい。

「あつ、雨宮の足元に生首が！」

「ひぎゃあああああ！！」

志保は悲鳴をあげて近くにいた沖田に飛びついた。

「あ。」

恐る恐る顔をあげると、真上に志保を見下ろす沖田のドヤ顔が。

志保は慌てて沖田から飛び退く。

「まさか雨宮も幽霊が苦手だったとはねイ。」

「な、何言ってるんですか。今のはさっきぶつけた足の小指がまた痛んで『ひぎゃあああああ』となっただけです。オイ、やめろその笑顔！」

「意外に可愛いところもあんじゃねーかい。」

「なっ、なななに言ってるんだ殺しますよコノヤロー！」

「あ、また後ろに足のない女が。」

「ひっ…ってまた驚くとおもったかアアア…！」

「でも志保ちゃん本気で驚いてたよね。」

「何こんなところで地味な観察力発揮してんじゃねエジミ崎イイ！
！」

「ちよつ、何ジミ崎つてエエエ！？」

「ま、土方さんも雨宮も参加決定で。」

さつきから志保が騒いでいるのを高みの見物していた沖田が口を開いた。

「「はア！？」「」

土方と志保の声がハモる。

「何言つてんだ。俺はやらねーぞ。」

「あらら、やっぱりビビりは直ってないんですねイ。」

「何言つてんだ総悟、雨宮と一緒にすんじゃねエよ！！」

唐突に土方が志保を指さして叫んだ。

「なつ、何自分が図星つかれたからって瞬時に私に矛先向けようとしてんだマヨ方アアア！！！」

「誰がマヨ方だ！！ ビビって総悟にしがみついていただろーが！！」

「ビビってません！ちょっとびっくりしただけです！どこ見てんですかバーカバーカ死ぬ。」

「バカなのはお前だろ！ つーかお前ちょっと涙目になってんの知ってんだからな！！」

「なつてねーよコノヤロー！！ こつちだつて隊長が『足のない女』って言つてた時コケかけたのお前、見てんだからなはっはー！！」

「んなカツコわりーこと誰がするかアアア！！」

「してたのはお前だろオオオ！！」

「あ、ふたりの間に半透明の子どもが。」

不毛な言い争いを続ける2人の間を沖田が指して言った。

「「ぴぎゃああああ！！」」

結果土方と志保、「チキチキ真選組夏の肝試し大会以下省略」に強制参加決定。

第11話 夏の夜の風物詩 後篇

前回のあらすじ。

ある日夜中に叩き起された志保は、『チキチキ真選組夏の肝試し大会』ドンドンパフパフ』に強制参加することになってしまい、その上なんやかんやで幽霊の類が大の苦手なことが発覚してしまったのであった。ついでに土方も。

ルールは簡単。

今から決められたルートで屯所内を周り、何箇所かあるポイントでそれぞれ石を取ってくればいいのだ。

全ての石を取ってこれれば、商品のスイカがもらえるらしい。

「そんなスイカなんて嬉しくないんですけど。」
志保は覚めた表情で言う。

「『いよつしゃスイカアアア!!』」

「喜んでるよ。なんだよ『スイカアアア』って。」

「はい、じゃあ順番決めるんで雨宮もクジ引いてくだせイ。」

「ハイハイ、もう引きますよ。」

沖田が持ってきた白い箱（白つてとこが何か不気味じゃない？ 不気味じゃない。ああそう。）の中に手をつ込みゴソゴソ紙を探す。

取り出し折りたたまれた紙を広げると――

「ラスト決定！。」

そこには最後と大きく書かれていた。

なぜに最後オオオ！？

最後ってなんかやじゃん！！ みんながスイカ食いながら「恐かったよね」とか言ってるそばで行かなきゃなんないじゃん！！ いや、別にスイカ食いたいわけじゃないけど……。

「じゃあ何気に1番を引いた土方さん、ちゃっちゃと言ってきてくだせエ。」

どうやら土方は1番を引いた様子。…コレ明らかに隊長の陰謀だろ。

土方は最後まで舌打ちしながら言い訳しながら暗闇の中に入って行った。

数分後。

——ぎゃあアアアア!!

「今のは副長の…声、ですね。」

「まさかトシ…なにかあったんじゃ。」

「いやまさかね…あはは。」

「つかおめーらも一緒に仕掛けてただろ。」

何故か仕掛け側だったはずの近藤や山崎も悲鳴を数回あげ残念な姿でご帰還し、ついには志保の順番が回ってきてしまった。

みんな疲れきって口から魂飛び出ている状態だったので最初に思い描いたみんながスイカをワイワイ食べてる中しょんぼり、という感

じではなかったが、それだけに恐怖は倍増してしまう。

だが沖田の手前「やっぱ無理です」は通用しない。

「じゃ、じゃあいい行ってきます。」

「どもってるぜイ。」

「う、うるペー！」

「うるペーってなんだようるペーって。」

事前に配られた地図を見ながら（どこまでアイツらは用意周到なのか）恐る恐る廊下を歩く。

「まずは山崎さんの部屋か…。」

あのジミ崎もこそそ一緒にやってたもんな、と心の中で志保は呟いた。

実際にはそんなに冷静ではなくすぐにでも逃げ出して部屋で布団がぶりたいくらいビビっていたのだが。

そうこうしているうちに山崎の部屋たどりつく。

監察という特別部隊なので、隊士たちの部屋があるあたりでも隅の方に部屋があるのだ。

志保はそおつと襖を開ける。

部屋の中は殺風景で、あるものといったら机と布団とミントン道具ぐらいだ。

外を吹く風の音にもビクツとしながら机に近付く。

そこには指定の石が1個置いてある。

とりあえずほーっと息をついて石を手にとると、足に何か勢い良く当たった感触が。

いや、当たったというより何かに掴まれている。

「……………」

下を見ると、暗闇でボンヤリとかすんだ2本の白い手が、志保の足首をむんずと掴んでいた。

「ふぎゃふああああー!!」

「今の声…志保ちゃん早すぎだろ。」

「ザキの部屋のところですネイ。」

「あれアどんなやつでもビビるな。仕方ねエよ。」

「アレ、土方さん。あそこのトラップで引っ掛かったのは土方さんと雨宮だけですぜ。」

「……。」

そんな会話が庭で行われているとも知らず、志保は全力疾走で山崎の部屋から脱出した。

「なんだよアレ、どーやったらあんなのを仕掛けられるんですかコノヤローー!!」

志保の半泣きの叫び声は誰にも聞きとられず屯所の闇に消えていった。

「つ、つぎは食堂……。」

早くも疲労の色が見え始めている志保。

よろよると食堂に入る。

食堂は普段多人数で賑わい活気がある分、今は沈んで見えた。

「今度はどこにあんのよ。」

半ばやけになりながら目当ての物を探すと、それは厨房の台の上にあった。

志保は周りの机の下などを確認し、バツと勢い良く石を手取る。

カチッ

「え？ 『カチッ』 ってなに？」

今度は右も左も下も確認したはずなのに。まさか…

ブチュッという気色悪い音と共に黄色いマヨネーズがポトポト上から落ちてきた。

「……………」

志保は体が震えたが、恐怖からではなく怒りからきたものだ。

「あんのマヨネーズ野郎死にやがれエエエエ!!」

「あんのマヨネーズ野郎死にやがれエエエエ!!」

志保の本日2度目のシャウトは、庭にいるお騒がせ野郎の連中の耳にも届いていた。

「…アレ俺のことだよな。つーか何か怒ってねーか？」

「さては食堂のマヨネートラップですねィ。」

「え、あれはキツイ！ この感じだともろにかぶつちまったみたいだなあ。」

「俺は嬉しいけどな。」

「アンタはね。アンタは嬉しいでしょうよ。」

上から土方、沖田、近藤、またもや土方、それに山崎が口々にグダグダな会話を繰り返していた。

志保は、食堂マヨネートラップの後も次々仕掛け（最早肝試しというよりただの嫌がらせ）を乗り越えた。

ちなみに庭の仕掛けはバナナが次々に飛んでくるという明らかにゴリラ向けのもだった。

「……………ナイ。ココはナイ。」

そして、ついに最後の場所に辿り着いたのだが——そこは道場だった。

道場と言えば、この極度に面倒くさい企画をつくった3人がこそこそやっていた1番危険そうな場所なのだ。

しかしここで止まっても仕方ない。

志保は意を決して敷居をまたいだ。

高い位置にあるいくつもの窓から月明かりが淡く差し込み、なにやら幻想的な雰囲気醸し出していいた。

中には、中央のあたりに小さい机がひとつだけだ。

きよろきよろあたりを見渡して瞬時にそこへ移動した。

しかしそこにはメガネがひとつあるだけだった。

しかもそれは印象に残らない至って普通のメガネだ。

他にどうしようもないのでとりあえずかけてみた。

すると、左右にひとつずつ…気配が現れた。

振り向くと、それぞれ頭からつま先まで隠れる白い布をかぶった人影がゆらゆら揺れているではないか。

小さいほうの影には、持って帰らねばならない石が、その手(?)に握られている。

「僕の…メガネをかえせ…。」

だんだん影が近づいてきて、距離が短くなっていく。

志保は息をのむ。

気絶しそっだが必死で耐えた。

その時機の向こう側に、フツと前触れもなく細い女性が現れた。

「楽しそうね……私も混ぜて……？」

その女の人は月明かりしかない闇の中なのに不自然に白く輝いていて……よく見ると、足がない。

—— 足が、ない？

「ぎゃああああああー!!」

志保より先に悲鳴を上げたのは、白い布をかぶった背の高いほうだった。

そして一目散に道場から逃げていく。

もうひとりのほうも「あつ、待ってくださいー!」と叫んで、石を放り投げて後を追いかけてしまった。

「メガネ、置いてっちゃったよ。」

かけっぱなしだったメガネを取って首をかしげる。

そして落ちている石を拾ったところで、白い女性のこと気が付く。

しかし、そこにいたはずの女の人は、跡形もなくなくなっていた。

アレ、どこに行ったんだ？

つーか足なかったよね。

それにどっかつーと白く輝いているっていうより半透明……。

……………。

「うぎゃあああ本物オオオ!？」

結局志保はその場で気絶。

駆け付けた沖田ら4名によって部屋に寝かされ、その後数日つなされましたとさ。

くおまけく

「ハイ旦那。この前のギヤラでイ。」

肝試しの晩から数日後、沖田は万事屋を訪れていた。

実は沖田は先日の肝試しのためにわざわざ万事屋3人にお化け役を依頼していたのである。

山崎の部屋の白い腕の正体は神楽。

そして道場の白い布の2人組が銀時と新八である。

「それとなぜか新八君のメガネも雨宮が持ってたんで返しときまさら。」

「あ、き、肝試しね。ハイハイ…そこ置いといて。ちょ、今俺のことはほっておいて。」

銀時は肝試しの話題が出たとたん怯えているようだった。

新八もお茶を出した後はげんなりとソファーに座っている。

神楽だけは、「税金泥棒のために働くななんてごめんアルけど、金も貰えたしご飯も腹いっぱい食べれたし、まあいいアル！ 後半寝て覚えてないアルけど。」と元気そうだった。

「旦那方、何かあつたんですかい？」

「別に…何も。」

沖田は、銀時と新八も本物の幽霊を目撃したことを知る由もなかった。

第11話 夏の夜の風物詩 後篇（後書き）

夏の真選組の出来事っていったらまず肝試し、怪談話系があたりますよね？

実は私もそっち系は大の苦手なんです…。

遊園地のお化け屋敷なんてもつてのほか。

中学校の文化祭のでも入れないビビりなので（＜―＞）

でも、銀魂でやると面白いですよね！

私のは面白くないかもですが…。

第12話 水平線のかなた？

「あれ、皆さんお揃いで。何やってるんですか？」

ある日の朝、会議室に行くと近藤、土方、沖田が風呂敷に着物などいろいろなものを詰め込んでいた。

「おう、志保ちゃん！ 何って、海に行くんだよ、海！」

「は？」

浮足立つゴリラに詳しく話を聞くと、どうやら日頃の感謝を込めてみんなで海に行くらしい。

「でも局長、みんなで行ったら江戸はどうなるんですか？」

最もらしいことを聞く志保に、近藤は得意げに笑う。

「はっはっは、志保ちゃん。そんな心配は必要ない！ 行くのは俺とトシと総悟と君だけだよ！」

「近藤さん、山崎を忘れますぜイ」

「がはははは、そうだったなあ！」

「や、そんな心配してないですけどね…」

「ったく、本当にアンタはどこまでも子供だな」

「雨宮、お前もさっさと準備しろ。置いてくぞ」

「なーにアンタも張り切ってんですかクソマヨ。海で魚に食われて死んじまえばいいのに」

「そんなデカイ魚いねーよ！ー！」

「まだ前話のマヨネーズのこと根に持ってますねイ」

「元はといえばアレはお前が用意したんだろーが、総悟」

そんな会話をしながら、真選組海へレッツゴー。

「わあー…！」

初めて目にする海は、どこまでも広がっていて不思議に懐かしかった。

「おおー、よしっトシ、総悟！ スイカ割りしようスイカ割り！」

「アンタら何かにつけてスイカ好きですね。普通ならバナナでしょう。ゴリラなんだから」

「志保ちゃん…俺泣いてイイ？」

浜の隅っこで涙をゴシゴシ拭きながらスイカを食べる近藤を一瞥する志保。

「スイカ割りのスイカなくなっちゃいますよ」

「大丈夫志保ちゃん、局長予備のスイカ10個ぐらい持つてきてるから」

「真選組屯所はどれだけスイカが有り余ってんですか。つか山崎さんいたんですね空気かと思いました」

山崎も近藤と一緒にスイカをムシヤムシヤ食べる。

なんだかお互いに慰め合っているようだ。

つかスイカ10個も持つてくる余裕がどこにあんだ、と辺りを見回すと、どうやらスイカを入れていたらしい袋が半分ほどペタンとつぶれていて、そのすぐそばにお腹を大きく膨らましたオレンジ色の髪の毛のチャイナ娘が転がっていた。

「「あ」「

土方に向けて砂を投げていた沖田と、声がきれいに重なった。

「なんだよ、またテメーらか。健気な庶民から税金とって海でバカ

ンスですかコノヤロー」

「ていうか僕たち、志保さんが真選組に入ってから会う確率高くな
ってません？」

「まったくハタ迷惑なヤツアル。とつとと残りのスイカも置いて失
せるヨ！」

おなじみの3人組である。

最近、目障りなほどよく会う。

まあ、お互いにとってはお互いの存在自体がそもそも目障りなの
だ
が。

「あんだとコラ。それはこっちのセリフだ」

「こちとら愚民どものために毎日働いてんでイ」

「誰がグミですか！」

「いや、3人の近藤さんと同じ聞き間違えしてんじゃねーよ」

「そつだぞ！ これは俺達のスイカだ！！」

「スイカはどうでもいいです。なんならそのチャイナ娘さんに全部投やってもいいですよ」

「あげちゃうのかよ」

不毛なやり取りの中で相変わらず不機嫌そうに銀時が口を開く。

「とにかく俺らが先にこの浜に来てんだ。てめーらはどっか行け」

「ああ？ 警察に喧嘩売るたアいい度胸だな」

「何が警察だ。ただのムサイ集団の塊じゃねーか」

「ふっはっは、残念だったな、雨宮がいるからもうムサイ集団じゃねエさまーみる」

言い争いが取っ組み合いの喧嘩に発展していく。

いつもの黄金パターン。

「あんなチンチクリンなんか女じゃねーよ！！ 残念なのはそっちだブアーカ！！」

志保のこめかみがピクリとうずく。

「オイ銀髪。今アンタなんて言いましたかコノヤロー」

「あ？」

土方の頬を掴んでいた銀時と、銀時の髪を引っ張っていた土方が一同に振り返る。

「誰がチンチクリンじゃアアア！！」

志保が新たに加わり、喧嘩はますますヒートアップした。

「ちよつ、おい冗談だつてば！　もうこの子は冗談が通じないんだからーや、な、ホントに…」

「おいしいい、なんで俺まで巻き込まれんだ、ちよつお前…」

「「「うぎゃああああ！！」」」

喧嘩バトルというか、もう一方的な死刑リンチに変化を遂げていたけれど。

「どうしますかねえ」

「そうだねえ」

「副長達もうボコボコだもんね」

「志保さん完全に目がイってますからね」

新八と山崎は遠目に3人の様子を見つめる。

近藤と神楽はスイカのことでもめている。

「俺たちじゃ止めようとしたら逆にあの世行きだもんね」

「それがオチですよ」

「いい案考えついたぜイ」

「「沖田さん／隊長」」

ふたりが振り返ると沖田が悪戯を考えついたような表情でこちらを見ていた。

「いい案ってなんですか？　沖田さん」

「決着をつけることが出来、なおかつ楽しいこと。それは…」

「それは？」

沖田がニヤリと黒く笑う。

「名付けて…『万事屋VS真選組　浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！』でさあ」

…今日も大変そうだ。

ふたりの心の声が揃った瞬間だった。

「ぎゃアアアアア！」「」

再び青い空と海に死刑執行中の声が響いた。

第12話 水平線のかなた？（後書き）

水平線って案外簡単に見られるんですよ。

でも、地平線ってなかなか見る機会なんかないんです。

だから、生きてるうちに地平線を1度でも見てみたいですね。

第13話 水平線のかなた？

「で、今度は何を思いついたんですか。隊長」

実は前話からいた定春を撫でながら志保は明らかに嫌そうに言った。

「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」の元に集まった万事屋と真選組総勢8人+1匹。

「隊長、あなたってホントに意味の無きことが好きですね。ていうかなんか題名が肝試し…の時と力ぶってますよ」

肝試し、と言った後、かすかに顔色が青くなったのは気のせいではない。

「そんな照れるじゃねーかい」

「いや、褒めてませんから」

「で、なんだよスポーツ大会って。リレーでもすんのか？」

そう言う土方と、志保をはさんで隣りにいる銀時は、顔がはれ上がり紫の青あざがたくさん出来ている。

「副長もどうしたんですかその顔。チャンバラごっこでもしたんですか？」

「コイツ前話でやったことすでに忘れてるよ。ある意味才能だな」

「まあ、リレーっちゃんありレーだねィ」

「」「」「」「」「」「」

沖田の説明も妙に回りくどかったので（わざとだと思っが）まとめると

・浜辺を賭けていくつかの夏らしい競技をする。

・？ビーチバレー（2人参加）

・？水泳リレー（全員参加）

以上のふたつの競技でより多く勝った方が滞在中の浜辺の権利を得る。

「……激しくめんどくせェ」

漏らしたのは銀時だ。

暑さに加え面倒くさがが拍車をかけ、その目はいつも以上に死んでいる。

「そんなことなんでかぶき町の女王の私がしなきゃいけないアル！お前らがさっさと出ていけばいい話ネ！！」

「アンタの頭はそんなことしか詰め込まれてないんですか」

「俺もそんなことやってられるか」

「おお、総悟お前相変わらずいいこと思いつくな！」

と乗り気な近藤ともう諦めている新八と山崎以外一斉に反対意見を述べ始める。

そのことを予想してたかのように沖田は表情を変えない。

「じゃあ勝った方にはスイカもつけまさア」

沖田のひと言に

「マジでかアアア！！　フン、しょうがないからやってやるネ」

「スイカ！？　ホントか沖田君！！　よっしゃ銀さんも喜んでエエー！！」

神楽と銀時、KO負け。

「さあ、雨宮も参加してくれるよなア？」

「断じて拒否します」

「ふーん、そんなこと言っているのかイ？　じゃあ万事屋のみんなにお前が幽霊苦手なことバラしちまおうかなア」

「なっ」

真選組幹部にはもう志保の幽霊嫌いは知れ渡っているが、なるべく広まってほしくない。

「みんなアア、実は志保は幽霊が…」だあアア、分かりましたよ！　参加します！！」

志保も呆気なく2ラウンド負け。

「ケツ、俺はぜってーやんねエぞ」

「あらら、みんながやる気になってんだからそこに水を差さないのが大人ですぜ、土方さん」

「お前が無理やりやらせんだろ」

あくまでも志保と同じで首を縦に振らない土方。

「ヘエ、土方さんがそんな器の小さい男だとは思いやせんでした」

「何言つてんだ。俺はお前らの日頃の行いに我慢強く耐えてる方だぞ」

「じゃあ今回も我慢してくだせーよ。それとも我慢できやせんか？」

ニヤリと笑う沖田にいけないと思っても挑発されてしまう。

「上等じゃねーか。俺が我慢の達人だつてことを教えてやるよ」

よく分からないやり取りのうちに、土方も参加決定。

いつまでも学習出来ない土方だった。

「お前もいいよな？」

沖田が白い巨大犬を振り返る。

なかなか頭がよく沖田に懷いていないこともない（頭には噛みつくが）。

「ワン！」

かくして浜辺を賭けた侍たちの熱き戦いの火ぶたが切って落とされのだった。

「暑いのは気温だけだな」

銀時の呟きに、4人分のため息が重なった。

第14話 水平線のかなた？

結局沖田案「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」を実行することになってしまった一行。

ここで分からない読者のために（この話読者なんているんですか？

by志保）ビーチバレーのルールを軽く説明しよう！

・ビーチバレーは「バレー」とつくようにいわゆるラリーポイント・システム。

・相手コートへスパイクやサーブを決めた場合は自分たちに点が入り、返球ミスまたは反則をした時は相手チームに点が入る。

・2対2で、コート内でのポジションは自由。

「まあ、こんなところですかね」

実は今のルール説明を読みあげていたのはジミー山崎だった。

「山崎さん、ビーチバレーも出来たんですか」

「うん、まあね」

そんなどうでもいい会話をしながら、いつの間にか浜辺の真ん中あたりにセットが用意されていた。

「そっちは誰が出るんですかい？　ちなみにこっちは土方さんと雨宮が出まさら」

「「はア？」」

土方と志保の声が同時に上がる。

この2人よくハモるな。

1度は抗議をしようとした志保だったが、諦めて土方に向き直る。

「あきらめましょう、副長。このサディスティック星の王子様には何を言っても無駄です」

「分かってんじゃないかい」

「そっちがマヨ方君なら俺が出なきゃなア」

「あのクソ女をブツ潰してやるアルヨ！」

万事屋サイドは銀時と神楽が出る模様だ。

「えーと、じゃあ公平に俺と新八君が審判を務めます」

山崎と新八がいるコートネットの部分を挟んで、それぞれの陣地からお互いが睨み合っている。

「やるからには本気出してやるっじゃねェか」

「上等だコラ」

「銀さんが相手でも手加減しませんよ」

「何言ってるアルかガキア、お前なんか銀ちゃんに手も足も出せないに決まってるネ」

最初のサービスは万事屋チームから。

「よし、俺がやってやるよ」

ビーチボールを手にするのは銀時。

「うおりゃあああああ!!」

銀時の手から放たれたボールはネットギリギリ上を通過しものすごいスピードで真選組チームのコートへ落ちる。

銀時のスーパーボールに志保と土方は手も足も出ない。

「ふっはっは、見たか銀さんの華麗なサービス!!」

高笑いする銀時に向かって、山崎がどこから用意したのかホイッスルを鳴らす。

「万事屋チーム、反則で真選組チームに1ポイント」

「なんでだよ!!」

「サービスはコート・エンドラインの後方のフリーゾーンで打つのが決まりです」

「知らねエよそんなこと!! 始まる前に言えや!!」

「こんなの常識ですよ」

「ぎゃははは、カッコつけといて点失ってやがんの!」

最後までわめいていた銀時だったが、ルールはルールなので0―1。

銀時がミスしたためサービス権は真選組チームに移る。

今度のサービスは志保だ。

銀時の二の舞を踏まないようにキッチンとフリーゾーンに移動した。

「じゃあ、いきますね」

銀時のよりかはいくらか緩やかにサービスを打つ。

すかさず銀時が拾い、神楽が「うらあアアアー!」という掛け声と共にスパイクを放った。

その球は白いラインの外側に大きな音をたてて落ちた。

「へっへーんだ、残念、惜しかったですね」

志保が鼻で笑いながら言うと、またもや山崎のホイッスル。

「万事屋チームに1ポイント」

「なっ…」

「どういうことだ山崎イイイイ!!」

土方が山崎の胸倉を掴みグイグイ絞める。

山崎は白目をむいて今にも気絶しそうだ。

「ちよっ、土方さん山崎さん死にますよコレ!!」

久しぶりにセリフを貰えた新八の制止によりひとまず落ち着く土方。

「ゴホゴホ…ボールがちょっとでもラインに触れていればインボールなんです！」

「そんな細かいルールしらねーんだよオオオ!!」

土方が再びキレて山崎の顔面を飛び蹴りした。

「だから常識ですって!!」

「そんなのが常識なのはお前の頭の中だけだわアアア!!」

志保のグーパンチも決まった。

結局山崎の傷が増えただけで、点数は1―1。

再びサービス権は万事屋に。

神楽がボールを見えない速さで土方に投げつける。

ほぼ真正面に来たボールを土方は受け止めた。

グシャッ

普通ならビーチバレーの試合中にはあり得ない音に当人の土方も志保も首をかしげる。

土方の腕で破裂したものの正体…それはボールではなくスイカだった。

「なんでだよオオオ!?　なんでスイカ投げんだこの小娘は!　スイカに恨みでもあんのか!!」

「なんかマヨネーズの顔見てるとイライラして、ついやってしまったアル」

ケロリと言い放つ神楽。

「ボールをスイカにすり替えるってつい域越えてるだろーが!!」

「まあ、その気持ちは分からないでもないですけどね」

「雨宮テメーはどっちの味方なんだアアア!!」

結局スポーツマンシップにのっとりたはずの試合はただの殴り合いへ。

面白そうに見ていた沖田も参戦し、近藤も山崎も巻き込まれ、ハイバトルロワイヤルの完成!

そんな中、それを傍観していた新八の口からお決まりのひと言が漏れた。

「君らとはやっとなんわ」

第14話 水平線のかなた？（後書き）

今回はいつになくグダグダ感満載ですね。

そういえば今日「コクリコ坂から」を見ました！

最近のジブリは前に比べて面白くなってきているし息子のだというのであんまり期待はしていなかったのですが、結構面白かったですよ！

映画館で見る価値アリです♪

第15話 水平線のかなた？

ビーチバレー対決は不毛なやり取りのうちに結果はつかなかったの
で、もうひとつの「水泳リレー」というもので決着をつけることにな
ってしまふ。必然的に。

こちらのルールは、なんやかんやで沖田が独自に考えたものらしい。

・浜辺から各チーム代表がスタートし、海に突き出している岩にタ
ツチして浜辺に戻ってきたら次の人に交代。
・泳ぎの方法は自由。相手チームの妨害も可能。

「オイ、沖田君、ウチの神楽ちゃん泳げねーんだけど」

銀時がさもダルそうに言う。

「え、おたくのチャイナさん泳げないんですか？ ププッ」

「違ーよ。コイツは夜兔族だから日の光が苦手なんだよ」

「夜兔って？」

新八の説明によると、夜兔というのは宇宙最強の戦闘部族で、日の

光を苦手とするらしい。

だからあのボロい傘をさしてたのか。

「っ！か天人だったのか。

「……へエ」

「いや、反応薄いな！」

「いや、もう設定とかめんどくさいんで」

「一応夜兎って神楽の重要な設定なんだけど！ 丸投げしちゃったよこの子！！」

「まあとにかくそっちは2人しか出せないということですね」

山崎が言う。

ちなみに山崎のセリフはこういうところではしか出せない。タルい。

「ちょっと作者アアア！？ そっいう感想とかいらなから、なにタルいって！？」

とにかく万事屋チームは銀時、新八で決定。

「ちょっと隊長。もともとこの対決は隊長が言いだしっぺなんだからアンタが参加しなきゃマズイでしょう」

志保は珍しくもつともなことを言った。

「ま、それもそうさねィ」

沖田も珍しく従い、羽織っていたパーカーを脱いだ。

「よし、じゃあ俺が行くぞ！ この海のシリーズで？ 除いたら1個しかセリフ言っただけーんだから！」

近藤が出番を増やしたいばかりに名乗りを上げた。

「それって山崎より少ないじゃねエか」

ちなみに山崎は？ だけで9個もセリフを言っている。

「なんだとオオオザキのくせに！！」

「審判とルールの説明してましたもんね。たぶん隊長より多いですよ」

「オイオイ、もうめんどくせーからちゃっちゃとやろうや。この俺のセリフまでも空白と改行抜いて文字数832来てんぞ」

「いや、そーいう余計なことはいいいから！」

新八のセリフも前話の「君らとはやつとれんわ」以来である。

「「「しつけーんだよ!」「「「

なんやかんやで先に泳ぐ新八、近藤が定位置についた。

「では行きます! 位置について、よい…スタート!」

再び登場した山崎のホイッスルによって新八と近藤が泳ぎ出した。

「うおおおお!」

なんと、何の取り柄もないと思われていた志村新八16歳が近藤を
一気に突き放し並みならぬスピードで泳いでいる。

ちなみにクロールだ。

「なんだあのメガネ！　アイツに特技なんかあったのか！！」

驚いて土方が叫ぶ。

もうツツコミも反射的になってきているが。

「ハン、みんな知らないだろーがなア新八は泳ぐのが得意だったんだよ！　いやーホントに意外」

「お前も驚いてんじゃないかーか！」

「クソォ！」

近藤は距離を離されすぎて妨害すら出来なくなっている。

「ゴリラざまーみるアル！」

傘をさし浜辺で応援する神楽も嬉しそうに、というか皮肉っぽく叫ぶ。

このまま新八の大量リードで銀時につなぐのかと誰もが思った。

だが次の瞬間――

グワッシャン

派手な音をたてて、新八の顔面はタッチするだけのはずだった岩に強打していた。

新八は額から血を流して水面にぶかぶか浮かぶ。

「なにやってんだ新ハイイイだからお前はダメガネなんだよオオオ
！！」

そうこうする間に近藤はその距離をどんどん詰める。

「行けエエエ局長オオオ！！」

志保も叫んだ。

「何言ってるんだこのクソ女アア！！　ゴリラも顔ぶつけて海に沈むアル！！」

「チャイナ娘は引っこんでいてくださいイイイ！！　局長はバナナがないと顔面なんか強打しません！！」

「いや、それ近藤さんのこと保護してんの？」

やっと新八が意識を取り戻したのはちょうど近藤が岩に手を触れた時だった。

新八も痛む頭を庇いながら懸命に泳ぎ始める。

その速度は近藤といい勝負で、2人は同時に浜についた。

「「「「「行けエエエ！！ 銀さん／銀ちゃん／総悟／隊長！！」
「「「「「」

やっぱりこのメンバーだ。勝負事となると熱くなってしまう。
そっという性なのだ、奴らは。

銀時と沖田はほぼ互角のスピードで泳いでいる。

追い抜いたり、追いつかれたりの繰り返しだ。

「旦那ア！」

「ああ、なんだよ！？」

全力で泳いでいるのでつい大声になってしまふ。

「旦那の泳いでる後を首のない子供がついてきてますぜ！！」

「ぎゃひイイ」

沖田の作戦だと気付いたのは2mほど差をつけられてからだった。

「クソオオ、オイ総一郎君ンンン！！ 銀さんお前の弱点知ってんだからなア！！」

「総悟でさア！！ 旦那、俺には弱点なんてありませんぜ！」

沖田は止まりもせずには答える。その言葉に絶対の自信があるからだろう。

「確かにこの間まではそーだったけどお前の弱点は志保だよ！」

「！！！」

銀時の言葉に、一瞬沖田の動きが止まる。

2人はほとんど折り返し地点のところにいる。

だから会話は浜辺にいるみんなには聞こえない。

沖田の動きを止めた銀時の作戦とはどんなものだったのだろうか。

誰もがそう思い、話の当人の志保は自分の名前が会話に出てきていることなど知る由もなかった。

やはりこの2人も岩に触るタイミングは1秒たりとも変わらなかった。

「オイ、沖田君スピードが落ちてるぜ？」

「Sは打たれ弱いんでイ、旦那。そういうアンタこそ顔が青いんですぜ？」

「Sは打たれ弱いんだよ！」

泳ぎながらもギャーギャーわめく2人に、浜辺の一同は皆呆れの表情を浮かべた。

「なんか…もう浜辺の権利とかどうでもよくなってきました」

ポツリと出てきた志保の言葉に、他5人が一斉に頷いた。

第15話 水平線のかなた？（後書き）

本当はこの海シリーズ？までで終わらすつもりだったんですが、やっぱり書くのが私なので案の定伸びてしまいました。すみません。

でも予定では次話で終わらせるつもりなので！ では。

第16話 水平線のかなた？（前書き）

「水平線」シリーズこれにて完結です！

ギャグですが、締めはちょっぴりシリアスでどうぞ

第16話 水平線のかなた？

『確かにこの間まではそーだった！けどお前の弱点は志保だよ！』

沖田はずっと、銀時の言った言葉の意味を考えていた。

沖田提案の「万事屋VS真選組 浜辺を賭けた夏のスポーツ大会！」は決着がつかず、結局双方交ってスイカ割りをしたりスイカの早食い対決をしたりした（スイカばっかじゃないですか by 志保）。

志保が弱点とは、どういうことだろう。

別に沖田は銀時が幽霊を苦手としているように、志保を恐がっていることなどまずない。

ということは、銀時が言う「弱点」とは別の意味なのだ。

万事屋一行は、江戸からいくらか離れているこの海に無一文で来たという。

仕方ないので、真選組が予約しておいた旅館に3人＋1匹も泊ることになった。

もともと女の志保のために部屋を2つとっておいたので、男6人と志保＆神楽＆定春に分かれることになった。

志保も神楽も不満タラタラだったが、結局は上記に落ち着いた。

部屋で夕食を取る時間も、その後の普段ならゆっくりするはずの間も枕投げをしたりしてギヤーギヤー騒いでいた。

沖田も枕投げに参加し土方のわき腹に枕を2度ヒットさせてやったが、その間上の空だった。

そのことに銀時が気付いていたことを、沖田は気付かなかった。

みんな夜遅くまで枕投げをして騒いでいたが、12時を回るとぐっすりと眠りこんだ。

沖田にこんなに考えさせるひと言を放った白髪の侍も例外ではない。出会ったときから、この男は沖田にとって敵わない唯一の人だった。よだれをたらしながら眠りこける姿を見ているとそんなことは微塵も感じないのだけれど。

やっぱり眠れなくて、昼間の海に出かけた。

旅館は海のすぐそばに建っていたので、数分とかからず辿り着いた。だが海には、先客がいた。

「雨宮…」

砂浜に腰掛けた志保が振り返った。

「隊長。眠れないんですか？」

「…お前は？」

「私も、ちょっと」

志保が海の方に向き直り、沖田もその隣りに座る。

太陽が姿を隠した海は、昼間と違って静かで、幻想的だ。

新月なのだろう。月は見えないが、満点の星が漆黒の空で瞬いている。

「お前は、自分の弱点って何か分かるかい？」

そんな世界の中で、自分でも思わなかったことが口から飛び出た。

「弱点、ですか？」

志保が眉を寄せてこっちを見る。

「そうですね……」

沈黙が、訪れる。

「記憶、でしょうか」

しばらくして、志保がポツリと言った。

「記憶…？」

「はい」

沖田は志保の顔を見る。

その表情は、ずいぶん前に志保の入隊歓迎会をして志保が酔っ払った時に見せた表情を思い起こさせた。

夢げで、哀しげで、今にも消えてしまいそうで――。

でも、ちよっぴり晴れやかだった。

「私が記憶喪失ってことは知ってますよね。だから生まれてからそれまでの、嬉しかったこと、悲しかったこと、幸せだったこと、乗り越えたこと――全部、分からないんです」

そうだった。

でも志保がいるのがいつの間にか当たり前になって、昔から知っているようで、忘れていた。

それを認めるのが、志保に申し訳なかった。

「だから人より人より分らないことが多かったり、何でもないとが強い感情に現れたりして…ちょっと不安なんです。眠れなかったのも、今日のことと胸がいっぱいになっちゃったからかもしれないです」

そう言って、ちょっと笑った。

『確かにこの間まではそーだった…けどお前の弱点は志保だよ！』

確かにそうかもしれない。

だって、沖田は志保の表情や言葉にこんなに胸が苦しくなったり、泣きそうな気持ちになったりしてしまうから――。

「海を見ると、水平線のかなたまで行ってしまいたくなるのは、私だけでしょーか…？」

水平線のかなたか……。

「お前はただ人より感情が豊かで、ただそれが顔に出ないだけでさ
ア」

沖田の言葉を聞いて、志保はさつきより深く微笑んだ。

星だけが、2人を見ていた。

第16話 水平線のかなた？（後書き）

ほんの少し恋愛の兆しが見えてきましたか？

第17話 雨がもたらすものは

夏の雨は、しつとりと全てを包み込む。

午前中は晴れていたのに12時を回ると雲がだんだん空を覆い始めてきた。

どんよりとした雲で空がいつぱいになって、おかしいと思った時には雨が降り出していた。

「クソく隊長、雨が降るの知って帰りやがった」

ビニール傘を1本残してひとりで帰ってしまったのを、いぶかしんでおくべきだった。

後悔先に立たず。

いまさら文句を言っても仕方がないので雨で濡れた道を急ぐ。

綺麗な着物を着た女の子たちが傘を忘れたのかキヤアキヤア言いながら志保とすれ違う。

立ち止まって振り返る。

目の端でチラリと捉えた少女たちは曲がり角の陰に消えていく。

「……………」

できるなら、自分もあんな風になりたかった。

着物のこととか男の子のこととか、普通のことを悩んでいる普通の町娘になりたかった。

そんなの、いまさら叶うわけなのだけけれど。

真選組への道すがらにある大きな橋に通りかかると、真ん中にひとりずぶぬれになりながら佇んでいる人がいた。

紫の布地に大きな柄の蝶が飛んでいる女物の着物を着ている。

ますます雨足が激しくなってきた周りには誰も見当たらないのに、その人は傘もささないでいた。

本当だったら、よけて通ることもできたはずだった。

けれど、ほっとけなかった。

何故か、自分を見ているようで――。

雨は昔から自分の気持ちに反映するようによく降った。

今もそうだ。

アイツを思い出していたら、降り出してきた。

『晋ちやーん』

その呼び方はやめると何度も言ったのに、それは結局変わることはなかった。

『私…必ず生きて帰ってくる。それまで、少しの間さよなら』

お前だけは……そばにいてほしかったのに。

結局あのまま…帰ってこなかった。

いつの日のアイツを思い出しても、やっぱりアイツはアイツで、何も変わらなかった。

その時、ふと雨がやんだ。

上を見ると、半透明のビニール傘。

そのまま目線を横にずらすと、真選組の隊服を着た人間が自分に傘を差し出していた。

顔は暗くてよく見えない。

「何のつもりだ。真選組が指名手配犯に情でも芽生えたか」

「傘…あげます」

続いて、そいつの隊服がスカートなことにも気づいた。

「ほオ、お前が最近巷で噂になってる真選組の女隊士か」

もっとゴツい感じの奴かと思っていたが、力を入れたらすぐに折れてしまいそうに細い体だった。

「そんな傘なんかいらねエ。失せろ」

女はずっと黙っている。

「聞こえなかったのか。早く俺の前から消えろ」

低い声音でそう続けると、女はプルプル震えだした。

――泣きだしたら、斬ってやろうか。

そう思い刀に手をかける。

「だからっ…傘やるって言ってんだろーがアアア!!」

「なッ…」

女は泣くどころか差し出していた傘をいきなり振り下ろしてきた。

すんでのところで避ける。

傘は橋にあたりボキッというおとがしてあっけなく折れた。

「なにすんだデメー」

「なにすんだはこっちのセリフですよ」

「……」

「人が親切に傘あげるって言ってんのに何ですか？ 失せる？ どこのシャイボーイですかあなたは」

口調や言葉が、どこかの白髪天パを連想させる。

「こっちはもうずぶ濡れですよ。傘壊れちゃったじゃないですかどう責任取ってくれんですかコノヤロー」

「…傘壊したのはテメーじゃねエか」

「壊すきっかけをつくったのはそっちでしょう」

女にこんなに罵声を浴びせられたのは初めてだ。

いや、初めてじゃねエか。アイツがいた。

「お前、名はなんだ」

ただ、興味本位だった。

自分にここまでつつかかってくる奴が真選組唯一の女隊士なのだから、名前ぐらい知っておいた方がいいだろうという、軽い気持ちから。

「…真選組1番隊副隊長、雨宮志保です」

その時雨が降っているのに、厚く覆われた雲の間から一筋の光が差し込んだ。

それが、目の前の奴の顔を照らした。

「……な」

美しい蒼い目を見た時
な気がした。

時が、止まったよう

急に、目の前の人から殺意が消えた。

さっきまでずぶ濡れで失せるとか言って傘壊して（実質壊したのは志保だが）志保のことを斬り殺したそうな目で見ていたのに、名前を聞かれて名乗ったとたん、おだやかな、哀しそうな右目で志保を見つめた。

なんで、そんな目で私を見る？

なんで、そんな泣きそうな顔をする？

包帯に隠された左目も、こんな表情を出しているのだろうか。

「…お前、本当に志保なのか」

「そうですが」

しかも、自分を知っているような口ぶりだ。

確かめるように言う。

「嘘じゃねエだろうな」

「なんで私があなたに嘘をつかなきゃならないんですか」

「クククッ…そりゃそうだな」

笑った。

本当に、少し前とは別人のようだ。

「俺のこと、覚えてねエのか」

「…知りませんけど」

「そうか」

「知ってるか」じゃなくて「覚えてるか」だった。

志保の知らない過去の中にこの片目の男も登場人物として出てきて

るのだろうか。

そんなことを志保が考えていると、いきなり笑みが引っこみ表情が鋭くなった。

「なんでだ…」

肩をいきなり掴まれた。

「なんでお前が…幕府を人一倍憎んでいるはずのお前が…」

「え…?」

「お前がッ…真選組そうちにいるんだ…!」

掴まれた肩が、ギリギリと痛い。

「ッ…何するんですか」

「どつやらお前は過去のことを覚えてないようだが」

「……」

「なんでッ……お前なんだ……!!」

雨がまた強く降りだした。

目の前の人は顔に雫が伝っていて、泣いているように見えた。

すると、次の瞬間にはその腕の中に抱きしめられていた。

包まれた時のあたたかさは誰かに似ていた。

誰かは分からなかったが。でも懐かしさは感じられた。

『晋ちゃん』

『だからその呼び方やめろつつってんだろがクソガキ』

『誰がクソガキだコノヤロ。先生にいつもひっついてるアンタの
ほうがクソガキじゃない!』

『先生ー、2人がまた喧嘩してますー』

映像が頭に流れた。

肩の力は消えたが、まだ志保は抱きしめられたままだった。

しかしそれを振り払うことは出来なかった。

「…俺と一緒に、来い」

「!?!」

「お前はそっちにいていい人間じゃねエ。銀時と一緒にするな」

え、銀さん―――?

その言葉をすぐさま否定できないのは、記憶がないから?

この人が自分の過去にいるのを、否定できないから？

分からない。

分かりたくない。

知らない。

知りたくない。

必死に頭の中で繰り返した。

「……ッ」

震える手で、男を突き飛ばした。

男が目を見開く。

「私は…はつきり言って何のことなのかさっぱり分かりません」

「……」

「あなたが誰なのかも知りませんし」

志保はいったん目を閉じて、また開いてから言う。

「確かに私には記憶がありませんが、あなたの言うことは信じられません」

今は分からない。

でもこの人は私の知らない過去を知っている。

そのことを聞きたいのに、聞けない。

聞いてしまったら、今私の中にある何かを失ってしまいそうだから――。

「…今はその時じゃないのかもしれないねエナ」

「……」

「だが、覚悟しておけ」

男はそれを言い残し、背を向けて去っていった。

志保はそこから、男の姿が消えるまで動けなかった。

そのすぐそばに壊れた傘が転がっている。

雨は、今もまだ激しく志保の体に振り続けている。

第17話 雨がもたらすものは（後書き）

高杉の登場です。

高杉は難しいですねー。

第18話 あの男の胸の内

「ねえ、志保ちゃん」

「……」

「志保ちゃんってば」

「……」

「聞いてる？　ねえ……」

「そんなに耳元で言わなくても聞こえますよジミー」

志保は山崎と一緒に書類整理のため土方に閉じ込められている。

土方の部屋なのは土方曰く「サボりをやめさせるため」で山崎は「見張り役」なのだった。

「それならちゃんと返事すればいいじゃないか！」

「うるさいですね……あ、地味ん党代表取締役の山崎退さん、そろそろ会議のお時間じゃないですか？」

「地味ん党ってなんだよ！　っていつか君また逃げ出そうとしてるね！？」

山崎の声は無視して資料をめくる。

このファイルは過激派の攘夷志士が大勢載っているものだ。

ふと、ページをめくる手が止まる。

山崎の声も、周りの景色も全て遠くなった。

そこには、女物の派手な着物を着た不気味な目の男が写真越しにこっちを見ている。

高杉晋介――。

それがこの前雨の中橋の上で出会った男の名前だった。

『真選組が指名手配犯に情でも芽生えたか』

あの時はその言葉をぼんやりとしか聞いてなかった。

危なそうな人だな、とは思ったが、まさかあんな会話をしてはいけない攘夷志士だとは思いつかなかった。

写真を無意識に見つめながら、志保はおとこのことを思い出す。

「今までどこほつつき歩いてたんだ」

あの後屯所に帰ると、土方と沖田が門で待ち構えていた。

ずぶ濡れの志保を見て、ちょっと驚いたように口を開く。

「なんでイ、そのなりは。俺がやった傘はどこにやったんでさア」

志保は濡れた髪に触りながら答えた。

「すみません、いきなり強風が吹いてきて傘ごと川に落ちたんです」

「そんな強い風吹いてねエよ!!」

「俺ア雨宮が『トイレ行つてきます』って言いながら甘味処に入るのを見ましたぜ」

「オイ貴様―何自分の日常風景を他人になすりつけてんだ―」

「え、土方を殺してくれて? 仕方ね―な」

「どんな聞き間違いだ!」

こんないつものような会話をしながらも、志保は普通を装うのに必死だった。

ちよつと気を緩めれば足が勝手に動いて逃げ出してしまいそうになる。

私は――弱い。

「すみません、説教なら明日聞くのでお風呂入ってきていいですか。風邪引きそうなんです」

「じゃあ風呂終わったら俺の部屋来い」

「嫌ですよ。夜に部屋に呼んで何するつもりですか」

そう言いながら土方の脇をすり抜けようとする。

だが、腕を掴まれた。

「オイコラ、何勝手に話終わらせようとしてんだ」

あたたかい手が志保の冷え切った体に触れて…

あの男に――高杉に肩を強く掴まれたことが頭によみがえる。

パンツ

「…あ…」

気が付いたら、無意識に土方の手を払いのけていた。

「…お前」

「……………」

土方も沖田も目を見開く。

「す、みません。土方さんの手、ネチヨネチヨしてて気持ち悪かったです」

「どういう意味だアアア!!」

「土方さん、まさか昨日の夜部屋でコシヨコシヨしてたのが…」

「何お前はありもしないこと言ってたア!! しかもなんだコシヨコシヨって、嫌な表現すんじゃないよ!」

「別にいまさら隠さなくてもいいですぜ。俺ア全部知ってやすから」

「お前は俺の何を知ってた?」

いつもなら見逃してしまうほどの、ささいなやり取り。

何故か喉の奥がツン、とした。

「…じゃあ私、風呂行ってきますから」

志保はいたたまれなくなつてその場に背を向けた。

「…総悟」

「分かってまさア」

志保が去った後も、沖田と土方はまだその場に残っていた。

アイツ…

「何かあったんだな」

「腕が…震えてやしたね」

ああ、と土方も頷く。

「アイツが傘を無くすなんて初めてですねイ」

志保は、傘を誰より大事にしていた。

綺麗な模様の傘はもちろん、気に入らないはずの神楽の番傘やそこからへんに転がっているビニール傘までも。

確実に、何かあったのにそれを自分達には話してくれない。

本当に…お前はどれだけいろんなことを抱え込んでんデイ。

なんで頼ってくんねエんだ。

なんで何も言わねエんだ。

俺達が、俺が…

「そんなに小っせえ存在か」

「俺はもう食堂に行くぞ」

もう辺りはすっかり暗くなっていた。

そんなに長い時間土方と一緒に志保のことを待ち続けていたんだ。

「ああ、そのまま逝ってくださいエ」

「お前は年中そのパターンだな」

そのまま土方は屯所の中に消えていつてしまった。

沖田は空を見上げる。

黒く染まった広い天井から、透明な雨が次々と零れ落ちてくる。

夜に雨が降ると、志保を見つけた時のことを思い出す。

冷え切った体で屯所の門の前に横たわる志保を。

沖田は志保が倒れていた辺りを見つめた。

「……ふざけた女でイ」

——俺の心を、こんなに掻き乱すなんて。

沖田も門のそばから離れていった。

傘もささずに、屯所の外に向かって。

第18話 あの男の胸の内（後書き）

海のギャグ篇から打って変ってシリアスモードですね。

夏休みはたくさん投稿出来てうれしいです。

第19話 心地よい手

この前の大雨と打って変って、空は青く澄んでいた。

それでも、何故か妙な胸騒ぎがする。

心配するようなことは、何も無いはずなのに――。

銀時は今日も暇そうにジャンプの今週号をソファで読んでいた。

神楽と新八はお妙と一緒に買い物に出ている。

ひとりになるのは、久しぶりのような気がする。

最近は…アイツが現れたから。

（こんなこと考えるなんて…今日はなんか落ち着かねーな）

そんなことをぼんやりとっていると、インターホンが鳴る音が聞こえてきた。

「まったくこちら今は依頼を受ける気はねーのによオ……」

そんなことを呟きながら銀時は玄関へ向かう。

「ハイハイ、万事屋銀ちゃんですけどオ……アレ？」

そこには隊服姿の志保が無言で立っていた。

うつむいているので、前髪が顔にかかり一瞬誰だか分からなかった。

志保は大体万事屋に来る時は隊服姿だ。

あのサド少年に似ておおかた巡回中のサボりだろう。

「オイオイ志保ちゃん、俺を驚かすのも大概にしてくんない？」

「……………」

「で、何か用か？　言っとくが毒舌は受付ねーぞ」

銀時がおどけて言っても志保は口を開かない。

いつもはうんざりするくらい嫌味を言われるのに。

「オイ？ 放置プレーですかコノヤロー」

銀時が不審に思い志保の肩を掴んだ。

「……………」

すると突然、銀時に向かって倒れてきた。

「はア！？」

…え、何この展開。

ど、どうしたんだコイツはアアアア！？
いつもならあり得ない光景なのに。

『銀さんってなんでそんなに頭がクルクルパーなんですか？ あ、
頭つてのは髪の毛はもちろんそうですが脳みそも当てはまりますか
らね』

とか真顔で言ってきたのに！ めっちゃ冷たい目で見られたのに！

俺の心ハート一瞬で粉々にしたのに！！

そんなことを心の中でつぶやいていると、志保の苦しそうな声が聞
こえた。

「…ハアッ……」

「お前…熱あんじゃねエか」

志保のおでこと自分のおでこに手を当てながら銀時は言った。

その間も志保は銀時に寄りかかっている。

銀時は志保の息遣いを聞きながら、10年以上前のある冬の日のことを思い出した。

『オイッ、お前熱あんじゃねーか!! 雪中遊びまくるからだぞ。つたくコレだからガキは…』

『なによ、兄ちゃんだってガキじゃない!』

『うるせーな、とにかく安静にして寝てろ』

『はい…ふふっ、兄ちゃんの手冷たくて気持ちいい、です』

布団の中で鼻を赤くして笑う、まだちっちゃな女の子。

「ったく、しょーがねエな…」

銀時はため息をつきながら志保を持ち上げて居間へ向かった。

年頃の女の子なのに、驚くほど軽かった。

志保の苦しそうな表情を横目に見ながら、そんなことをふと思った。

数日前の大雨の日に出会った——いや、出会ってしまった男が「高杉晋介」だと知ってから、何をしててもすっきりしなくなった。

何も考えたくなくて、土方に無理を言っただけのひとりの巡回を回してもらった。

土方は何も言わなかった。

かぶき町を巡回している途中で、ダルくてしんどくて、気分が悪くなった。

その時、「万事屋銀ちゃん」の看板を見つけた。

なんとなく、無性に銀時に会いたくなって、気が付いたらインターホンを押していた。

「オイオイ志保ちゃん、俺を驚かすのも大概にしてくんない？」

ちよつとして出てきた銀時になんとか安心感があって、

「で、何か用か？　言つとくが毒舌は受付ねーぞ」

久しぶりに、心が軽くなって嬉しくなった。

口を開いていつもみたいに言い返そうとしたら、頭がぼーっとして意識が遠のいた。

最後に感じたのは、懐かしい銀時の冷たい大きい手だった。

それは雨みたいで…だけどそれが熱で浮いた体に心地よかった。

第19話 心地よい手（後書き）

ご拝読ありがとうございます！

夏真っ盛りです…。

台風がまた来るっぽいですね。

私雨とか雷とか台風とか好きなんです！

なんだか楽しくなりませんか？

まあさておき「銀魂 Lonely rainy day」では
もうすぐ秋に季節が変わります。

夏休み中には秋半ばくらいまで話を進めたいです♪

第20話 温もり（前書き）

第20話 温もり

ふとおでこに冷たい感触がきて、志保はゆっくりと目を開けた。

ぼんやりとした茶色い天井が映っている。

「お、目が覚めたか」

そう声が聞こえた方向を見上げると、銀時がこっちをいつもの半眼で見下ろしていた。

起き上がろうとすると、

「まだ熱あんだから寝てろ」

と、止められた。

「私…熱あつたんですか」

「お前なー、自分の体調ぐらい自分で管理しろよな。具合が悪いことにも気付かないなんてとんだ大バカヤローだよ、お前は」

散々な言われようだが、心配してくれるのが伝わってきて、何も言

わなかった。

「……この布団、銀さんのですか」

「そーだよ」

「だから匂いがオヤジ臭いんですね」

「お前熱はあっても口は冷めてんのな。万年冷徹なのな」

「……でも、懐かしい匂いですね」

——最近、銀時に関わるたびに「懐かしい」が増えていく。

「……ふーん」

銀時は目を見開いたが、その後そっぽを向いて興味なさそうに呟いた。

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙の後、銀時が口を開く。

「で、何かあったのか？」

「…へ？」

いきなり話を振られたので、変な声が出た。

銀時を見ると何食わぬ顔でジャンプを読んでいる。

「…なんでそんなこと言うんですか」

「お前ってさ、隠し事へタクソだよな」

そうなのだろうか。

沖田には「感情が顔に出にくい」のようなことを言われたが、この人にはそれが分かってしまうのだろうか。

「私、そんなに分かりやすいですか？」

「んー、そんなに分かりやすいってほどでもねーけど…」

銀時がジャンプからちよこつと目を上げる。

「俺には分かるんだよ、なんとなく」

「……………」

銀時がこつちを見てニツと笑った。

「あ、でも沖田君とか土方君も意外とお前のこと分かってるかもしれねーよ?」

「隊長と、副長?」

確かに副長はあの瞳孔開きまくりの目で何でも見れそうだし…隊長もああ見えて洞察力とかあるかも。

「ま、確かに鬼の副長さんはそーだろうけど、沖田君はそーいう意味で言ったんじゃないよ」

またもや感情を読まれた。

「じゃ、どつという意味ですか?」

眉根を寄せて銀時を見ると、呆れたようにふうっとため息をついた。

「お前なー、沖田君がかわいそーだよ」

「？」

志保の頭にはてなマークがたくさん浮かんだが、唐突に銀時は真顔に戻る。

「何か…あつたんだろ？」

「……」

志保は起き上がっていた力を抜いて布団に倒れこむ。

「この人生のエキスパート銀さんに何でも話してごらんなさい！」

「なんでそんな口調が上品なおばさん風なんですか。エキスパートどころか人生の最下位じゃないですか」

「志保ちゃん、素直になりなさい」

「しつこいですから」

布団の中で銀時に背を向ける。

「まあまあ、ホラ言ってみ胸の内をババーンと」

そう言っ腕を広げる銀時はなんだか大きかった。

「銀さんって、何にも考えてなさそうですね」

「アレ？ 今スルーした？」

「でも、本当はいちばんみんなのこと考えてますよね」

「……………」

静かな部屋で銀時は頭をガシガシ掻いた。

「別に俺アそんな大層なことばっか考えてるわけじゃねエよ」

「…周りの人のことばっか考えてるから、話聞いたりしてるから、銀さんのことって意外と誰も知りませんよね」

「聞かれてもいねエのに話さねエよ」

「じゃあ、聞いたら教えてくださいますか？」

銀時の紅い目が見開かれる。

「私が聞いたら…銀さんの子どもの頃のこととか、桂との関係や、あの攘夷志士の高杉晋介のこととか——教えてくれますか？」

何も考えられない頭の中で、ひとつだけ分かったことがあった。

あの時、高杉に抱きしめられた時のあたたかさ
あれは、銀時と同じだった。

銀時の手や、目や、言葉の温もりと、同じだった。

「志保…」

たぶん、私の過去に高杉晋介はいる。

そして、高杉と銀さんはお互い顔を知っているはずだ。

だから、きっと――銀さんの過去にも、私がいる。

「まあ、無理にとは言いませんけど」

「はア？」

でも、それを誰からかの口から聞いてはいけないのだと思う。

自分で、思いださなきゃならないのだと思う。

銀時が呆けている間に志保は布団から出て、上着をはおった。

「もう、帰るのか？」

「まだいて欲しいんですか？」

「いや、どうぞお帰り下さい」

「どういつ意味だコノヤロー」

志保はそばに置いてあつた自分の刀を腰につけ、振り返らないで言つた。

「今日はありがとうございました。認めたくないですけど銀さんのおかげで少しは楽になりました」

「何そのちょっと上から目線…ま、それなら良かったんじゃないの？」

「また何かあつたら、よろしくお願いします。銀さんも——」

「あ？」

「いえ、何でもないです」

銀さんも——辛いことがあつたら、私に話して下さい。

その言葉は、のみ込んだ。

その言葉を自分が言うのは、なんだか違うような気がしたから。

「おう、気をつけてな」

銀時の大きい手が志保の頭を撫でた。

他の人にやられるとガキ扱いされてるようで嫌なのに、銀時のだけは悪い気分じゃない。

志保は銀時の温もりを感じながら、黙って万事屋を出た。

いつかのような、優しいオレンジ色の空が広がっていた。

第21話 仲間なんだから（前書き）

最近ちょっと短めですね。

…頑張ります！

第21話 仲間なんだから

万事屋を出てしばらく歩くと、おさまっていた頭痛やダルさがまた
ぶり返してきた。

「やっぱりちょっと寝ただけで治るってのは甘かったか…」

志保は少しため息をついた。

今攘夷浪士に襲われたらヤバイ、かも。

「オイ」

こんな私ってバカだったっけ？ 銀さんのことバカに出来ねーよ。

「聞いてんのか？」

いや、まだ私はマシな方か。

あの頭笑いの要素100パーだからな。

あ、今気付いたけど100パーの「パー」とクルクルパーの「パー」
ってマツチしてない（笑）？

「テメー俺を無視するとはいい度胸だなア」

「や、やだなア隊長。ほんの軽いジョークじゃないですか」

沖田に首に刀を突き付けられた志保は青くなって言った。

「お前さっきからブツブツひとりで呟いて不気味だったぜイ？」

「何言ってるんですか。読者様に私の考えたすばらしいネタを披露してたんですよ」

「全然面白くねーですぜ」

沖田はため息をついて刀をしまった。

「で、隊長何してるんですか？」

「巡回でイ」

「確か隊長、夜の担当でしたよね今日は」

「団子食べに来たんでさア」

「今前の件丸々なかったことにしようとしませんでしたか？ それにこっちの方には甘味処ないですけど」

「……………」

沖田はそれには答えずに黙って志保に背を向けてしゃがんだ。

「私にケツ向けて何ですか？ 大便ならそっちの茂みでやってください」

「誰がテメーの目の前ですかイ」

「じゃあ何？ と首をかしげると沖田は小さく「乗れ」と言った。

「ちょっと頬が赤く染まっている。」

「なんで隊長の背中に私が乗らないといけないんですか。その背中に温もりが欲しいんですか」

「温もりが欲しいのは私の方かもしれないけど。」

「お前調子乗ると土方並みにうぜーな」

沖田はめんどくせエ、と呟くと志保の腕を引っ張った。

「わっ」

気が付くと志保は沖田の背中におぶわれていた。

なおも志保は降りようとしたがクラツとして結局沖田の肩に頭を乗せた。

「ホラ見ろ、言わんこっちゃねエ」

「私が具合悪いって知ってたんですか」

「お前、朝からフラフラしてただろイ」

お見通しってわけか。

「…ちょっとは旦那のところに行ってすっきりしたのかイ」

なんで頭がぐちゃぐちゃだったことも銀さんのところに行ったこともわれてんだ。

「まあ、はい」

ちゃんと答えたのに、沖田は少し不機嫌そうだった。

まるで拗ねた子供のようだ。

「お前がいつも頼るのは旦那だ」

「……………」

「俺達にも…俺にも、ちったア頼れよ。——仲間なんだから」

『沖田君とか土方君も意外とお前のこと分かってるかもしれないよ？』

『沖田君はそーいう意味で言ったんじゃないよ』

「……………」

自分の頬も赤くなっていたのは、夕陽のせいだろう。

屯所の志保の部屋に着くと、沖田は足で襖を開け放った。

沖田の肩越しに部屋の中を見ると、そこには清潔そうな布団が敷いてあった。

「あれ？ 誰がいつの間に…」

「たぶん土方の野郎でさア。アイツは素直じゃねーから」

苦々しそつに言う沖田。

素直じゃないのはあなたも同じだと思いますけど――。

そう言うのはやめておいた。

だって何より沖田はサディスティック星の王子様で、ここまで志保をおぶってきてくれたのだし、それに志保も自分が少なからず素直な性格じゃないと分かっていたからだ。

布団に入ると、ひんやりしていて気持ち良かった。

「ま、晩飯の時間になったら土方のクソヤローが起こしに来ると思

うんで、それまでゆっくり寝てなせイ」

「寝込み襲わないでくださいね」

「被害妄想も大概にしろイ」

まぶたを閉じようと思ったら、沖田がまだ部屋の入口に立っていた。

「…何ですか？」

沖田は何か言いたそうな目でこちらを見続けていたけれど、「いや、なんでもねエ」と言って今度こそ出て行ってしまった。

よく分からなかったが、今はとにかく眠りたい。

あの人がよく分からない性格なのはもともとだし。

第22話 記憶への架け橋

「お腹すいた〜」

そう呟きながら夜のかぶき町を歩くのはおなじみ志保だ。

沖田におぶわれて帰った日ぐっすり寝たおかげですっかり回復した。

銀時のおかげもあるだろう。

「お礼とかしとかないと何言われるか分かったもんじゃないな…」

グワッシャン

突然ガラスが割れるような音がし、その方向を振り向くと、背の高い男が自分の方に向かって投げだされてきている。

「へぶしっ!」

その男は志保に激突した。

よく見ると、「スナックすまいる」という店のドアが割れていた。

そこにショートカットの女の人が仁王立ちしていた。

「二度と来るなよ」

「そんな、おりょうちゃん」

———
「なんだか局長と妙さんみたいだな。」

そんな風にのんきに考えていると、ショートカットの女性の後ろから見覚えのある人が出てきた。

「……………妙さん？」

以前知り合った新八の姉、お妙はスナックで働いているのだという。始めて入ったスナックはきらびやかで自分の普段いる世界とはかけ離れているように感じた。

「アレ、妙さん何歳でしたっけ？」

「18よ」

「え、私と（たぶん）同じ年じゃないですか！」

沖田や自分がお妙と同年だなんて信じられない。

「大人っぽいですねー」

「うふふ、ありがとう」

「そういえば、今日局長は来ていないようですね」

「ああ、あのゴリラなら昨日かなりボコボコにしたから今日明日はもう来れないと思うわよ」

「……………（やっぱこの人は敵に回しちゃダメだ）」

「ちょっと、おんしゃ」

「スナックすまいる」を出ると、さっきの男に呼び止められた。

「あ、さっきはどうも」

男は銀時とはまた違った風の茶色いもじやもじや頭に、サングラスをかけていた。

しかしその下の顔は人懐っこそうな笑顔だった。

「アッハッハ、さっきは悪かったのう…なんだか知らんうちにおんしにぶつかったようじゃ…ん？」

べらべらしゃべっていた男の口が止まる。

「志保…志保じゃなかか！」

「え？」

どうやらこの笑顔の男も、自分を知っているらしい。

だが、桂や高杉が自分を信じられないというような目で見たのに対し、この男はなんだか普通に昔馴染みとの再会を喜んでいるような感じがした。

ちよつとホツとした志保だったが、次にこの男から飛び出た言葉によつて志保の希望は打ち砕かれた。

「え？」

「生きちよつたのか！ てつきりあの時死んだと思っていたぜよ」

死んだ――？

「いやいやいや、ちょっと待て。私記憶喪失にはなりましたが死んではいませんよ。たぶん」

「記憶喪失？　じゃあわしのことも覚えてないかのう？」

「はい。そんな奇怪な頭はあの白髪天然パーマしか知りませんよ」

「おお、金時は知つちよるか！」

「金時い？」

銀さんのことか？

なんだこの人は。バカな感じなのか？

「おお、わしのこと覚えてないんだったら改めて自己紹介じゃき」

男はサングラスを取って志保に向き直る。

「わしゃ坂本辰馬。「快援隊」つちゅー会社を^{カンパニー}経営しちよる。船で宇宙飛び回っているんな星で商売してるんじゃ」

なんだかスケールの大きい話だ。

宇宙とか星とか——夜空の向こうの話だと思っていた。

「へえ、坂本さんって見かけによらずすごいんですね」

「アッハッハ」志保もその感じ相変わらずじゃのう。戦争に出てたあの頃と何も変わらんぜよ！」

本日2回目の衝撃だった。

「は？ 私が、戦争——？」

坂本は志保の格好を見てハッとしたようだった。

初めてそんな表情を見せた。

「そうかおんし……警察に今いるんじゃないのう。悪いことを言ってしまったぜよ。」

「……………」

「おんしゃ昔から苦労ばつかじゃのう。運命は…残酷じゃき」
さだめ

「わしゃそろそろ船の時間があるから行かんと」

「…そうですか」

「本当なら…一緒にわしの船に来んか、と誘いたいところじゃ。でも、逃げてはいかんじゃろうから」

坂本は最後にも、やっぱり笑った。

ちよつと、切なそうな笑顔だったけれど。

「銀時も…ツラも高杉も、みんな何かと戦ってる。おんしも大丈夫じゃ、頑張れ」

今日出会った不思議な男も、きっとどこかで戦っているのだろう。

志保は坂本の言葉を思い出す。

坂本には、悪気はなかったのだろう。

坂本に今日会って、また自分を知っている人間に出会えて、戸惑いもあつたけれど嬉しかった。

でも、手放しでは喜べない。

『てつきりあの時死んだと思っていたぜよ』

『戦争に出てたあの頃と何も変わらんぜよ！』

このふたつを結びつけると、答えはひとつしかない。

でもこの時志保には、まっすぐにそれを見ることが出来なかった。

第22話 記憶への架け橋（後書き）

辰馬さん、重要なことベラベラしゃべっちゃってますね。

結構好きなキャラですが登場させるのが難しい…。

第23話 朝を待つ

『えー、現在台風11号は京に到達し、明日の午前3時頃には江戸に到達する模様です。以上、現場の結野がお伝えしました』

暗い部屋にぽつんとひとつだけ置かれた赤いラジオから、雑音混じりにアナウンサーの声が聞こえる。

8月ももうすぐおしまいだ。

夏の影の風物詩、台風が江戸にやってくる。

今はもう夜中の12時過ぎだ。

いろんな種類の警報が出され、雨や雷が激しく続いている。

停電によって部屋を照らすものはロウソクの灯りしかない。

隊士たちが集まる部屋の中心あたりに膝小僧を抱えた志保がうつくまっている。

「台風なんてこない……うつ…ピギアッ!!」

雷がゴロゴロ鳴って志保は顔を膝にうずめた。

「なんでイ…雨宮、お前雷も苦手なのかイ。土方さん並みにヘタレじゃねーですかイ」

「俺はヘタレじゃねエ」

「黙っといってください……ふぎゃん!」

「ふぎゃんって何だ、ふぎゃんって」

ますます雷の音が大きくなり、障子の隙間から白い光が漏れる。

「ガハハ、志保ちゃんも可愛いなあ! まあでも台風が来るのは3時くらいだし、みんな寝てる頃だろう」

「明日も台風が来るからって仕事はなくなったりしねエぞ! さっさと寝ろ」

土方の声により皆各々の部屋へ戻っていく。

土方と近藤も去り、沖田と志保だけが残った。

「別に落ちてくるってわけじゃねーんだから」

「ダメなものはダメなんです…」

沖田はため息をついた。

「俺ももう寝ますア。お前もここでひとりでいるよりは部屋に戻った方がいいと思うけど」

沖田はラジオとロウソクの灯を消してあくびをしながら部屋を出た。

「うつ…」

どうせ戻ってもひとりだがここで朝を迎えるのも嫌なので、志保は恐る恐る自分の部屋へ向かった。

部屋もやはり暗かった。

口ウソクに灯をつけ、布団の上に座る。

障子をそつと開けると、ザアツという音が部屋に入り込んできて、激しい雨の感覚が伝わってくる。

志保はふう、とため息をついた。

最近、何かと自分の生い立ちについて考えなければならなくなる出来事が多い。

幕府から最も嫌われている攘夷志士の高杉晋介に出会ったり。

宇宙を旅している坂本辰馬から「自分の過去」についてのことを垣間見せられたり。

自分の中で、何かが思いたせそうな気がする。

たぶん…記憶を取り戻す日はそう遠くないのかもしれない。

そしたら、私は――。

「やっぱり寝れねーのかイ」

襖が開いて、パタンと閉まる音がした。

「隊長…」

沖田は志保に背中合わせになるような形で座った。

なんだか、みんなで行った海のことを思い出す。

あの時も夜の海で眠れなくて、2人で星空の下にずっといた。

『お前は、自分の弱点って何か分かるかイ？』

自分の、弱いところ――。

私の弱いところなんて、脆いところなんて、たくさんある。

『記憶、でしょうか』

志保にとっていちばん分らないことは、自分のことだ。

雨が降った日――よく見る夢がある。

雨空の下に、志保はひとりきりで、ずぶ濡れで立っていて。

傘がない。

雨をふさぐものが、ない。

ずっと、雨は止まないのだ。

ずっと、ずっと……永遠に。

目が覚めると、いつも雨にぬれたように汗をびっしょりとかいてい
る。

「隊長……」

「ん、なんでイ？」

「いえ、なんでもないです」

——私が、攘夷戦争に参加していたら……それでも私のこと
を、仲間だといってくれますか？

それを言ってしまったら、私はここにいらなくなってしまうだろ
う。

『俺達にも…俺にも、ちったア頼れよ。――仲間な
んだから』

そう言ってくれたのに…。

今の関係が崩れるのが恐くて、志保は前に進めないでいる。

「お前…雨が恐いかイ？」

「なん…で？」

「なんで分かるのかって？ 見てれば分かりまさア。雨の日はあんまりしゃべらなかつたり、次の日辛そうだつたり、異様に傘を大事にしたり」

「……………」

すべて、その通りだった。

「お前にとって…今は曇っていても、雨が降っていても、いつかきつと太陽が出る時が来る」

そうなの——だろうか。

「誰かが、お前の太陽になる」

太陽——。

志保には、少しその言葉と沖田が眩しかった。

合わせた沖田の背中から、かすかな温もりが伝わってきて心がほんのりあたたまる。

——俺が、お前の太陽になるから。

その言葉は沖田の口の中で消えてしまって、志保には届かなかったけれど。

沖田は黙って夜が明けるまでそばにいてくれた。

夏が、静かに過ぎてゆく――。

第23話 朝を待つ（後書き）

台風「11」号っていう数字は適當です。

台風が来るのがものすごく楽しみなのは私だけでしょうか？

第24話 秋の空は何よりも穏やかで

季節は、秋を迎えた。

澄みきった青空に、ところどころブラシで掃いたようなちぎれ雲が浮かんでいる。

絶好のお出かけ日和だ。

過ごしやすい秋の風が、志保の右の耳の横で結ばれた髪の毛を巻き上げる。

「いい天気だなー」

真選組はかぶき町から少し離れたところにある街の大きな公園に来ていた。

9月半ばに開催される「紅葉の秋祭り」の警備に真選組総出で駆り出されているのだった。

小さな遊園地のような施設がある公園で、年に一度の秋祭りということ人で混雑している。

焼きイモの屋台なども出ていて、外気に当たっていると少し肌寒いくらいだ。

「1番隊は中央の広場。2番隊から下はそれぞれ周りを固める！」
土方の指示によって隊士たちがチリチリになっていく。

中央の広場にはメリーゴーランドと屋敷のような立派な3階建ての休憩所があった。

「雨宮ー、俺ア屋台の方の警備をしてきまさア。なんで指揮とおいてくだせい」

「思いつきりサボリに向かおうとしてんじゃないですか！」
捕まえようとするが、案の定スルリと人混みの中に消えていつてしまった。

「————ったく！」

志保は隊士にその場を任せ広場の周辺を回り始めた。

普段のこういふ様子を見ると、戦っている時の沖田とは別人のように見える。

志保はたびたび沖田と刀を交わえる機会があつたが、勝てることは3回に1回ほどしかない。

（でも、叶わないんだよな…）

そう。

沖田には、叶わないのだ。

いつも、なんやかんやで志保のことを助けてくれる。

雨の夜――寂しい夜には、朝まで隣りにずっといてくれたこともあった。

「いつか弱みを見つけないと…」

「誰のだ？」

「沖田隊長ですよ。でもあの人に弱みなんて…ん？」

私誰と話してるんだ？

恐る恐る振り返る。

「ぎ…銀さん」

「よオ。また会ったな」

そこには銀時、新八、定春に乗った神楽の万事屋メンバーがこちらに歩いてきていた。

「あれ、志保さんも祭りにきたんですか？」

「またお前アルか！」

3人+1匹の姿はかすんだ空と紅い紅葉の秋の風景に馴染んでいる。

「私は仕事で来てるんです。無職同然のあなた達と一緒にしないでください」

「真選組が働いてるのも珍しいですね」

「まあ、俺達からふんだくった税金の分しっかり働いてくれよ」

志保を無表情で見つめる目の中に優しさを見つけて、志保はフンと顔をそむけた。

「フン、あなたに言われなくてもそうしますから」

神楽が「何様のつもりアル！」と飛びかかってきたのをひょいと避けた。

神楽の攻撃を受け止めていると、後ろに気配を感じた。

回し蹴りをして一瞬神楽の動きを止めると、そのまま気配の方へ振り返った。

怪しい奴だったらすぐさま対応できるようにと身構えていたが、そこにいたのは先ほど勤務から逃げた沖田だった。

「隊長……」

「お見事」

志保は足を降ろした。

先ほど銀時の前で沖田の弱点がどうとか言ってしまったので、チラッと銀時の方を見る。

「あれ、旦那方もいたんですかい」

「おー」

「この間はウチのもんがお世話になりやした」

かすかに「ウチのもん」を強調しているようにも聞こえた。

「別に、どーってことねーよ」

銀時はニヤニヤして沖田と志保を交互に見た。

「？」

「沖田君、頑張れよ」

「は？ 何をですかイ」

志保は何の事だかさっぱり分からなかった。

沖田もよく分かってないようだった。

「で、隊長。なんで戻ってきたんですか？」

こういう言い方は少しアレだが、沖田は大体サボリに行ってしまうとその日の仕事が終わるまで帰ってこない。

こういつぶつにすぐに戻ってくることはごくまれなのだ。

「ああ、なんだか不審な輩が多数目撃されてるらしい。一応気をつけるようにと土方さんからお達しでさア」

「不審な輩……」

「俺達は誰も見てないんだが、みんな刀を帯刀していて…あと何故かクラリネットを持ち歩いているらしい」

真面目に沖田の話を聞いていたのだが、クラリネットのところはずっこけた。

「はあ？　なんでクラリネット？」

「知るか。俺に聞くんじゃないー」

「まあでも、分かりやすい目印にはなるかも……」

ドガアアアアン

「「「！！」」」

広場の方から、爆発音が聞こえた。

志保と沖田はとっさに走り出す。

まだその場にいた万事屋もついてきた。

広場から逃げ惑う人々を掻き分け騒ぎの中心部に辿り着くと、すでに多くの隊士たちがその場にいた。

「隊長、副隊長！」

「何があつた！？」

「それが……」

『フハハハハ！』

隊士のひとりが説明しようとした声をスピーカーで拡大された声が遮る。

その声は休憩所となっている屋敷の3階部分から聞こえてきた。ベランダのようなところに覆面をかぶった男が数人立っている。

『我々はすでにこの公園を包囲した！　ここにいる全員が人質だ。人質の命が惜しければ要求を聞いてもらおうか！』

数人の隊士が避難させようと動き出すが、その次の言葉によって動きを止められてしまう。

『おっと、ちなみにこの公園の数ヶ所に爆弾を仕掛けてある』

「爆弾！？」

『ひとつひとつが公園を吹き飛ばすほどの威力だぞ』

「……………」

「何が目的でイ」

沖田が冷静に聞くと、リーダーらしき男がニヤリと笑った。

『今捕まっている我らの仲間の解放と…真選組局長近藤勲の命だ！』

「「「！」「」」

第24話 秋の空は何よりも穏やかで（後書き）

なんだかシリアスモードは続いているのに戦闘シーンはたぶん土方との試合から書いていないと思うので…。

でもこういう緊迫した場面は苦手なんですよね。

第25話 折れない魂

「何が目的でイ」

『今捕まっている我らの仲間の解放と…真選組局長近藤勲の命だ！』

「なっ……」

「ふざけるなア!!」

隊士たちが一斉に叫び出す。

覆面男たちは顔色一つ変えず志保達を見下ろしている。

『我らは蔵利熱湯。クフリネット腐った世の中に天誅を下さん!』

その言葉に触発されて、さらに隊士たちは怒りを爆発させる。

「みなさん、落ち着いてください! あなたたちがそんな風に騒ぎ立てると相手の思うつぼです」

志保の声にハッとしていったんは鎮まる隊士達。

志保は覆面男たちに向き直った。

「あなたたちの要件は容易に判断できるものではないので、これから上に掛け合う。しばしの時間を!」

志保が叫ぶと、背後で人が駆けてくる気配がした。

「何事だ！」

「副長！」

ツンと――――煙草の匂いに鼻がついた。

『クク… 鬼の副長さんのお出ましか』

沖田が簡単に事情を説明する。

「とつつあんにはもう俺が連絡つけときやした」

「そういうことか… 近藤さんにはまだ言っていないだろうな」

「ええ。それは土方さんの役目だと思いやして」

目を見開いた後、土方がチツと舌打ちをした。

そして携帯電話を取り出し、番号を押す。

誰かに電話をかけるようだ。

「あー、近藤さん。俺だ」

いつものんきな近藤の声が電話越しに聞こえてきた。

『オートシか！ どうだ、秋祭りは』

「なんも異常ねえよ。そっちは何してんだ今？」

——副長、アンタまさか。

『え？ お、俺はお妙さんの護身中で……』

「……そーか。まあ今日くらいは目をつぶってやるよ。今日めいっぱいやって明日から勤務に励むこった」

『え？ トシなんかあつ——……』

土方は通話を切ってしまった。

「土方さん……」

「オイ、お前ら！」

土方は真上にいる覆面男たちに向かって声を張り上げた。

「仲間釈放の件はまだ話し合い中だ。もう少し待ってほしい。だが局長の首の件——俺に変えてほしい」

「「「！」「」」」

その時、この場にいる全員が分かってしまった。

近藤にテレビを見るなど言った理由。

たぶんかなり大きな事件だから、当然テレビでも報道されているはずだ。

だがお妙のところに行っている近藤なら早く帰らないかぎり見ることはないだろう。

『フン、自分の命より大将の命が大事だと？ 大層立派なお考えだ

な
』

「てめーらも侍なら分かるだろう。己の信念を曲げて助かって、魂が折れちまうことに」

自分の命に変えても――近藤を、自分たちの大将を
護る。

それが、この男の信念、魂なのだろう。

それは、ここにいる全ての隊士たちが――仲間
が、思っていることだ。

『良からう。貴様も頭の切れる男だからな。損することはあるまい』

「…銀さん。覚えてますか？ 鬼道丸さんの時のこと」

「あの言葉、銀ちゃんの言葉ネ」

「…ああ」

「え？ 何ですかソレ」

聞き捨てならない会話に志保は振り返って聞いた。

「そうか、志保さんは知らないんですよ。前にお上が絡んだ事件があつたんです。それで銀さんは自分の利益にならないのに行こうとしたんです。それを土方さんに指摘されたら…」

「ま、土方さんは旦那に教えてもらったなんて絶対認めないでしょうが」

沖田も屋敷から目を離さずに言う。

「土方さんは意外と、旦那のこと信頼してるんですかねィ」

『魂が、折れちまうんだよ』

「…副長と銀さんって、仲悪かったですよね」

「税金泥棒の奴らはどいつも嫌いアルネ」

「どーもアイツとはウマが合わねエからな」

「でも、なんか似てますよね」

銀時も新八も神楽も、志保を見る。

「どっちもクルクルパーだったり瞳孔ガン開きだったり気分悪いですけど…中身は一緒です」

「志保さん…」

志保は刀を抜いた。

「どつちも……バカですよ」

「お前も充分バカだと思うけどね」

「そーいう隊長ですよ」

同じく刀を手にした沖田と隣りに並ぶ。

『フハハハハ！　こんな大勢の人質がいる中で暴れようというのか。貴様らは警察ではないのか！』

「そこなんだよなア」

「オイお前ら、勝手な真似はやめろ。アイツらの狙いは俺の首と仲間間の釈放だけだ」

「それは分かっています。でも……」

土方の顔を見ずに志保は呟いた。

「私たちは、まだあなたを失うわけにはいかないんです」

「ま、いつか俺が殺してやりやすけどね」

「お前ら…」

土方がもともと開いた目をさらに見開く。

「勘違いしないでください。真選組のためだけですから」

「土方さんは上に連絡しといてくださいエ。釈放の件は了解しなくていいって」

志保と沖田が戦闘の態勢をとった、その時。

「ちょーっと待ったアアア!!」ご用改めである!!」

第25話 折れない魂（後書き）

ちよつと原作風味ですね。

銀さんの「魂が、折れちまうんだよ」「っていう台詞、ものすごく好きです！

第26話 受け止めてくれる仲間（前書き）

ヤバイ…！

今回いつもの倍くらいある！

忍耐力のある方だけお読みください。

第26話 受け止めてくれる仲間

「ちょーっと待ったアアアア!! ご用改めである!!」

その声は、その姿は、この場にいちばんあってはならないもののな
に、ひどく安心するものだった。

「「「「局長オオオ!!」」」」」

誰もが今日思っていた人物——真選組局長、近藤勲が
たくさん隊士たちを従え、広場の入口に立っていた。

市中の見回り担当だった原田もいる。

そして、その後ろから出てきたのは——。

「万事屋！」

「銀さん！」

やり遂げたような顔をするふたりの子供と、相変わらずダルそうな
表情の銀髪だった。

「な…どうやって外に出れたんですか？」

「いなくなってたのにも気づきませんでしたぜ」

「おーよ、実はなートイレに行きたくなっちまって探してたらさ、見つけたんだけどそのトイレ、2つ出口があって外に出れたのよ」

「強行突破しようとしたら丁度近藤さん達と会ったんです」

「入口にいた奴らはみんな倒したアル!!」

「いつ行動したんだ？」

「んー、『どっちも……バカですよ』って志保が言った直後」

土方の言葉に銀時が冷静に返す。

「そこは聞いてたんですか」

グダグダな会話をそれまで大人しく聞いていた近藤が叫び出す。

「トシ、総悟、志保!! 俺にこんな一大事を黙ってるなんて水臭エじゃねーか!!」

「何バカなこと言ってるんですか。たった今あなたの命が狙われてるんですよ」

「まあ、来ちまったら仕方ねエ。土方さん…指揮をお願いしまさア」

土方は、刀を握る手にぎゅっと力を込め、周りを囲む隊士たちに鋭

く言い放った。

「1番隊、2番隊は浪士たちの対応に当たれ！ 3番隊から10番隊は人々の避難に尽くせ！！」

土方の掛け声にみんな一気に動き出す。

志保と沖田は攘夷浪士逮捕を担った1番隊、2番隊の先頭に立った。

周りを見張っていた奴らを、次々と斬っていく。

逃げ出そうとした奴も、立ち向かってきた奴も、みな同じ運命を辿った。

命の終わりを迎えるかもしれないと怯えていた人々も、隊士たちに誘導されて無事に公園の外に避難した。

「土方さん、全員斬りましたぜ——屋敷にいる男たち以外は」
「そうか。人質の避難も完了した」

てんやわんやの中でどうにか切り抜けたようだ。

「キヤアアア！！」

女性の悲鳴が聞こえた。

広場の隅に集まっていた土方と沖田、志保は聞こえた方向に振りかえる。

そこにはまだ若い女性が真っ青な顔で地面にへたり込んでいた。

「どうしたんだ！」

土方が駆け寄ると、女性は震える手である一点を指さした。

「私の……息子が……！」

「お母さんー!!」

ベランダに立つ覆面男たちの間に――まだ幼い黄土色の綺麗な髪の子が、捕えられていた。

『さすが真選組、外から侵入し我らの仲間を全て捕え人質を逃がすとは…。しかし、貴様らはその代償にこの少年の命を払うのだ!』

そう言うと言葉の中に男の子を引きずり消えた。

最後まで男の子の母親を求める声が聞こえ続けた。

「クソッ…1番隊は俺が合図したら突入しろ! それ以外の隊は動くな!」

「いや、トシ…待て！」

近藤がすぐにでも入口に向かおうとする沖田達を止めた。

「屋敷から…火が出てるぞ！」

屋敷の3階部分から――秋の空にそぐわない赤い炎が燃え上がっていた。

「翼――！！！」

「翼」それがあの男の子の名前なのだろう。

早くしないと、男の子が――。

火はもう1階にも2階にも広がってしまっていた。

「おい、テメーらどけエエエ！！！」

ふいに、大量の水が屋敷に振りかかった。

「火事の際はこの火消しの辰巳に任せなア！！」

万事屋3人組と、「め組」と書かれた法被を着た背の高い女の人
大きなホースを持って水をぶちまけている。

「旦那ア！」

「火の方は俺たちに任せろ！！」

その瞬間――銀時と目があつた。

紅い目が、大丈夫だというように優しく笑ったのを見て、志保は頷いた。

男の子の母親に駆け寄る。

「お母さん、翼君は私たちが絶対に助けます」

それだけ言つて、走り出す。

「オイッ…雨宮！」

土方の声が背に聞こえたが、駆けだした志保はもう振り返らなかった。

入口をくぐると、火は銀時達のおかげでいくらか消えていたが、煙が充満していた。

「ゴホッ…ゴホッ、結構火の回りが早いな…」

階段を2階、3階へと駆け上がる。

3階の入り口には椅子や机などが行く手を塞いでいた。

おそらく覆面男たちがやったのだろう。

「こんなもので…私の足を止められますか!」

一太刀で―――障害物を真っ二つに斬った。

「翼君!! 翼君!!」

口を開くと、煙が口の中に入ってくる。

咳をして涙目になりながらも、必死に名前を呼び続けた。

「……ここ……だよ！」

奥の方でか細い、しかしはっきりとした声が志保の耳に飛び込んできた。

「翼君……！」

駆け寄ると、もう翼はぐったりとしていた。

柱に縄で縛りつけられ、煙をだいぶ吸ってしまったようだ。

覆面男たちはいない。

翼を縛り付けた後逃げたのだろう。

「お姉ちゃん……僕は死ぬ、の？」

涙が伝う頬をぬぐって、志保は力強く叫んだ。

「大丈夫……私が絶対に、君を死なせたりしないから！」

複雑に結びつけられた縄を何とか解き、翼を抱きかかえる。

まだほんの小さな男の子の体は、驚くほどに軽かった。

「階段は……もう使えないな」

もうすぐそこまで、火が迫っていた。

なんとか脱出するところはないかと探していると、たったひとつ空気が流れ込んでくるところがあった。

——
ベランダ!!

急いでそこに出ると、下には隊士たちがたくさんいた。

「志保!!」

「雨宮!!」

「副隊長オ！！」

「ここから飛び降りたら…まず助からないかもしれないな」

だが、火はもう後ろまで来ていた。

もう戻ることは出来ない。

「志保——！！ 飛び下りてこい！！」

必死に叫ぶ、銀時の声がした。

「志保、大丈夫だ！！」

「さっさと帰ってこい！！」

「てめーは簡単に死ぬタマじゃありやせんぜ！」

志保はベランダから身を乗り出した。

銀時が、近藤が、土方が、沖田が—— 必死に志保を見上げて声を限りにして叫んでいる。

志保は、抱きかかえた翼に向き直って静かに言う。

「翼君、今から私は君を抱えて下に飛び下りる」

「お姉ちゃん…僕、恐いよ！」

「私も本当のこというと、少し恐い。だけど、仲間が下で受け止めてくれるから。だから…」

——私を、みんなを信じてくれる？

翼は、浮かんでいた涙を拭きとって、うなずいた。

「じゃあ、行くよ…！！」

翼を支える手に力を込めベランダを飛び立った瞬間、火の粉が志保達に降りかかってきた。

志保は左手で翼を抱え空いた右手で上着を脱ぎ、火の粉に投げつけた。

火の粉は上着をすぐさま飲み込んで燃えた。

その炎の塊も、いましがた飛び立ったベランダも遠くなっていく。

そして地面が眼下に迫り――志保はぎゅっと目をつぶった。

志保と翼は、4人の腕の中に落ちた。

力強い腕達に受け止められる。

「翼!!」

「お母さん!!」

母親と息子が、涙で濡れた顔を押し付けながら抱きしめあった。

志保は、ちょっぴり家族がうらやましくなった。

優しい表情で親子を見つめていると、ふたりが振り返った。

「お姉ちゃん…ありがとうございます」

「ありがとうございます。みなさんも…ありがとうございます」

「いいえ、あなたから息子さんを奪うことにならなくて、良かったです」

真選組に入隊して、批判も後を絶たないけど同じ数だけ「ありがとう」と言われた。

最初は暮らしを営むただけだった。

しかし今は胸を張って、誇りを持って言える。

真選組に、仲間に出会えて————本当に良かった、と。

「翼君は煙を多く吸っているでしょう。救急車を手配しているので念のため病院にお行き下さい」

「本当に、ありがとうございます」

「いえいえ、とんでもない！」

母親に何度も頭を下げられ、近藤は困ったように笑って手を振った。

親子が救急車に乗っていつてしまうと、ホーツと安心した志保に土方が声をかけた。

「これから俺達は事態の收拾にかかるが、お前はもう帰って休め」

「え？ 大丈夫です。普段からニコチン吸ってる副長に比べたらマシです」

「何言ってるんだ！ 万事屋、コイツを頼んでいいか」

まだその場にいた銀時達に向かって土方が頭だけ向けて言う。

「報酬は弾んでくれよな」

「俺が連れて帰りまさら」

ふいに隣りに沖田が現れた。

土方も銀時も目を丸くする。

「お前はまだ仕事があるんだよ！」

「隊長、私は大丈夫…」

志保がそこまで言いかけた時、急に目眩がして、沖田の方に倒れかけた。

「言わんこつちやねエ」

そついつものポーカーフェイスで呟くと、起きお田は志保を抱きあげた。

俗に言う――「お姫様だっこ」という奴だ。

「なっ…隊長、降ろしてください！」

「こついう時は黙って大人しくしてればいいんでイ。お前の悪いところはすぐに無理をすることでさア」

志保はまだ反論しようとしたが、体が重くてそのまま力を抜いた。

「青春だねエ」

残された銀時と土方達はふたりの後ろ姿を見送った。

「フン、仕方ねエ。総悟の分お前らにも働いてもらっぞ」

「はア！？俺達はもう重労働してクタクタなんだよ！」

「報酬のことも忘れるなヨ！」

「そーですよ！今回は久しぶりに僕らともに働きましたもん」

火が消えて黒い煙が秋空に上がる屋敷をバックに、いつまでもギャーギャー騒いでいた。

第26話 受け止めてくれる仲間（後書き）

この秋祭りの事件のテーマは「絆」ですね。

あと影で「銀さんと土方の関係」と「土方の近藤への思い」です。
主に土方ですね。

後の方はうやむやになっちゃいましたけど。

第27話 リアル猫耳

秋雨がしとしと降り続ける日の午後。

志保の隣りには積み上げられた書類の山が。

「ハァー… ホントなんで私がこんなことしなきゃならないんですか」

昨日、攘夷党「蔵利熱湯」クラブネットのテロ事件によって煙を多く吸ってしまった志保は結局あの後3日間寝込んでしまったのだ。

その間にたまりにたまった書類のしわ寄せがきているのだ。

—— 半分以上が隊長のものなんですけどね。

実際3分の2枚くらいが沖田のものだ。

しかも何故かたまに土方のものが混ざっている。

なんとかフルスピードでさばいていると、ふと一枚の書類が目にとまった。

「あ、これ……」

「蔵利熱湯」の機密情報だった。

「蔵利熱湯」の攘夷浪士達は全員クラリネットを持ち歩いているらしい。

その理由は定かではないが、それを吹いているところをみたものはだれひとりいない。

そして幹部の3人は、覆面を常にかぶっている。

「なんか微妙に気の入らない攘夷党だな」

クラリネットとか吹奏楽器の中でもマヌケな感じじゃないですか。

「書類はかどつてやすかー」

「……………」

元凶がきた。

「ええ、あなたの無責任極まりない思想のおかげですよ」

「良かったじゃねーかい」

「どこにそう言える要素が入ってんですか」

もうしゃべってる時間がもつたいないと沖田に背を向け書類に向き直ると、後ろでドカツと座る音がした。

「何座ってんですか」

「大丈夫でさア。邪魔はしやせん」

「あなたがこの空間にただで充分邪魔だと思っんですけど」

沖田は志保の言葉を見殺し、どこからかビンとコップを取り出し中

の飲み物をコップに注いだ。

またこの男は私の目の前で見せびらかしながら飲むつもりか。

しかし意外にも志保の予想は外れた。

「やる。サイダー」

「……へ？」

「疲れには炭酸と聞いたからねイ」

いやいや、疲れの元凶に言われたくないんですけど。

そういう言葉が出ないほど志保は沖田の行動に驚いた。

「結構です。隊長のことだからどーせろくでもないものが入ってるに違いありません」

「人の親切は素直に受け取ってかないとバチがあたりますぜ」

「常日頃からバチ当たりなことしかしてない人に言われたくないんですけど」

「早く飲みなせよ」

「わあ、この人の耳はただの飾り？」

これ以上やり取りを続けても不毛な会話にしかないし、この男は無理やりにも飲ませそうだったので志保はビンの中身を飲んだ。

仕方なしに――飲んだ。

「サイダーってこんな味でしたっけ？」

なんだかデパートで買ったサイダーとかなり違う味のような…。

ピョコッ

「ん？」

なんだか、頭に違和感が……。

「ぷはッ…クククッ……」

いきなり吹き出した沖田。

「隊長、何笑ってるニャン」

「……………え？」

頭を触ってみると動物の耳のような生あたたかくて毛深いものがふたつ生えていた。

視界の端には猫のしっぽのようなものも見える。

志保は鏡の前に瞬時に移動した。

中を覗き込むと、そこには猫耳と猫のしっぽが生えた自分がいた。

「…………ニャンじゃコレエエー!!」

「プククッ…………よく似合ってるじゃねーかい」

「デメエ沖田アア!! サイダーに何を入れたアアア!?!」

「別に俺のせいじゃねーでさア。昨日猫の天人から回収した薬を入れただけでさア」

「完全無欠お前のせいじゃねーかアアア！！ 100パーセント純度でお前のせいだろ！！」

「うるせーな。メス猫はニャンニャン鳴いてろ」

「誰がメス猫だニャン！……ん？」

「ブワッハッハ！！」

「なんだよこの語尾ニャン攻撃はアアア！！」

もう何なんだこの格好は！！

穴があつたら入りたい…アリの巣でも入りたい。

「いやーしつぽまでご丁寧に生えてらア」

「何携帯で写真撮ってんだアアア！！」

携帯を構える沖田に志保がピンを投げるがあっさりかわされた。

「ドS心をくすぐる姿ですぜ。土方さんや近藤さんにばらまいてあげまッア」

「ふざけんニヤアアア!!」

「ププッ…ふざけんニヤって……」

「私のバカアアア!!」

「お前ら一体何騒いでやがんだ？」

そこに今来てほしくない人物ナンバーワンの土方の声がした。

ゆっくりと襖が開く。

志保はとっさに押入れの中に隠れた。

「何ですかイ」

「総悟、お前だけか？ 今雨宮の叫んでる声が聞こえてきたんだが…。アイツ書類たまってるのにどこ行きやがったんだ」

土方が部屋を見回す気配がする。

どうかこのまま出ていってくれ、と志保は祈る。

「雨宮なら押入れの中に隠れてますぜ」

何アイツ教えちゃってんのオオオ！？ 何軽いノリでしゃべってんの！？

お前の辞書にフォローという言葉はないのか！

「あ？ 何やってんだアイツ」

土方が近づいてくる。

押入れが開くのを腕の力でなんとか押さえる。

「オイテメーは何遊んでんだ？」

「たっ…体調が悪いんです…ニヤン」

「ニヤン？」

やべエエエ！！ 抑えられなくてつい言っちゃったアアア！！

は？ 何コイツって顔してるよ。横目で見たけどすんげエ顔してるよ副長。

「お前今なんつった？」

「何も言っていない、ですよ。とりあえずこの部屋から出ていってくださいニヤ」

「今完全に言ったよな。完璧に「ニヤ」って言ったよな。え、ふざけてんの？ ふざけてんのお前？」

「ニヤに言ってるんですか。鬼の副長ニヤンともあろう方が聞き間違えですか」

「副長ニヤンンンンン！？ しかも2回言っただし！！」

自分でもびっくりなんですけどオオオ！！

なんか急激に猫語のシンクロ率上がったんですけど！！

「ちょっと土方さん、邪魔でさア」

「あ？」

急に沖田が土方を掻き分け押入れの前にしゃがんだ。

「煮干しやるからいったん出てきなせエ」

その煮干しを見た瞬間志保の頭の中で何かが切れた。

「総悟、お前なにやって……」

「ニヤンツ!!」

「……………は？」

「……………あ」

やってしまった。

シーンとした部屋に沖田の笑い声だけが響いた。

「ぶあっははは!!」

事情を聞いた土方は緑茶片手に爆笑した。

その目の前で志保は頭を垂れて座っている。

「あー、こりゃ傑作だな」

「いつか絶対仕返ししてやつからニヤ！」

「ぶっ、ニヤって…く、くくッ…」

「ああアアの口めエエエ!!」

沖田と土方の笑う姿を横目に見ながら志保はギリギリと歯ぎしりする。

「あーもうこんな耳ヤダアア…ん？」

志保は叫びながら頭の猫耳に手をやり思いつきり引っ張った。

そうしたら――拍子抜けするほど、あっさりとれた。

「あれ…とれたんですけど」

しっぽも消えていた。

「あーあ、もう終わりかい」

「……え？」

「実はこれ引っ張ったらすぐ取れるんですよ」

「…こんなオチかよコノヤロー」

（この薬は面白いが回収するぞ）

（どこにも面白い要素ありませんから！）

（ちなみにあれは女にしか効かないらしいですぜ）

（ハタ迷惑なもの作るバカがいるんですね）

第27話 リアル猫耳（後書き）

ここ数日びっくりするくらい寒いですね…！

8月なのにありえないです。

第28話 家出少女（前書き）

久しぶりの更新です…。

長い間更新できなくてすみません！

第28話 家出少女

「オイ…なんなんだヨ」

「僕だって知りませんよ。銀さん何か知らないんですか？」

「俺だって知らねーよ…」

肩を寄せ合ってひそひそ話すのは万事屋の3人。

万事屋のふたつあるソファアのひとつに3人そろって腰かけている。

そしてその反対側には……

「あの、…志保さん？ 今日はい体どうしたんですか？」

風呂敷に包まれた小さな荷物を傍らにおいてお茶をすすする志保がいる。

ただ遊びに来たという感じではなさそうだ。

それに普段は何の気づかいも無く隊服で来る志保が珍しく私服だ。

一同が見つめる中志保は静かに言った。

「真選組出てきたのでここにしばらく置いてください」

「「「はああああ？」「」「」

時をさかのぼること1時間前。

「あれっ、志保ちゃん。なんだかご機嫌だね」

志保は屯所の廊下で山崎に声をかけられた。

「地味のくせにそういうことだけはよく観察してるんですね」

「ひとこと多いよ!」

「副隊長、なんか嬉しそうだな!　なんかいいことあったのか?」

「原田さん私は将来ハゲになりたくないので話しかけないでください」

「ハゲうつんねーよ!」

いつものようにそこらじゅうに毒舌を撒き散らしながらも今日の志保は本当に機嫌が良さそうだった。

「雨宮、今日までの書類仕上げておいたか?」

と聞いた土方だったが、どうせ出来ていないだろうと踏んでいた。

ところが。

「ハイ」

確かに今日までの書類すべてが土方の手に乗せられる。

「あ？ めずらしいな……」

それでも疑ってパラパラとめくってみると、すべての書類が完璧に完成されているではないか。

「実はですね、副長。昨日私の行きつけのケーキ屋さんで新発売のチーズケーキが出たんです」

「ああ」

志保は大の甘い物好きだ。

どこかの白髪天パを思い出させる。

「ま、なんにしてもちゃんと仕事をしてくれたら何も言うことはねエがな」

食堂に向かって嬉しそうにひょこひょこ歩いていく志保の後ろ姿を見送りながら土方は呟いた。

志保が食堂に入ると、そこには沖田の姿があった。

「おう、雨宮。お前もサボリかい？」

「お前もつてことは隊長はサボりなんですね。見れば分かりますけど」

志保は沖田が座るイスの後ろを通り過ぎながら冷やかに言う。

「残念ですけど、私はちゃんと仕事を終わらせてきました。大好きなチーズケーキが待ってるので」

「…ふーん」

そして冷蔵庫を開ける。そこには念願のチーズケーキが…

「アレ？」

……なかった。

「え、え？　なんでエエエ！？　絶対ここに入れたはずなのに！？」

何度も冷蔵庫の中を見回し台所の方まで見に行ったが、ない。

大騒ぎする志保の脳裏にひとつの思いが浮かんた。

――まさか。

そして思い当った場所へ行くと。

「やっぱりお前かアアアア！！」

沖田はいつものポーカーフェイスで、志保のチーズケーキを食べていた。

そして志保の見ている前で最後のひとかけらを口に入れた。

「何お前は人のチーズケーキ勝手に食ってんだアア！！」

「なんでイ、お前のか。それなら名前書いとけよ」

「てめー今朝この話したよな？ 絶対わざとだよな？」

志保がこめかみをピキピキいわせているのにひょうひょうと「前科がある俺の目につくところにおいておくのが悪いんでさア」とか言う沖田について志保はキレた。

「もーいいです！ こんなとこ出ていきますから！！」

「という訳です」

「ただのお菓子とらただけじゃねーかアアア！！」

新八が立ち上がったって全身全霊でツッコんだ。

「何？ ただアンタのおやつ沖田さんに食べられただけじゃん！！
それで家出！？」

「ただのお菓子じゃねーんだよ腐れメガネ！」

志保は飲んでいたお茶を新八にぶっかけた。

「あづツツ！！」

「アレはなア、人気の甘味処の新発売のチーズケーキでなア、3時間並んで買ったんだよ！！」

「怒りで口調が壊れてるヨ」

「それを…あのクソ野郎の汚い胃袋に…」

志保の言葉に銀時も同意する。

「何イ！？ あそこの新発売の品だとオ！！ それは家出もする！」

「銀さん…分かってくれますか」

「いや、そんなことで家出すんのはアンタただだからね」

新八が志保にお茶をかけられた顔を拭きながら冷静にツツく。

「それにそろそろ沖田さんも反省してるかもしれませんよ」

「あのサドが反省なんて太陽が西からのぼることはあってもありえないアル」

そこは誰もが大いに同意するところだ。

「でもうちに泊まるってのは…」

志保も万事屋といるとボケに回ることが多い。

このボケの量を新八だけでさばくのは無理があるというものだ。

それに神楽と志保は敬遠の中だし、なにより万事屋にこれ以上の人数は入りきらない。

「じゃあこれでどうですか」

志保が懷から出したのは封筒に入った札束。

「秋祭りのときの謝礼も兼ねてどうぞです」

「「「どうぞ泊まっていてください」」」

定春が嬉しそうにクウーンと鳴いた。

第28話 家出少女（後書き）

前書きで久しぶりの更新と書いたんですが…旅行に行ってますのでまた3日ほど更新できません。

もう夏休みも終わりですが楽しんできたいと思います。

第29話 朝日が降りそそぐ（前書き）

私、ここ「にじファン」で二次小説を書いていることを誰にも内緒にしていたんですが、この前ついに部活の友達にバレました…！！

いやゝ秘密つてのはいつかはバレるもんですね。

第29話 朝日が降りそそぐ

結局万事屋に居候することになった志保。

新八のメガネを奪って追いかけまわされたり、神楽と本気のバトルをしたりしていたらいつの間にかもうとっぷりと日が暮れていた。

最近涼しくなってきたて日が短くなったのもある。

銀時がボロボロになるまで読みこんだ今週号のジャンプをソファ―に寝ころがりながら読んでいると、台所の方からいいにおいがしてきた。

においを辿っていくと、エプロンに三角巾という家庭的な格好をした銀時がめずらしく台所に立って料理をしていた。

何をつくっているかは煙で見えなかったが、口を開く前に追い払われた。

そしてソファ―で待っているといいにおいの煙をまといながら銀時

が居間に現れた。

「おーい、メシだぞー」

その言葉に新八と神楽も駆け寄ってきた。

おぼんにごはんとはんバーグのお皿が4セットのっている。

「うわあー銀さんのつくったごはんなんて久しぶりですね！」

「銀ちゃん、おいしそうアル！」

みんなで机の四方を囲って座る。

「いただきますーすー!!」

新八と神楽が箸と茶碗に手を伸ばす。

「銀さんって料理出来たんですね。何も出来ないプー太郎かと思ってました。ていうか肉を買う余裕どこにあったんですか？」

「んなこと言っているとはんバーグ食べさせねエぞ。黙ってさっさと食えや」

銀時に睨まれてハンバーグを口に運ぶ。

あたたかい味がいっぱいに広がった。

ふと顔を上げると銀時と目があつた。

銀時はちよつと嬉しそうにニヤツと笑つた。

志保はなんだか少し恥ずかしくなつて、うつむいて黙々とごはんを食べた。

「ねえ…銀ちゃん。クソ女はどこで寝るアルか？」

夜も更けた頃。

相変わらずのチャイナ服の寝巻に身を包んだ神楽がふと純粋な疑問をぶつけた。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

御察しの通り誰もそのことを考えていなかったのだ。

「銀さんの布団でいいんじゃないですか？ アンタいつもソファ
ーで寝てるでしょ」

「やだよ。志保がソファーで寝ればいいだろ」

「断固拒否します。チャイナさんと押し入れて仲良くシコシコやれ
ばいいじゃないですか？」

「なんだと居候女アアア！！ シコシコって何アルか！ 銀ちゃん
と私は至ってまともな関係ネ！」

いつもの通り不毛なやり取りが続く。

「フワァ〜」

定春が窓から綺麗に欠けた月を見上げながらあくびを大きくした。

「銀さん…やっぱりこれしか手はありません。銀さんの和室で寝ましょう」

いろいろ言い争いすつたもんだの後、新八が言った。

メガネがずれ袴もよれよれだ。

時計の針はもう真夜中を指している。

銀時はため息をひとつついた。

「仕方ねエ。新八も今日は泊まっていけ」

銀時は頭をボリボリ掻きながら和室の襖を開けた。

「銀さん——結局、結論は？」

銀時はちよこつと振り返ってあくびをした。

「決まってるだろ。寝るぞ」

定春も含めた4人＋1匹で小鳥の鳴き声が聞こえてくるまでぐっすりと眠った。

志保は日の光によって目が覚めた。

秋の日差しに目をしばたかせると、視界がはっきりとしてくる。

4つある布団のうち、ひとつだけが空になっていた。

新八と神楽と定春はまだいびきをかいている。

「ふわあ〜」

目をゴシゴシこすりながら居間に行くと、銀時はもういつもの格好に着替えソファ―に座っていた。

その手にはいちご牛乳のパックが握られている。

「…珍しいですね。普段はまだしまりのない顔していびきかいてる時間じゃないんですか？」

「うん、よく分かった。お前の毒舌は寝起きでも健在なのな」

会話が途切れる。

小鳥の鳴き声が青い空に響く音だけが部屋にこだました。

志保は窓の外を見ているが、銀時の視線を感じていた。

「……帰りたくなったんじゃねーか？」

銀時に言われて気付いた。

志保は朝起きた時から何か違和感を感じていた。

それは――あのいつもの屯所ではないからだった。

朝起きて、隊服に着替えて、あのバカ騒ぎの中で過ごして――。

それがここにはなかったからだ。

万事屋だって決して嫌いなわけじゃない。

だけど、やっぱり――。

「ホームシックって奴かな」

「それに気付いてんのは俺とお前だけじゃねエよ。オラ、お迎えだぞ」

その言葉を見計らったかのように、万事屋の戸が開いて複数の人間が入ってきた。

1日ぶりに見る――あの人たちの顔だ。

「みなさん……」

先頭に土方、沖田、そして近藤もいる。

「どうしたんですか。今日は迷子になんかなくてませんよ」

志保が照れ隠しにそっけなく言うと、近藤が大声で笑った。

「志保、総悟とケンカしたらしいなあ」

「つたく、お前らはホントに世話が焼けるな」

土方も煙草の煙をふかしながら言った。

「すいませ〜ん。ここは禁煙なんでニコ中の人を出てってもらえま
すか〜」

「なんだと、テメエ。せつかくおもりを解放してやるつてのに」

「そんなこと言ってホントは志保がいなくて寂しかったんじゃない
ですか〜」

銀時と土方がギャーギャー騒ぎ、近藤が相変わらず大きな口で笑う横で、沖田がこつちを志保のチーズケーキを盗み食いした時と同じポーカーフェイスで見ていた。

「何ガンつけてんですか」

「お前、ホント可愛げがねーんだなア」

「ほっといってください」

沖田が黙って手を突き出した。

志保はそっぽを見ていた顔を沖田の方に向けると、そこには志保の行きつけの店の新発売のチーズケーキがあった。

「……………」

「オラ、代わりの奴買ってきたから、帰るぞ」

本当に人気の店だから、買うのは大変だったろうに…。

沖田が何時間も列に並ぶ姿を想像して、おかしくなった。

その顔はいつものポーカーフェイスだったけれど、ほんの少し申し訳なさのような表情が浮かんでいた。

今思うと、そんなに怒るようなことではなかっただろう。

現に沖田がまた柄じゃないことをして志保のために買ってきてくれたのだから。

素直に謝れない沖田を、いつもとは少し違う角度で見れた。

「はい」

銀時の背中から差し込む光を一身に浴びながら、志保は家へと足を踏み出した。

第29話 朝日が降りそそぐ（後書き）

まずみなさんに懺悔しなきゃならんことが…。

8月末頃に、私は3日間旅行に行くので投稿できないと言いましたが、約半月も怠ってしまいました。

本当にごめんなさい！

一応言い訳をさせてもらいますと、旅行に行く直前にパソコンがぶっ壊れたんです…。

この時期は文化祭や体育祭で忙しくなるので何週間か投稿出来ない期間が続くかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします。

第30話 普通の町娘のように

「あら？ 志保ちゃんじゃない」

その声に振りかえると、そこには黒髪の弟とは似ても似つかない美人
——新八の姉、志村妙がいた。

「妙さん…」

以前近藤のストーカー被害に遭っている女性として志保と知り合った。

笑顔を絶やさない清楚な美人だが、その笑顔のバックには鬼が見える…というのを口に出したら殺されるだろう。

「今日も仕事なの？ あのゴリラにこき使われてない？ もしそうなら私がゴリラを殺しにいくから遠慮なく言ってね」

「あはは…まあ、はい。妙さんは買い物ですか？」

笑顔のまま飛び出てきた恐ろしい言葉は軽くスルーして話の流れを変える。

「ええ。夕飯の買い出しだけだ」

そう言うお妙の腕にはスーパーのレジ袋からよく見るような細長いネギが飛び出ている。

「あ、そうだ志保ちゃん。私明日着物とか着物に行くんだけど、志保ちゃんも一緒にどう？」

「買い物…ですか？」

そういえば明日は非番だった。

それに1日くらい普通の女の子のように買い物などをしてみたい。

「私でよければ一緒に一緒にします」

「そう、嬉しいわ」

明日の待ち合わせの場所と時間を決めて別れようとしたら、お妙がにこやかに付け加えた。

「あ、そうそう。明日はもうひとり私の友達が来るから」

「志保ちゃん。この子が私の親友の…」

「柳生九兵衛だ」

翌日、お妙が連れてきたのは志保とあまり背の変わらない眼帯をつけた凜々しい瞳をもつ子だった。

「真選組1番隊副隊長、雨宮志保です」

ぺこりと頭を軽く下げながら志保も自己紹介をする。

九兵衛が少し目を見開く。

「そうか、じゃあ君が巷で噂の真選組唯一の女隊士か」

「え？ 私、そんな有名なんですか？」

志保は驚いて聞き返した。

真選組始まって以来始めての女だというから多少なりとも攘夷浪士の中で話題にのぼっているとは予想していたが、市井でも同じだとは思ひもなかった。

「ああ。柳生家にもその实力は風の便りで届いている」

「九ちゃんの家、柳生家はとても大きな剣の名家なの。九ちゃんは

そこの次期当主なのよ」

「へえ、女の子なのにすごいんですね」

「え……」

志保の言葉に九兵衛もお妙も息をのんで志保を見た。

志保は肩をすくめる。

「最初に見た時から分かりましたよ。直感っつーやつです」

「……やはり君はただ者ではないな」

九兵衛はフツと笑って言った。

この子もきつといままで苦労してきたのだろう。

九兵衛が過ごしてきた日々のことは何も知らないが、なんとなく悟ることは出来た。

同じ、女を捨てた身として――。

場所を変えて、かぶき町の街を並んで歩く。

お妙が志保を見ながら唐突に口を開いた。

「そついえば志保ちゃん、私服で会うのは初めてだけどいつもそんな格好なの？」

「え？」

志保の今日の服装は白と黒の一般的な袴だ。

そんな格好と言われても志保にとっては慣れた普段着だ。

「もう、志保ちゃんたら女の子なんだから休日くらい綺麗な着物を着なきゃ」

確かに言われてみれば女の子の普段着として袴というのはいかなものだろう。

お妙の言う通りかもしれない。

「いやー、連載開始当初は普通の着物着てる設定だったんですけど、こっちの方が『らしい』だろっていう作者の都合で描写変更いたしました」

「志保ちゃん、物語が破綻するような台詞は控えましょうよ。言わなきゃ最初のことなんて忘れられてるんだから」

「妙ちゃん…その発言もどうかと思うが」

そうこうしているうちに大きなショッピングモールに着いた。

「そうだわ！ 今日はずっと九ちゃんの可愛い服を買いに来ただけど、志保ちゃんの服も私たちが見繕ってあげるわ！」

「え？」

「私…たち？」

お妙が目を見開かせながら言った言葉に志保も九兵衛も苦い顔をする。

「妙ちゃん、僕は…」

「私は結構ですよ。もしものことがあったときにこっちのほう動きやすいですし…」

ダン

「私が見繕ってあげるって言ってるんだから大人しく受け入れなさい」

一瞬にして破壊されたコンクリートの壁とお妙の黒い笑顔を見て志保は即座に答えた。

「は、はい……」

「九ちゃんも、いいわよね？」

「……………」

九兵衛も一瞬間をおいた後諦めて頷いた。

「分かった…妙ちゃんがそこまで言うなら仕方がない」

3人はお妙を先頭に、いかにも女の子らしい着物屋に来た。

「ここは安いし可愛いし居間若い女の子に人気の店なのよ」

お妙が店の中に入りながら志保と九兵衛に説明する。

「九ちゃんにはもう決めてあるのよ。ハイ、コレ」

そう言ってお妙が持ってきたのは、紫と白の蝶が飛んだ太ももまでしかない丈の短い着物だった。

確かに九兵衛の雰囲気によく似合っている。

「普段とは違う感じでいいでしょう?」

お妙は九兵衛に有無を言わず着物と一緒に更衣室に押し込んだ。

「さてと、次は志保ちゃんね」

お妙がにっこりと笑って言った。

「志保ちゃん、普段はどんな感じの服を着てるの?」

「そうですね…寒色系の色の着物が多かったです。といってもだいぶ前ですけど」

「そう。じゃあ今日は明るい色を選びましょうか」

お妙は志保を店の真ん中ほどまで引つ張っていった。

そこにはピンクや黄色の女の子らしい着物がたくさん並んでいた。

「志保ちゃんの目の色には…これがいんじゃないかしら」

そう言ってお妙が手に取ったのは目がさめるような明るい水色の着物だった。

小ぶりの白い花が舞っている。

お妙に強く勧められて袖を通すと、すっとひんやりした心地よさがある。

志保に丁度良い大きさだった。

「いいじゃない。よく似合ってるわ」

お妙が試着室から出てきた志保を見て軽やかに言った。

お妙に押しつけられた着物を着た九兵衛も大きく頷く。

「せっかくだから着て帰って、あのゴリラたちをびっくりさせてあげるといいわ」

もう買うことは決まってるんだな。またもお妙の強引さを垣間見たが、綺麗な着物を着れたことがちょっぴり嬉しくて、何も言わなかった。

「只今戻りました」

報告のために局長室に顔を出すと、近藤は志保の格好を見てお、という顔をした。

「志保、可愛いなあ！ どうしたんだ？」

「妙さんと一緒に買い物してきたんです」

「お妙さんと！？ いやー、やっぱり志保も年頃の女の子だからこ
ういう格好も良く似合うなあ。いやでも、さすがお妙さん。志保の
ために一緒に買い物なんかしてくれるなんてお妙さんは……アレ？
志保？」

自室に戻ろうと廊下を歩いていると、角を曲がったところで山崎と
10番隊隊長の原田右之助にぶつかった。

「あれっ？ 志保ちゃん。その服どうしたの？」

「おーっ、珍しいな！ やっぱり副隊長も女子ってことか」

「原田さん、あなた局長みたいなこと言いますね」

「バカなこと言うなよ志保ちゃん。局長はゴリラだからフサフサじ
ゃん。だけどコイツはハゲだからさー」

「そーいうことじゃねーよ！」

「まあ、そうですね」

志保も原田の頭を見やりながら言う。

「あれ、副隊長？　それどこ見てんの、ねえ？」

「話がそれてるってば…あ、沖田さん！」

山崎が志保の背後に呼びかけた。

目だけ後ろに向けると、相変わらずけだるそうに歩く沖田がいる。

「アレ、雨宮？　お前今日非番だったらしいなア」

「そうですけど」

それどころかなんだかいつにもまして機嫌が悪そうに見える。

「隊長。副隊長の格好どー思う？」

「あ？」

沖田が志保の格好をじろじろ眺めまわしてぼそつと呟いた。

「そこらへんの町娘みてえだなア。不細工な」

そのまま歩いて志保たちの脇を通り過ぎた。

山崎と原田は沖田の言動にぷりぷり怒っていたが、志保は嬉しかった。

もちろん褒められるのだって悪い気はしないが、志保がなにより欲しかったのは――志保だって、普通の女の子という事実だったから。

「さ、てと」

志保は土方に今日ぐらいは怒られる前に済ませようと、部屋に向かいながらうんと伸びをした。

今日の空も、志保の着物と心のように晴れ渡っていた。

第30話 普通の町娘のように（後書き）

ご拝読ありがとうございました！

今回は九兵衛が新しく登場しましたが、もう登場させたいキャラが多すぎて…。

こつこつと書いていけたらいいなと思います。

第31話 紅葉

秋もだいぶ深くなった。

夜が来るのが早くなり、外に出るとひんやり外気が体を包む。

秋雨がしとしと、しとしと……。

そんな、ある日の出来事。

「ああ」

志保は書類の山を前にうめき声をあげて机に突っ伏す。

隊長格ともなると目を通さなければならぬ書類も多い。

だが1番隊の隊長である沖田は書類なんか見ないと誰もが知っているのだ、最初から全部志保のところに回ってくるのだ。

目を通していない書類とすでに目を通した書類と分けておいてある

のだが、前者のほうがはるかに高く積み上げられている。

「女心と秋の空…？ 隊長の気分と秋の空でしょ」

今日は珍しく「書類手伝つてやる」と言っけて持っけていったのだが（もともとこの3分の2が沖田がやらかしたことの後始末）、雨が降っけてきて眠いなどと言いだして結局全部志保のところに戻っけてきたのだ。

「もーいいや。仕事やめ！」

後で土方にどやされるだろうが、今はただ寝っけて転がりたかった。

昼寝モードに入ろうとした、その時。

ニャーア。

「ん？」

なんだかねコのような鳴き声が聞こえた気がしたが…。

耳を澄ませてみても、雨が降る小刻みな音しか聞こえない。

「気のせいかな…」

再び目を閉じた。

ニャーア…

やっぱり気のせいじゃない。

志保は障子を開けて縁側に出ると、きょろきょろ辺りを見回す。

そこには何もいない。

雨に濡れるをためらっていると、軒下からひとつの顔が出てきた。

「ニャア」

あどけない紅い目をした、白い毛並みの1匹のネコだった。

「はあ？ ネコを拾ったただあ？」

土方が素っ頓狂な声をあげる。

そこには会議室になんとか集まっているいつもの顔馴染みメンバーがそろっている。

「ダメだ。元あった場所に捨ててこい」

「アンタはお母さんですかコノヤロー。つか生き物を捨てろだなんてひどい人間ですね」

「何言つてんだ。お前がそもそも拾ってこなかったら捨てる手間もかからなかったんだよ」

「まアマトシ。いいじゃないかネコの一匹ぐらい」

「そうですねトシ。それにこのネコ、ネコ耳生やした時の雨宮に似てますぜ」

ごく最近、志保が沖田の策略でネコの耳としっぽが生えてしまった時があった（第27話）。

「お前にトシとか言われたくねーよ！ ……まあ、でも確かに…ププッ」

「何笑ってんですか！！ 何納得してんですかアア！！」

「仕方ねエ。お前が自分で責任もって飼えよ」

「何か全然嬉しくないのはなんでかなアアア！！」

叫ぶ志保の膝の上で、白いネコがすまし顔でニヤアと鳴いた。

「よし。このネコを飼うことは俺もちろん賛成だ。だがひとつ大きな問題がある」

近藤が志保達に向き直って重々しく言う。

「問題？」

「それは…」

「『それは？』」

「それは……名前だアアアア！！」

「「……………え？」」

土方と志保の声が重なる。

近藤が深刻そうに言うからよほど大事なことなのかと思いきや……
名前？

「ゴリ…局長…ちょっと動物病院で精密検査してきたほうがいいんじゃないですか？ 頭の」

「今完全にゴリラって言おうとしてたよね。それに言い直しても動物病院って言っちゃってるからあ！！」

思い切りわめいてからゴホンと近藤が咳払いをする。

「まあ、とにかく名前ってのは大事なもんだ」

「俺は近藤さんに賛成ですぜ」

沖田もチューインガムを膨らませながらもごもご言う。

「じゃあ…仕方ありません。『第1回チキチキネコの名前を決めましょうかね大会』開催決定です」

「お前らってホントそーいうの好きだよな」

志保の拾ったネコの名前を考えることにした4人。

まず口火を切ったのは名前決めを提案した近藤。

「そうだな…秋だし、『星。あき』ってどうだ？」

「いや、それアンタが星。あき好きなかだけでしょ。つかネコの名前に。入れるなよ」

志保が冷静にツツこむ。

「じゃあサド丸15号ってのは？」

「コレアンタのペットじゃないですから！ ていうかこの子女の子ですよ！」

志保がネコを持ち上げながら怒鳴った。

「あれ、みなさんおそろいで何やってんですか？」

そこに隠密活動の報告書を手に持った山崎が現れた。

「おお、いいところに！ ジミー山崎さん！」

「え？ 地味ネタ久々に登場？ てつきり影薄すぎて忘れられてると思ったのに…」

「ネコの名前？」

「はい。でも真選組ってバカの宝庫じゃないですか。だからまともな名前を考えてくれる人がいなくて」

「今さりげにもものすごい辛辣な言葉吐いたよね」

近藤が涙目になりながら呟く。

「そこでジミ崎さんの登場です」

「いや、何種類も駆使して地味表現しなくていいから」

そう言いながらも山崎はその場に座ってネコを抱え上げる。

「うーん、そうだな…ネコだけにタマとかミケとか？」

「山崎さんありがとうございます。地味過ぎてもダメということが分かりました」

「あれ？ 気に入らなかった？」

山崎は頭を掻いたが冷たい空気にすごすごと退散した。

「結局決まりませんねエ」

志保がため息とともに言う。

「――仕方ねエな」

今までずっと黙っていた土方が口を開いた。

「土方さん、もしや何かいい案があるんですかい？」

「まあな。聞きたいか？」

「もったいぶらねーでさっさと言っちゃってくださいエよ」

「フン……マヨ」「何キメた顔してんだアア!!」「」

カッコつけた土方の頭に志保、沖田、近藤の足が華麗にクリーンヒットした。

「ハア…やっぱりポケ合戦になっちゃうんですね。少しは予想してましたけど」

「こんなもんだろイ」

お茶をすすりながら沖田がしたり顔で言う。

「でもやっぱり決めなきゃいけねーよな」

「ていうかもともと近藤さんが変なこと言いだすからこんな風になっただろーが」

「だって決めなきゃいけねーじゃん！」

「じゃあ…秋なんで『紅葉^{もみじ}』とかどうですか？」

「ニヤア！」

「……え？」「」「」

志保の膝の上に乗っていたネコが大きく鳴いた。

「この名前が、いいの？」

ネコは——紅葉は、もう一度鳴いた。

大きく、嬉しそうに。

「……こんなオチ？」

「そういえばこのネコ……旦那に似てますねィ」

局長室を出て廊下を歩きながら、紅葉を抱える志保に沖田がふと思いついたように言った。

万事屋の旦那に、と沖田は繰り返す言う。

「……銀さんに？」

そんなこと、誰かに言われるまでは少しも気に掛けなかったが、確かにそうかもしれない。

くせつ毛でこそないものの、真っ白な毛並みと鮮やかな紅い双眸。

「お前には銀さんのようにグータラにはなってほしくないけどね」

紅葉は志保の胸に顔を寄せてぐっすりと眠っていた。

第31話 紅葉（後書き）

今回のネコの名前、本当は募集しようかとも思っただんです。

でも全然応募が集まらなかったら悲しいじゃないですか…！！
ひとりでそんなことやってイタイ奴じゃないですか！

そんなこんなで私も「秋だし紅葉でよくね？」というノリで「紅葉」
に決まったわけです。

第32話 「幸せだった」(前書き)

ミツバは好きなキャラのうちのひとりです。

ここから2話分、名付けて「ミツバ命日篇」です。

それではどうぞ！

第32話 「幸せだった」

「ふわぁ、涼しいと寝やすいなあ」

志保は欠伸をしながら誰に言うともなく言った。

いつもは沖田の次に寝坊する確率が高い志保だが、今日は珍しく早起きだ。

目を追うにつれ世界が秋に染まっていく。

山々は赤や黄色に色づき、江戸の町にも時折紅葉の葉が舞い落ちる。

せっかく早起きしたんだから散歩でもと玄関に向かうと、沖田が前を歩いているのが見えた。

こんな朝早くからどこへ行くんだろうか？

声をかけようとしたが――出来なかった。

なんだか、沖田のその背中がいつもより翳りを帯びているような気がしたから。

「隊長…？」

昼過ぎになっても、沖田は帰ってこなかった。

土方の目をかいくぐって巡回をサボり、屯所でずっと待っていたがその姿は一向に現れない。

さすがに不思議に思っ^て近藤に沖田の行方を訊ねようと局長室に向かう。

近藤の笑い声が聞こえ、いるのを確認してから声をかけようと襖に手をあてがう。

しかし、中からふたり分の声がしてきた。

「トシ、最近働き過ぎじゃないか？　ちょっとは休め」

「俺のことは気にすんな」

今ここで土方に会ってしまったら、せっかくバレずにいたのがおじやんになってしまう。

また時間を改めようとその場を去ろうとすると、近藤が志保が今いちばん気になっていることを神妙な、優しい口調で言った。

「総悟は出かけたのか」

「ああ、朝一番にな」

志保は襖にぴったりと耳をくつつける。

もしかしたら沖田が出かけた理由を話すかもしれない。

「また1年か…時間つてのは意外と早く経つもんだ……。でも総悟は忘れることなんざ出来ないだろうな。」

唯一の肉親だった姉を亡くしちまったんだから」

え―――？

「トシ、お前も命日くらい会いに行つてやれよ。総悟だつて本当は……」

「俺はアイツに会いに行く資格なんざねエよ」

土方が聞き取れないくらい低い声で呟いた。

「……………」

志保は黙つてその場を離れた。

自分は何も知らなかったのだ。

沖田に姉がいたこと。

そしてその大好きだった姉を亡くしていたこと。

出会って数ヶ月しか経っていないのだから、それは当り前のことなのかもしれない。

しかしそのことが、すごくショックだった。

胸にぽっかり穴が開いてしまったようだ。

「隊長…辛かっただろうな…」

たった今このことを知った私なんかよりずっと辛くて苦しいだろう。

「雨宮？」

声をかけられても、数秒の間反応することが出来なかった。

のろのろと顔を上げると、そこには朝より少し明るい顔をした沖田が不思議そうな表情で立っていた。

しかし、その直後ギョツとした顔になる。

「雨宮…!？」

どうしたんだろう……？

ぼんやりとそう思った時、自分の頬に涙が伝っているのに気がついた。

「隊長…お姉さんがいなくて、寂しいですか？」

沖田の目が見開かれた後、静かな表情になり志保の涙をそっとぬぐった。

志保は近藤達の話盗み聞いたこと、その内容をすべて沖田に話した。

「そうか、近藤さんと土方アンチキショーに聞いたのかイ…」

「…すみません」

沖田は首を振った。

「別にお前を責めてるわけじゃねーよ。まアいつかはバレることだしな」

そう言っつて沖田はすべてを話してくれた。

沖田の大好きだった姉、ミツバは、早くに亡くなった両親の代わりに沖田を女手ひとつで育てた。

優しくて可憐な大和撫子だったが、肺を患っていて、病気がちだった。

なのに辛いものが異常なほど好きで、よく周りに怒られていたらしい。

そして、ミツバは――――土方に惚れていた。

「俺はよく野郎に嫉妬してやした。野郎がきてから、近藤さんも姉上も俺に構ってくれなくなっちゃったから……」

単に俺は子供だったんでさア、と沖田は自嘲じみた笑顔で言った。

「結局姉上の幸せを邪魔してきたのは、俺。人並みの幸せを味わえないいまま、天国に逝っちまった」

頭に、沖田とよく似ている優しい表情の美しい女性が浮かんた。

「…そうでしょうか？」

沖田が、うつむいていた顔を上げこちらをじっと見つめる。

「私は何も知りません。でも…ミツバさんは、あなた達のこと好きだったから、あなたたちと一緒にいれて幸せだったと思います」

たとえば、それがどんなに短い間だったとしても。

沖田は目の前の少女を声も無く見つめた。

『ぶっきらぼうでふてぶてしくて、不器用で……でも優しいあなた達が大好きだった』

『私……とっても…幸せだった。あなた達のような素敵な人たちと出会えて』

姉が最期に残していった言葉――。

忘れもしないあの言葉が、刹那に頭によみがえった。

自分が姉にしてやれたことは少なすぎた。

姉が自分にくれたたくさんの幸せを、ぜんぶ返すことは到底できなかった。

けれど、幸せだった。

そう言ってくれるなら、俺は――。

「俺が、姉上のことをお前に言わなかったのは……お前には、姉上みたいになってほしくなかったから」

そう。

姉上のように、俺から離れて行ってほしくなかったから。

俺じゃなくて、土方の方に行ってしまうのではないかと恐かったから。

自分のために泣いてくれた、初めての志保の涙はあたたかかった――

次の日、志保は供える花とミツバの好物だと聞いた激辛せんべいを持ってミツバの墓を訪れた。

沖田に教えてもらった墓は、電車で1時間ほど揺られた先にあった。

墓地の坂を登りきった先の墓には、先客がいた。

「副長……」

ミツバの想い人、土方その人だった。

第32話 「幸せだった」(後書き)

本当にミツバ篇は銀魂の中でも好きな話なんです。

沖田と銀さんの絡みも好きだし、沖田や土方の想いが切なすぎます……。

ミツバが亡くなってから何回も命日がきてるんですけど、でもそこはサザエさん方式というご都合主義でスルーしてください。

第33話 今も「幸せです」（前書き）

今回の話を書いたことで全国のミツバ・土方ファンの皆さまの中で不快に思った方がいらっしゃったらお詫び申し上げます。

自分の土方とミツバを汚さないで！ という方は閲覧をお控えください。

第33話 今も「幸せです」

志保は持ってきた激辛せんべいと供えの花を「沖田家之墓」と記された墓の前にそつと置いた。

「雨宮…お前なんでここに…」

「沖田さんに聞きました」

キツカケはあなた達の会話ですけど、と心の中で付け足す。

「そうか…」

「ここに眠っていらっしゃるんですね…ミツバさん」

「……………」

「土方さん…あなた本当は会いに行く資格がないと思いつつも、毎年来ていたんでしょう？」 沖田さんに気を使って命日の次の日に「

志保はいたわるような、しかしそれでいて有無を言わさない視線で言った。

「そんな大層なもんじゃねエよ、俺ア」

志保を見ずに土方は言う。

「俺はアイツのためと言ってずっとアイツに向き合わずにきた。それがアイツの幸せにつながると思っていた。だが……」

低い声で語りながらそこでじつと墓を見つめる人物は、普段攘夷志士から恐れられている鬼の副長なんかではなくただのひとりの人間のように思えた。

「それは結局俺の自惚れだったんじゃないか、アイツの…幸せを願いながらも向き合っのが怖くて逃げてきたんじゃないかと」

アイツが――ミツバが死んでからそう思うようになった。

「……………」

「ざまアねエよな。鬼の副長たる俺がこんなこというたア」

土方は嘲笑を浮かべる。

その表情は、昨日沖田が姉のことを語る時に見せたそれとそっくりだった。

「お前の言うとおり、ずっとその日は避けてきた。…どっちにしろ、総悟は気に入らねエと思うがな」

「あなた達は……似た者同士ですね」

「総悟と俺が…？」

土方が志保に目を向ける。

比べられることなら多々あった沖田と土方だが、似ていると言われたのは初めてなのだろう。

「土方さんも沖田さんも、本当はミツバさんと互いの幸せを願っているのに空回りして…でもミツバさんはそのことを分かっている、

ふたりの幸せを何より望んでいて」

「……総悟は俺の不幸は望んでも幸せなんて……」

「そんなことはありません。だって沖田さんは本当は土方さんのことを――」

「おっと、余計なことベラベラしゃべってんじゃないよ」

また、志保達が背を向けていた坂道から見慣れた隊服姿の男が現れた。

「沖田さん」

「総悟……お前今日は仕事だよな？」

「見ての通りでさア」

沖田が肩をすくめてみせた。

沖田は志保と土方の間をすり抜けて、墓に手を合わせた。

長いこと——そうしていた。

ただ、動かずにずっと。

しばらくして沖田は閉じていた目を開けると、志保達に向き直った。

「土方さん…俺ア知ってましたぜ。アンタが毎年来てたこと。無関心を装いながらも、ずっと姉上のことを考えていたこと」

土方は微動だにしない。

そのことには志保も気付いていた。

墓に供えられた左右の花の種類が、全然違うものであったこと、激辛せんべいが2個あったこと…などから。

「土方さん……俺はアンタが心底嫌いだった。今でもそうでイ。けど俺は姉上にただ幸せになってほしかった」

「アンタにも——素直になってほしかった。土方さん」

「……それをお前が言うかよ」

土方の口からはかすれ声しか出てこなかった。

志保は志保で胸がいっぱいになって何も言えなかった。

普段不器用でいじっぱりで、素直じゃないこのふたりの本音を聞ける機会なんてなかなかない。

でも今日は、ふたりの気持ちをたくさん聞けた。

それをきくと天国のミツバさんも——喜んでいく
れるはずだ。

「来年からは…アンタが命日に来てくだせエ。俺はもう来ないことに決めやした。姉上が振り返っちゃダメだって、言ってたんで」

そう言う沖田の顔は晴れ晴れとしていた。

紅葉が一枚、澄んだ青い空のどこからかひらりとミツバの眠る墓へ
舞い落ちた。

第34話 マジカルバナナ

真選組の隊長格の隊服をキチンと身にまとった3人が夜の闇の中でネオンを放つ高層ビル――もとい「警察庁」の最上階に立った。

廊下を進んでいくと、いちばん奥の部屋の前にはいかにもボディーガードという感じのスーツ姿の男がふたり。

3人はそれぞれ懷から警察手帳を取り出し、男に見せる。

『武装警察真選組局長 近藤勲』

『武装警察真選組副長 土方十四郎』

『武装警察真選組1番隊副隊長 雨宮志保』

男はそれらを見るとすぐさま部屋に通した。

中には足を机に投げ出した男が葉巻をふかしていた。

サングラスをかけ、いかにもヤクザという感じの中年男だ。

「オイ、とつつあん。いきなり呼び出して何の用だ」

とつつあんと呼ばれたその男は、松平片栗虎――
組を初め数々の警察部隊をまとめ上げる警察庁長官だ。

――真選

「しかも雨宮を連れてこいつて？ 言つとくがコイツは無愛想すぎてキヤバクラ勤めなんか出来ねーぞ」

「アンタに言われたくありませんよ」

志保が横目で土方を睨みながら言った。

その時、志保に向かって松平のサングラスの奥の鋭い目が輝いた。

「アンタが志保ちゃんか」

「え？ そうですけど…」

「近藤―、なんでこの子が入った時報告しなかったんだ」

「えっ？ 何言ってんだよつつあん。俺ちゃんと直接報告したぞ」

「嘘つけ、おじさんそんなことひと言も聞いてねエぞ。もー中崎からから聞いてびつくりしちゃったよー巷で真選組唯一の女隊士が噂になってるってよオ」

松平はそう低いボイスで軽く言いながら近藤に向かって銃弾を放った。

「ぎよわアアア！！ あばば、何すんだよつつあん！」

「お前らみたいな飢えた狼どもの中にひとりか弱い志保ちゃんがいると思うとなア、いやーやつぱきゃバクラに夢中になって報告ないがしろにするんじゃないかった」

「やつぱり報告してたじゃん！！」

近藤の命からがらのツッコミを無視して松平は志保に向き直った。

「まあ、とにかくだ。おじさん応援してるからテキトーに頑張れや」

志保は黙って頭を下げた。

「見かけほど悪そうじゃないですね、あの人」

部屋を出てエレベーターを待ちながら志保が言った。

「いや、あのおっさんの中身は見かけそのものだからね」

危うく殺されそうだった近藤が慌てて訂正する。

「ほぼマフィアみたいなもんだぜ。本人も言ってたしな」

左右から松平のことを言われそれを軽く受け流しているうちにエレベーターがきた。

乗り込み、エレベーターが閉まる。

「局長、私腹減りました」

「そうだな、俺もだ！」

「何か食ってくか」

急に呼ばれたので夕飯を食べる時間がなかったのだ。

「お前ら、何がいい？　今日は俺のおごりだ」

近藤が威勢よく言う。

「私パフェがいいです！」

「何言つてんだこのガキ。晩メシだぞ。俺はカツ丼がいい」

「アンタカツ丼頼んだらマヨかけて犬の餌にしちゃうじゃないですか」

「なんだとゴラァ、マヨネーズなめんなよ！！」

「オイ、お前らちょっと待て……」

「「ああ！？」」

ギヤーギヤー騒ぎ始めたふたりは近藤の制止にメンチを切る。

だが近藤はそれに気付かないほどなんだか動揺している。

「このエレベーター……止まってないか？」

「……………」

「……………」

確かにエレベーターの上の階を表示する数字は9から光が動かない。

「……………9階から8階の間が長いんじゃないですか？」

「そんなビルねえだろ。来た時は普通だったぞ」

「やっぱり……………動いてない？」

「……………」

次の瞬間近藤が金属のドアをガンガン叩き始める。

「誰か助けてくれエエエ！！ 俺は死ぬならお妙さんの膝もとで死にたいイイイ！！」

「仮にも局長なんだから取り乱さないでください。誰かまだひとがいるでしょ」

志保が落ちついて言った。

「今日はなんかとつつあんがキャバクラ記念日とか言ってみんな9時にはいないらしいぞ」

「警察庁が何やってんの！？ …じゃあ長官がエレベーターを使うでしょう」

「あの人、最近血圧がヤバいとかで階段使うことにしたらしいぜ」

「…つまり何ですか。私達は閉じこめられたと？」

「ああ」

「助けも来れないから明日の朝まで待てと？」

「そついうこつた」

「……ふざけんじゃねエぞオオオ！！」

「ゴフオツ！！」

志保のアップパーカットによって土方は思いっきり頭を硬い壁に打ち付けた。

「私はなア、隊長の書類のせいで昼飯も抜きだつたんだよオオオオ！！
もう腹と背中がメンチ切り合ってますよコノヤローオオオ！！」

「それ完全に総悟のせいだろ！！ だあーっ、落ちつけよ！！」

「……………」

「……………」

「……………」

3人は膝をかかえて地べたに座り込んでいる。

(…………ヤベエ、空気が重くて仕方ねエ)

さっきから全員黙りこんで何分も会話がない。

志保と近藤に至っては負のどす黒いオーラがにじみ出ている。

ここは俺がなんとかしなければ……！！

「なア……なんかしねエか？」

「…は？」

ふたりがボォーツと頭を上げる。

もう目が死んでる。

「……首つりゲームとか？」

「違エよ！　そうじゃなくてだな…そうだ、マジカルバナナなんかどーだ？」

マジカルバナナとは…

説明するのが面倒臭いので分からない方はニコニコで検索！

「じゃあ行くぞ…」

「なんであのニコチンバカあんなにテンション高いんですか局長」

「さあ…」

「マジカルバナナ、『バナナ』と言ったら『黄色』！　ハイ！」

「『黄色』と言ったら『光』」

「ハイ」

「『光』と言ったら『永久』に戻らない」

「…ハイ」

「と、『永久に戻らない』と言ったら『時間』！ ハイ！」

「『時間』と言ったら『もう振り返ることはできない』」

「ハイ」

「『もう振り返ることはできない』と言ったら『あの時のチーズケーキ』」

「ってオイ、お前らネガティブ思考もいい加減にしろよオオオ！！」
土方がたまりかねて叫ぶ。

「どんだけだよ！！ つーか雨宮『あの時のチーズケーキ』って完全に総悟に食べられちゃった時のこと引きずってんだろーが！！」

「実はアレ完全生産限定盤でもう売ってないんですよ…」

「過去のことは振り返るなアアア！！ じゃあチーズケーキで行くぞ！」

土方がまた手を叩きだした。

「『チーズケーキ』と言ったら『甘い』！ハイ」

「『甘い』と言ったら『俺達の無謀さ』」

「ハイ」

「『俺達の無謀さ』と言ったら『助かること』」

「オイイイ！！ お前らほんとに、……！！」

その時土方の瞳孔がさらに見開かれ、次の瞬間ぐらりと横向きに倒れた。

「トシ！！」

「副長、酸素が薄い中であんなに騒ぐから……！！」

「へへっ……やっといつものテメーらに戻ったな」

「「！！」」

「落ち込んでるテメーらなんて……らしくねーよ」

「……」

ドガン

「「！」「」

狭いエレベーターの中の空間がシリアスムードになったその時、激しい破壊音によって硬い金属のドアが吹き飛んだ。

舞い立つ埃の中からバズーカを背負った男が現れた。

「みなさん生きてやすか」

「た、隊長！」

「総悟……！」

なんとそれはこの状況を心から楽しんでいる表情の沖田だった。

「なんでお前がここに？」

「とっつあんからアンタ達がエレベーターの中に閉じ込められてるかもって連絡貰ったんでさア」

「それならなんでもっと早く助けに来てくれなかったんだ。もう閉じ込められてからだいぶ経ってるぞ」

そう近藤が問うと沖田はニヤリと笑った。

「いや〜どーせなら土方さんが酸素不足でへばってからにしようと思ったんですが、あとちょっとでしたねィ、残念でさァ」

「…なんだと総悟オオ俺が叩き斬ってやらァ!」

酸素不足もなんのその、土方が刀を抜いて沖田に斬りかかった。

「…………お腹すいた」

ワーワー騒がしくなった中で、志保のお腹がぐつと鳴った。

第34話 マジカルバナナ（後書き）

1カ月近く投稿できなくてごめんなさい！

実は先日からテスト期間でして、普段まったく勉強をやらない私はそのせいで忙しかったのです…。

本当は今もまだテスト中なんですけどね。

このあとも体育祭、部活の大会と忙しいので投稿できる機会が減るだろうと思いますが、よろしく願います。

第35話 大人の空色（前書き）

もう3日も過ぎちゃいましたが、神楽ちゃん。
誕生日おめでとございます！

文化の日が誕生日なんて毎年休みでいいですねえ。

第35話 大人の空色

静かな秋の午後。

真選組副長土方十四郎は心おだやかに刀の手入れをする。

殺風景な部屋には大好きな煙草のにおいがつまっていて、とても落ち着く。

鬼の副長たる土方も静かで平穏な生活に憧れたりするものだ。

そんなことは望むだけ無駄だと思っているが、それだけにこの刹那のひとときを大切にする。

しかし……

「副長オオオオ！」

ピキピキッ

そんなものは儚く一瞬で壊されるものである。

山崎、原田を筆頭に隊士たちが部屋になだれ込んできた。

「副長、聞いてください！」

「実は……」

ドガン

「テメーら、人の部屋に入る時は合図くらいしろ。いきなりだと準備が出来ねーじゃねエか」

土方は煙草をふかしながら説教口調で言った。

（いきなりバズーカぶつ放す奴に言われたくねーよ！！　つーか何の準備だよ）

黒焦げになった隊士たちの心は皆同じだったが、そんなことは口にした瞬間に抹殺されるので誰も怖くて言えない。

「で、用件は何だ？」

「はい、実は雨宮副隊長に関することなんですけど……」

先ほどの爆発でアフロになった山崎が口火を切る。

「雨宮の？　つーか何でアフロなんだお前」

「……。副隊長、携帯電話持ってないですよ。だから連絡取りにくくて仕方ないんですよ」

山崎は理不尽な土方に顔をひきつらせたが、気持ちを静めてやんわりと言った。

「そんなのお前らの足で探せばいいじゃねーか。つーか何でホントにアフロなんだよ。お前の髪はアフロになりやすい髪質なのか」

「うるせエエエー！！　アフロにしたのはお前だろーが！！」とはいえず山崎はすごすごと引き下がってしまう。

土方に足蹴にされる山崎に代わって原田が応戦する。

「だけどよオ、副長。数分の差が戦いの明暗を分けるってアンタい
つも言ってるじゃねえか」

「うるせエ。つーかなんでお前はアフロじゃねーんだ。お前も爆発
したらハゲからアフロに変われや」

「どんなムチャブリ!？」

「まあまあ。アフロになるよかいじゃないか、ハゲ田」

「誰がハゲ田だ!！」

無茶な要求をしてくる上司^{土方}とフォローにならないフォローをしてく
る山崎に、原田のツッコミが炸裂する。

「副長だつてケータイ使ってるじゃないですか。あれでも年頃の女
の子ですよ、志保ちゃんは」

「……………」

土方が心を入れ替えたかに見えたその時。

ドガン

本日2発目の爆発音が響いた。

副長室の襖が吹っ飛ぶ。

どうやら此度の爆発は外で起きたもののようだ。

灰色の煙の中から人影が現れる。

バズーカをよっころしょと担ぎ直す声が聞こえた。

なんかこの光景、前話でも見たような…。

土方の頭の中で誰かの声がぼんやり聞こえたが、土方はそれを振り払った。

「あ、すみません副長」

現れたのは、たった今話題にのぼっていた志保だった。

「副隊長… いったい何やってるんだ？」

原田がケホケホ咳をしながら聞くと、志保は二カッと笑って軽い調

子で説明し始めた。

「実はですね、みなさん御存じの万事屋坂田銀時さんにセ。ンイレ。ン限定発売のショートケーキ、最後のひとつタッチの差で買われちゃったんです。で、イライラしてたら副長室の前を通りかかって、つい手が滑っちゃったんですよ」

どうもご迷惑おかけしましたー、と志保はおなざりに頭を下げた。

もはや怒る気力もなくした土方がため息をつきながら言った。

「雨宮…お前、最近総悟に似てきたな」

「え、ケータイ？」

志保が局長室に呼ばれ向うと、嬉しそうに笑った近藤と苦々しい表情の土方が待っていた。

「おう、志保！」

「……………」

まだ数日前のことを怒っているのだろう。

だが土方がこんな表情なのはもはや慣れきっていて、何も気にならない。

逆に土方がにつこり笑っていたりしたら吐き気がするほど気持ち悪すぎる。

明日地球は滅びるだろう。

「で、何の用ですか？」

志保がそっけなく聞くと、近藤はさらに笑顔を深め、土方は逆にますます不機嫌になった。

「ん！」

「なんですか、これ？」

「ケータイだよ、ケータイ！」

土方がチツと舌打ちした後には叫んだ。

近藤が差し出したそれは、空色をした手のひらに収まりきるくらいの小さな携帯電話だった。

「そんなことは分かってますよ。なんで私にこれを渡すんですか？」

「隊士達からお前と連絡がとりにくくて仕方ねえと苦情が来た。不本意だがお前も携帯くらい使えるようにしとけ」

「……………」

初めて手にしたケータイは、ほんのちょっぴり重くて大人っぽい。

「隊長ー、ケータイの使い方教えて下さい」

志保がひよっこり沖田の部屋に顔を出すと、沖田は畳に例の趣味の悪いアイマスクをつけて寝っ転がっていた。

沖田はアイマスクをずり上げて欠伸交じりに言った。

「あ？ お前そんなことも知らねーのかイ」

「だって副長に説明もなしにいきなり渡されたんですもん」

沖田はぶつぶつ言いながらも基本の操作を志保に教えてくれた。

最後に沖田は志保のケータイを取り上げ、何かいじった。

「やっぱりあのムツツリ野郎、自分のメアドと番号登録済みでさア。ま、は行よりあ行の俺の方が早く来るからいいけどネ」

そうけだるげに言うと志保を自分の部屋に一人残して出て行ってしまった。

なれない手際で開いたアドレス帳には、沖田のメールアドレスと携帯番号が登録してあった。

志保は沖田のように寝っ転がってつぶやいた。

「……………今回私出番少ないですか」

後日、志保のケータイのアドレス帳は真選組隊士たちをはじめ、いろいろな人たちのアドレスが登録されたそう。

第35話 大人の空色（後書き）

ちなみに銀さん達は貧しすぎてケータイ持ってなかったので、万事屋の電話番号を登録しました。笑

次章予告

地面に流れる真っ赤な血。

それに黒や茶色の美しい髪の毛の残骸。

そして、左目を失った少女達。

それが今江戸で多発している事件の現場に決まって残されているものだった。

「この事件の手口がな…酷いもんだよ。年頃の町娘達を誘拐して、髪をバツサリ切って左目をえぐりとっちまうんだ。でも、決して命は奪わないんだとよ」

街で噂にのぼるある怪しげな名前――。

「スノードロップ？」

少女は許せなかった。

何の罪のない市民を傷つける犯人を。

それを止めることのできない無力な自分を。

だから
.....

「潜入捜査の許可をお願いします」

「お前の好きにしたらいい。やってみろ」

しかし、その先で少女が見つけたものは――。

「俺は許せないんだよ……妹を苦しめた奴らを!!」

「あなたの罪は妹さんを護れなかったことじゃなくて、自分を護れ

なかったことです」

「お前を失いたくなんか、なかった……」

少女が見つけた真実とは？

「スノードロップ篇」次話より更新スタート

第36話 恐怖（前書き）

今回血などの痛々しい表現がございます。

苦手な方はご遠慮ください。

第36話 恐怖

「はつくしょん！」

特大のくしゃみがシンとした部屋に響いた。

11月に入って、めっきり寒さが増してきた。

真選組の隊服にもコートの用意がされ始めている。

チーンと鼻をかんでいると、正座した膝の上に何か軽くてふわふわしたものが飛びのってきた。

「紅葉」

真選組、もとい志保のペットの紅葉だ。

真っ白でふわふわな毛並みに、鮮やかな紅い目が特徴のネコ。

志保が書類整理などの机仕事に追われ疲れているとき、気まぐれにやってきて志保のことを癒してくれる。

「……………」

紅葉の手触りのよい毛並みを無意識に撫でながら、志保は物思いにふけっている。

「ニャーア…」

紅葉がひと鳴きしたが、志保は反応することなくただひたすらぼんやりとしているだけだった。

「これで6件目か」

土方が暗闇の中で苦々しげに舌打ちしながらつぶやいた。

最近江戸の街で若い町娘ばかりが襲われる事件が多数発生していた。

志保はたまたま事件が起るとき他の攘夷浪士のヤマの指揮をとっていてまだ実際の現場を見てはいなかったのだが、松平や近藤から聞くその有様は酷いものであった。

「この事件の手口だがな…酷いもんだよ。年頃の町娘達を誘拐して、髪をバツサリ切って、左目をえぐりとつちまうんだ。でも、決して命は奪わないんだとよ」

そして実際に――それはあまりにも残酷なものだった。

若い娘が目から大量に出血している――。

そのような通報を受けていちばん最初に駆け付けたのが沖田と志保の率いる1番隊だった。

連絡された場所に急ぐと、人ばかりが出来ていた。

人垣を押しのかけて真ん中に行くと、壁にもたれかかりぐったりした志保と同じ年ごろの少女がいた。

荒い息使いで、押さえた左目からは血が溢れ出しそれがどんどん流れて地面に血だまりをつくっていた。

そのすぐわきには、無残に切られた長く美しい髪――。

「!!」

志保はその瞬間、血だまりから目が離せなくなった。

全身から汗が噴き出す。

「雨宮、どいてろイ！」

沖田が志保を押しつけた。

少女に駆け寄って応急処置を施し、救急車の手配や土方への連絡などを指示した。

その間志保はずっと震えながらその場から動けなかった。

少女が1番隊の隊士に付き添われ救急車で去った後、沖田に声をかけられてやっと我に返った。

「雨宮、大丈夫かい？」

「…すみません」

その後駆け付けた土方と2番隊に任せて、志保は沖田に付き添われ

先に帰ることにした。

「副長、被害者の意識が回復したそうです」

志保達が帰ってすぐ、山崎が土方の元へやってきた。

「そうか」

「彼女は夜９時半ごろかぶき町をひとりで歩いていましたそうです。家に帰る近道として路地裏に入った直後何者かに襲われたと言っています。犯人の顔は見ていないそうです」

「そうか…、分かった」

「あと副長、もうひとつ気になる情報が」

「なんだ」

山崎が声をひそめてつぶやいた。

「救急隊員の話だと、ぶつぶつうわ言のように同じ言葉を繰り返していたそうです」

『スノードロップ』と」

「スノードロップ？」

剣のこと以外何も知らない土方はその単語自体聞いたことがなかった。

「分かった。その『スノードロップ』とやらについてももう少し詳しく調べておけ」

山崎も去ったあと、土方は煙草に火をつけながらため息をもらした。

—— 今回のヤマ、結構ヤバいな……。

志保は沖田の部屋で正座しちょこんと静かに待っていた。

部屋の主は今は志保をひとり残しどこかへ行ってしまった。

沖田はわざとひとりになる時間をくれたのかもしれない。

それは志保にとってとてもありがたかった。

（私…あのとき体が動かなかった）

真選組に入隊してから今まで、何度か命をかけた死闘を潜り抜けてきたこともあった。

血なんていくらでも見慣れているはずだった。

なのに――……。

あの何の罪のない傷つけられた少女から流れ出た目がくらむほどの

紅い血が、

怖くて。

怖くて。

普段虚勢を張っていても、やっぱり自覚してしまった。

私は弱い――。

そのとき、襖がガラリと開いてマグカップをふたつ持った沖田が現れた。

志保の正面に座り、マグカップを志保に手渡す。

「…これは？」

「ホットミルクでイ。体があつたまるゼイ」

マグカップの中身の湯気を出した白い飲み物は、ひと口ぐんと飲

むと体がすみずみまでぽかぽかあたたかくなった。

「一体どうしたってんでさア」

「……………」

志保はうすい桃色のマグカップをぎゅっと握りしめて、ぽつりと言った。

「分かりません…。体が痺れて動かなくて、ガタガタ震えて…」

怖かったです」

志保が誰かの前で「恐怖」という感情をあらわにしたのは初めてだったかもしれない。

「……………」

「人を斬ったことだって、数え切れないほどありました。だけど、生きながらに体にも心にもあんなに深い傷を負っていることが、どうしようもなく怖かったんです」

こんなに本音を言えるのは、なんでなんだろう。

私が少しは素直になれたからなのかな。

「土方さんに言って、捜査から外してもらえばいい。少しの間くらい休みをもらうことだって出来まさら」

沖田が気遣うように言った。

「ありがとうございます」

だが、志保の心は決まっていた。

沖田に話を聞いてもらって心が洗われ、本当の自分の気持ちを見ることが出来た。

「本当に怖いんです。でもそれと同じくらい、許せないんです」

沖田は何が、とは聞かなかった。

志保の真剣な目がすべてを語っていた。

沖田にはそれが読み取れた。

罪のない少女達を傷つける犯人。

それを止めることのできない自分。

「だから……」

「失礼します」

志保は静かに局長室の襖を開けた。

中にはあらかじめ訪問を伝えておいたので近藤と土方の姿もあった。

「なんだ、用ってのは」

土方がいくぶんか厳しくない声で聞いた。

「はい。今回の連続少女誘拐事件のことなんですけれど――

潜入捜査をお願いします」

第36話 恐怖（後書き）

なんだか最初予定していた話よりだいぶ違う感じになりました…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2009u/>

銀魂 - Lonely rainy day -

2011年11月18日06時16分発行